

福岡市早良区

田 村 遺 跡

— II —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集

1984

福岡市教育委員会

田 村 遺 跡

— II —

—福岡市早良区田所在遺跡群の調査—

1984年3月

福岡市教育委員会



卷頭図版



田村遺跡第2地点古河川

序

早良平野の中に位置する田村地区は近年急速に宅地化が進んでいるところです。

福岡市教育委員会は福岡市住宅供給公社の委託を受けて田村団地内の埋蔵文化財の発掘調査を昭和55年度から実施しています。

本書は昭和55年度から56年度にかけて調査した結果をまとめたものです。報告書にみられるように弥生時代の水利施設を検出するなど多くの成果をあげることができました。本書が文化財保護思想育成の一助として市民の皆さまに広く活用されることを願うとともに研究資料の一つとなれば幸いです。

調査から資料整理にいたるまで、地元関係者をはじめ多くの人々の協力に対し、心から感謝の意を表するものです。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

1. 本書は福岡市住宅供給公社による田村畠地建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が昭和55（1980）年度から継続して発掘調査を行っている田村遺跡の第2次調査報告である。
1. 本書で取り扱ったのは、昭和55年度発掘調査を行った第1地点と第2地点に関するものである。ただし第2地点の古墳時代～中世の遺構については「田村遺跡Ⅰ」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集、1982）すでに報告を行っており、本書では遺物についてのみ報告した。
1. 現場での遺構実測には山口謙治・浜石哲也・渡辺和子・杉山富雄・大橋隆司・岩切幹嘉があたった。
1. 出土遺物の実測には浜石・大橋・岩切・赤司善彦・岡部裕俊・佐藤一郎・上敷頼久があたり、一部山口の協力を得た。
1. 製図は浜石・大橋・赤司・岡部・村上かをりが行った。
1. 本書に使用した写真のうち、現場での撮影は浜石、遺物撮影は松村道博（文化課）が行った。
1. 嶋倉己三郎先生には樹種の鑑定で多大な協力を得、また玉稿をいただき、本書に載せることができた（IV-3、V-3-(3)）。
1. 本書の執筆は、V-2-(3)の純文式土器の部分、V-4-(2)、(3)、(8)を赤司、V-3-(2)の大製品の項、V-4-(6)、(7)を岡部、残りを浜石が行った。
1. 本書の編集は浜石が行った。

本文目次

序	本文頁
I 調査にいたる経過と概要	1
II 遺跡の立地と周辺の歴史的環境	3
III 調査地点の概要	4
IV 第1地点の調査	5
1 概要	5
2 検出遺構と遺物	6
3 田村遺跡第1地点から出土した木質遺物の樹種	15
4 小結	16
V 第2地点の調査	17
1 概要	17
2 繩文時代の遺構と遺物	17
(1) 遺構	17
(2) 遺物	19
(3) 小結	28
3 弥生時代の遺構と遺物	33
(1) 遺構	33
(2) 遺物	40
(3) 田村遺跡第2地点から出土した木質遺物の樹種	68
(4) 小結	69
4 古墳時代～中世の遺物	72
(1) 棚出土遺物	72
(2) 据立柱建物出土遺物	74
(3) 穫穴住居跡出土遺物	76
(4) 上塙墓出土遺物	78
(5) 土塙出土遺物	79
(6) 溝出土遺物	83
(7) その他の遺構出土遺物	85
(8) 包含層・表土出土遺物	88
(9) 小結	90

図 版 目 次

	本文対照頁
卷頭図版 田村遺跡第2地点古河川	-
図版1 田村遺跡周辺航空写真(1/5万 1980年11月撮影)	3
図版2 第1地点 1 南より 2 東より	5
図版3 第1地点 1 溝・土壤 2 SX01杭列(北東より)	6
図版4 SX01杭列 1 南より 2 遺物出土状況	8
図版5 第2地点全景(東より)	17
図版6 1 第2地点西側(南より) 2 繩文時代埋甕状遺構	17 18
図版7 第2地点古河川 1 東より 2 南西より	33
図版8 古河川5・6区 1 東より 2 南西より	33
図版9 SX17棚状遺構 1 西より 2 東より	33
図版10 SX17棚状遺構 1 北より 2 縮部	33
図版11 SX18棚状遺構 1 北より 2 西より	37
図版12 SX16水溜状遺構 1 東より 2 木製農耕具出土状況	40
図版13 1 SX16・SX17 2 古河川4区とSX15	33・40 38
図版14 古河川5・6区木製品出土状況	33
図版15 古河川3区 1 東より 2 SX14石組遺構	39
図版16 SX13石組遺構 1 西より 2 北より	39
図版17 1 古河川1・2区(南より) 2 古河川1区(北より)	39 39
図版18 出土上器I	11・20
図版19 出土土器II	40・72・74
図版20 出土土器III	76
図版21 出土上器IV	78
図版22 出土土器V	79
図版23 出土土器VI	83・85・88
図版24 出土石器I	22
図版25 出土石器II	27
図版26 出土木器I	46
図版27 出土木器II	46
図版28 出土木器III	46
図版29 出土木器IV	46
図版30 出土木器V	46・54
図版31 出土木器VI	54
図版32 田村遺跡第1・2地点現況航空写真(北より1983年12月撮影)	4

挿 図 目 次

本文頁

第1図	周辺の遺跡 (1/5万)	2
第2図	田村遺跡調査地点図 (1/4500)	4
第3図	第1地点全体図 (1/250)	5
第4図	S K02・03七塙央測図 (1/40)	6
第5図	満出土上器実測図 (1/3)	7
第6図	S X01杭列実測図 (1/60)	8
第7図	S X01杭列出土土器実測図 I (1/3)	13
第8図	S X01杭列出土土器実測図 II (1/3)	14
第9図	S X01縄文灰坑実測図 (1/8)	15
第10図	縄文時代調査区 (1/100)	18
第11図	堆疊状遺構実測図 (1/10)	18
第12図	縄文式土器実測図 I (1/3)	19
第13図	縄文式土器実測図 II (1/3)	20
第14図	石器実測図 I (1/1)	23
第15図	石器実測図 II (1/1)	24
第16図	石器実測図 III (1/1)	25
第17図	石器実測図 IV (1/1)	26
第18図	石器実測図 V (1/2)	29
第19図	石器実測図 VI (1/2)	30
第20図	石器実測図 VII (1/2)	31
第21図	古河川 5・6 区全体図 (1/100)	折り込み
第22図	S X17棚状遺構実測図 (1/40)	35
第23図	S X18棚状遺構実測図 (1/40)	36
第24図	S X15灰測図 (1/40)	37
第25図	S X14実測図 (1/40)	38
第26図	S X13実測図 (1/40)	39
第27図	出土土器実測図 I (1/3)	41
第28図	出土土器実測図 II (1/3)	42
第29図	出土土器実測図 III (1/3)	43
第30図	木器実測図 I (1/4)	45
第31図	木器実測図 II (1/4)	折り込み
第32図	木器実測図 III (1/4)	47
第33図	木器実測図 IV (1/4)	48
第34図	木器実測図 V (1/4)	49
第35図	木器実測図 VI (1/4)	50
第36図	木器実測図 VII (1/4)	折り込み
第37図	木器実測図 VIII (1/4)	52
第38図	木器実測図 IX (1/8)	折り込み
第39図	木器実測図 X (1/8)	55
第40図	S A棚出土遺物実測図 (1/3)	72
第41図	S B掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)	73

第42図	S C 積穴住居跡出土遺物実測図 I (1/3)	75
第43図	S C 積穴住居跡出土遺物実測図 II (1/3)	76
第44図	S K 土壙墓出土遺物実測図 (1/3)	78
第45図	S K 土壙出土遺物実測図 I (1/3)	80
第46図	S K 土壙出土遺物実測図 II (1/3)	81
第47図	S D 溝凸土遺物実測図 I (1/4)	83
第48図	S D 溝山上遺物実測図 II (1/3)	84
第49図	S X 20出土遺物実測図 (1/3)	86
第50図	S X その他の構造・ピット出土遺物実測図 (1/3)	87
第51図	表上・包含層出土遺物実測図 (1/3)	89

表 目 次

本文頁

第1表	S X 01出土杭材観察表 I	9
第2表	S X 01出土杭材観察表 II	10
第3表	S X 01出土杭材樹種一覧表	15
第4表	S X 17構築杭杭種・樹種一覧表	34
第5表	S X 18構築杭杭種・樹種一覧表	36
第6表	第2地点出土木製品観察表 I	57
第7表	第2地点出土木製品観察表 II	58
第8表	第2地点出土木製品観察表 III	59
第9表	第2地点出土木製品観察表 IV	60
第10表	第2地点出土木製品観察表 V	61
第11表	第2地点出土木製品観察表 VI	62
第12表	第2地点出土木製品観察表 VII	63
第13表	第2地点出土木製品観察表 VIII	64
第14表	第2地点出土木製品観察表 IX	65
第15表	第2地点出土木製品観察表 X	66
第16表	第2地点出土木製品観察表 XI	67
第17表	第2地点出土木製品観察表 XII	68
第18表	第2地点出土杭材樹種一覧表	69

付 図

付図 1 田村遺跡第2地点全体図(1/200)

付図 2 田村遺跡第2地点古河川(1/100)

I 調査にいたる経過と概要

福岡市およびその近郊では、人口の増大、交通の整備などもあいまって、住宅建設の勢いはとどまるところを知らない。田村遺跡の所在する早良平野でも、1970年以降、公共、民間を問わず、大型の開発建設が進んできた。これに伴う発掘調査も決して少なくはなかった。

福岡市早良区大字田中に市営住宅を建設する計画があがり、福岡市建築局より文化課へ当該地の埋蔵文化財有無についての照会がなされたのは1979（昭和54）年であった。対象地は約10万m²を占め、そのほとんど全域が前年に行った分布調査で遺物の散布をみており、田村遺跡群として登録されていた。文化課では建築局および福岡市住宅供給公社と商談を行い、各年度ごとにその年度の住宅建設予定地を発掘調査することにした。第1年度分として同年9月に試掘調査を行い、建設地15,000m²中3,800m²に遺構の存在を確認した。（第1・2地点）。再び協議を行い、一部設計を変更して、遺跡にかかる以外の部分から住宅建設は行われた。発掘調査は翌1980年の12月から開始した。以後1983年度までに以下の3次にわたる発掘調査を行っている。

第1次 第1・2地点 2,650m² 1980. 12. 5～1981. 4. 14

第2次 第3・4・5地点 12,820m² 1981. 4. 22～1982. 5. 15

第3次 第8・9地点 8,500m² 1983. 1. 20～6. 15 （重層面積は含まず）

このうち第1次発掘調査にかかる成果の一部は『田村遺跡I』（福岡市埋蔵文化財調査報告第89集）として1982年に刊行している。

この間の発掘調査・整理関係者は以下のとおりである。

調査委託 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

三宅安吉（係長、前任）、柳田純季（係長）、岡島洋一（事務）、山口謙治（第1次調査）、横山邦継・二宮忠司（第3次調査）、浜石哲也（第1～3次調査、整理）

また本報告にかかる第1次発掘調査・整理では以下の人々の協力を得た。

調査・整理補助 渡辺和子、小林義彦、杉山富雄、岩切幹嘉、大橋隆司、上敷領久、佐藤一郎、赤司善彦（明治大学）、岡部裕俊（同志社大学）、村上かおり（福岡大学）

発掘・整理作業 横光雄、尾崎達也、又野栄子、下郡フミ子、藤崎テル子、柳ツイ、菰田洋子、菰田オリエ、松隈ユキノ、真名子千恵子、菊地ミツヨ、吉岡タヤ子、岩崎耕一、豊島春規、三代英機、金子ヨシ子、吉岡蓮枝、伊藤武志、高倉隆、尾崎順子、奥山洋美、高木順子、手島香代子、青柳恵子、神月満千枝、林紀子、井手口孝子、太田頼子、山野住実恵、北島藤子、益堀耐美（順不同）

なお、調査・整理においては山口謙治（福岡市埋蔵文化財センター）、横山邦継・二宮忠司・松村道博（文化課）の各氏から御援助、御教示を得た。



第1図 周辺の遺跡 (1/5万)

II 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

田村遺跡は福岡市早良区（改区前は西区）大字田に所在する。1976年に発刊された埋蔵文化財分布図¹⁾で、田村遺跡群として登録されたほぼ南半分にあたる。遺跡は、室見川を中心とした河川の沖積作用によってその大部分を形成された早良平野のほぼ中央に位置する。同地建設前はすべて水田として利用されており、標高15～17mの北側に低い地形をなす。

遺跡の所在する田村は、もとは平群郷に属した。その惣社である飯盛神社関係の古文書によれば、鎌倉～戦国時代にかけて田村に多くの屋敷があったことが記されている。特に銀治の名をもつ屋敷の存在は、発掘調査の結果と併せて考えると興味深い。²⁾

さて田村遺跡群では、すでに第8地点の東に隣接する高柳遺跡が1978年に発掘調査されており、古墳時代～古代の遺構・遺物が検出されている。また同地建設後は、周辺においても個人住宅・店舗などの建築申請にともなう試掘調査が数ヶ所行なわれ、第3地点の南側では建物群等が確認されている。³⁾

遺跡が位置する早良平野では、住宅・学校・道路などの建設、また大規模な圃場整備に伴う発掘調査が近年特に増加している。明治時代以降の調査例（分布調査は含まない）は、1981年3月で56遺跡（遺跡群・古墳群）にのぼり、その大部分がすでに姿をとどめない。その後も発掘調査は増加の一途をたどり、藤崎・有田・小田部・原・四箇・飯盛などの遺跡群では毎年ごとに調査が行なわれている。また西区分（早良区と西区に室見川を境に分割）以後は特に室見川西岸地区での発掘例が多い。これらの発掘に伴う資料も、当然膨大なもので、早良平野における各時代・時期の社会文化等を解明する大きな石碑になるものと思われるが、そのすべてが公表されるには至っていない。

田村遺跡は、調査が多く行なわれている平野外縁部とその立地が異なる。同様な立地の遺跡としては、同遺跡群に属する高柳を除けば四箇・次郎丸高石・鶴町・原深町・原談儀・原前田などがあげられよう。いずれも平野中央部の沖積地に位置し、その中の微高地を生活基盤とし、周辺の低湿地部分に生産地を求めていたものと考えられる。そしてまた縄文時代から現代まで、古河川の流路の変化の影響を受けながらも、繰り返しこれらの土地が居住・生産・埋葬に利用され続けられてきたことがうかがわれる。

註1) 福岡市教育委員会『福岡市文化財分布図（西部1）』1979

2) 福岡市教育委員会『飯盛神社関係史料集』1981

3) 横山邦雄・力武中二「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981

4) 1983年12月福岡市教育委員会文化課試掘調査

5) 塩屋勝利・田中寿夫「野方勘原原跡の調査」「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告1」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集、1981）P.P.4～7に1981年3月までの早良平野での調査一覧があげてある。以下にあげる遺跡の文献もこれにゆずる。

III 調査地点の概要

I すでに述べたように、市営田村団地建設に伴う発掘調査は、1980年以降3次にわたって行なっている。地点名は当初各ブロックごとに南から番号をふったが、調査の過程で遺跡を西南から北東に斜断する古河川が判明したため、6～9地点はそれを境とした地点番号とした。以下各地点の出土遺構等について述べる。なお第6・7地点は未試掘・未調査である。

第1地点 弥生時代河川・杭列。古代～中世の土壙・溝など。本報告。

第2地点 繩文時代埋甕・包含層。弥生時代河川およびそれに付設された井堰・石組・杭列。古墳時代～古代・中世の土壙・溝。古代・中世の棚・掘立柱建物群・竪穴・上塙墓など。本報告。

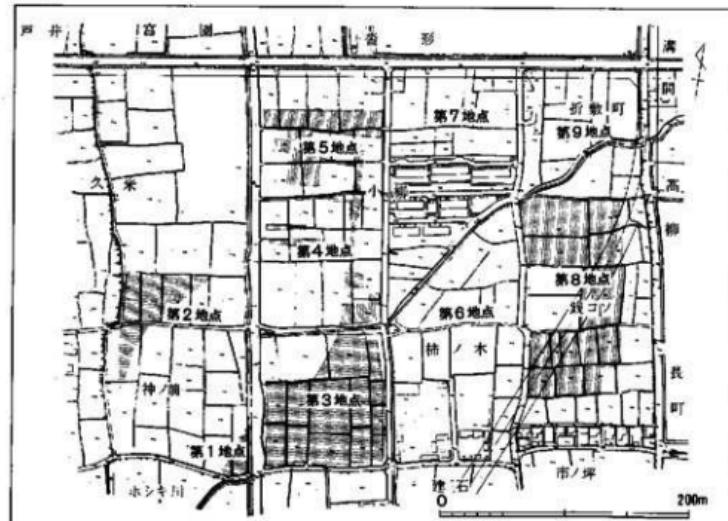
第3地点 繩文時代包含層。弥生時代河川とそれに付設された杭列。古墳時代包含層（一部水田址）・杭列。古代～中世の溝。古代掘立柱建物群・井戸・土壙。近世溝など。

第4地点 その多くが古河川の流路にあたり、北側と南側で岸の一部と杭列を検出。

第5地点 南側は古河川の氾濫原にあたり、いくつもの流路が複雑に交わる。北側では弥生前～中期の住居址・土壙・柱穴等を確認。さらに古墳時代～中世の溝・杭列も検出。

第6地点 大まかに上・下2層に分かれ、上層は古代～中世の集落址、下層は繩文後・晩期の包含層。上層では掘立柱建物群・竪穴・井戸等を多数検出。一部未買収地が未調査。

第7地点 試掘調査を行なったが、遺構なし。古河川の流路中にあたるものと考えられる。



第2図 田村遺跡調査地点図 (1/4500)

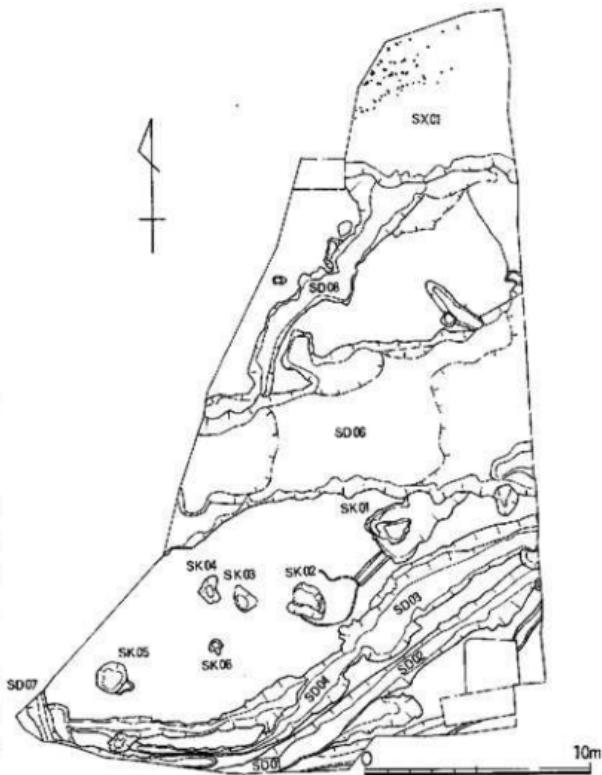
IV 第1地点の調査

1 概要

第1地点は、団地建設の西側ブロックの東南端にあたる。試掘調査の際、遺構が確認され、1980年12月5日～翌年1月10日にかけて約450m²を発掘した。

土層は比較的単純で、表土（耕作土・床土）の下に厚さ約10cmの粗砂混りの暗褐色土があり、その下に黄褐色粘質土が広がる。この下には遺構・遺物の出土はみられず、これが地山をなすものと考えられる。

だがこの地山の質は一定せず、種あるいは青灰色シルトに変る所もある。地表からの深さは南側で約40cmで、北側にむかうにつれ深さを増す。ただいずれの遺構も浅いところから、後世の削平を受けているものと思われる。台地上は主として溝で占められ、出土遺物もほとんどみられなかった。ただ発掘区北側には、古河川があり、河岸に沿ってほぼ4列に杭が打ち込まれていた。台地上の遺構より古いもので、第3地点に統く。発掘区外はすでに団地が建設され調査できなかつた。



第3図 第1地点全体図 (1/250)

2 検出遺構と遺物

検出したのは土壙6基 (SK01~06)、溝8条 (SD01~08)、古河川とそれに付設された杭列 (SX01) である。

(1) 土壙 (第4図)

SK06とSD03にはさまれた台地上で検出した。いずれも不整形で、掘り方も端正さを欠く。SK01 SK06とその北東で接する。上面は長さ4m、幅2.6mほどの長方形に近い形をなし、その西南側に2段になる塹を開けている。2段目の上面は長さ2.4m、幅1.3mの主軸を東西にとった長方形をなす。深さ0.35m。出土遺物はいずれも細片で、土師皿、弥生前期臺、縄文式土器などがあるが、実測はできなかった。

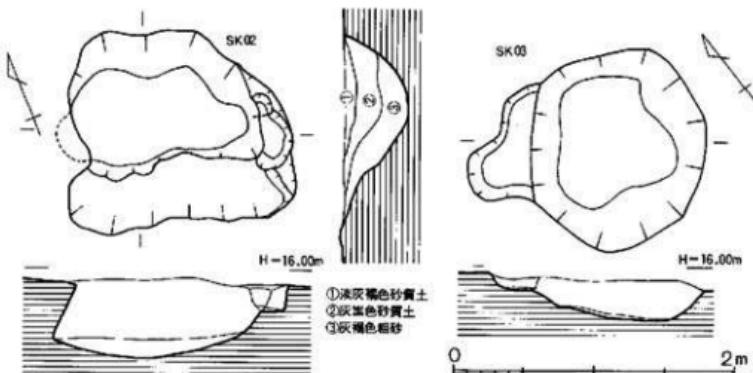
SK02 SK01の西南約2mに位置する。周辺部に5~10mの浅い段を橢円形状にもうけ、その西側に長さ1.5m、幅1.3mの長方形に近い土壙をもうけたものである。深さは0.40mをはかる。出土遺物は縄文式土器細片のみである。

SK03 SK02の西1.4mに位置する。西にややふくれた1.2×0.8mの橢円形を呈する。塹内は段をなし、底部に掌大の扁平な石を置く。深さは30cmで、出土遺物はない。

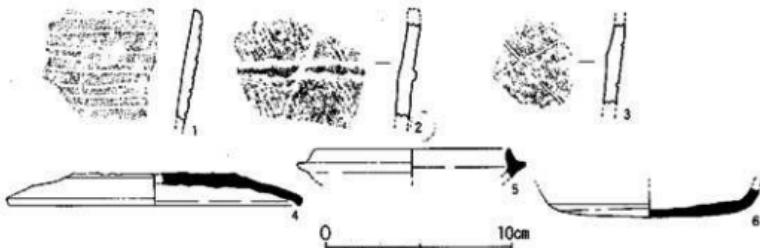
SK04 SK03のすぐ西側で検出した。上面は長さ1.25m、幅0.7mの不整形をなし、深さ30cmで長方形の底部にいたる。出土遺物は縄文式土器の細片のみである。

SK05 発掘区の西南隅近くで検出した。1.42×1.22mの南北にやや長い円形を呈する。深さ20cm。東南側に浅い段がついている。出土遺物は縄文式土器の細片だけである。

SK06 SK04の南1.6mに位置する。径0.5mほどの円形をなし、深さ20cmをはかる。柱穴の可能性もあるが、他にそれらしきものはない。縄文式土器の細片1が出土した。



第4図 SK02・03土壙実測図 (1/40)



第5図 溝出土土器実測図 (1/3)

(2) 溝

8条の溝を検出した。いずれも浅く、その立ち上り部分も出入りがはげしい。ここではSD01~08をとりまとめて述べる。SD01~SD05は、発掘区南側を南西から北東に流れる溝である。深さはSD03が東側部分で60cmをはかる他はすべて30cm以内である。このうちSD04(一部SD03と重複)が最も古いものである。切り合ひ関係は以下のとおりである。

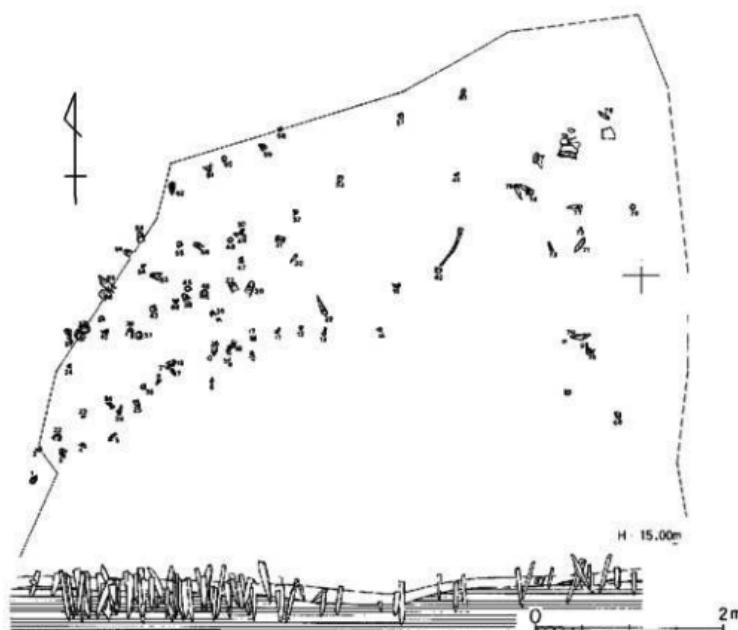
(新) SD01→SD02・SD03→SD04 (占)
SD05↑

これらの溝の西端に、ほぼ南北方向のSD07がある。これはSD03を切り、SD05に切られている。幅1m、深さ25cmをはかる。

SD06は発掘区の中央部で検出した東西方向の溝である。深さは40cmほどで、溝底は礫が露出する。この溝の北岸の西側より、北東方向にのびる溝がSD08である。幅1m、深さ20cmで、東北端はSX01上をさらにのびる。

出土遺物 (第5図) 出土したのは土器および石器・石片などで、その量はきわめて少ない。土器では縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器があるが、いずれも細片で、各構造の時期を決定することは困難である。また、実測できるものも少ない。1~3は縄文式土器の鉢片である。1は口縁部に小さな突起をもうけた深鉢で、外面は横方向の沈線を平行に施す。内面は、一枚貝による条痕がほぼ横方向にみられる。2は外面に断面蒲鉾形の小さな突帯をつけ、それ以外の所は右下りの一枚貝腹縁による条痕を施す。内面はナデで仕上げる。3は内外面ともナデによって調整を行っているが、外面に籠状工具によるX字形の施文がなされている。1~3のいずれも白色粒子を多く混え、焼成良好、暗褐色~灰黒色を呈する。1はSD06、2・3はSD03からの出土である。

4~6は須恵器片である。6は杯身片で、復元口径10.4cmをはかる。立ち上り部および受部



第6図 SX01杭列実測図 (1/60)

とも小さく、丸みをおびる。また受部には重ね焼痕が残る。5は杯底部片で、外面に板状圧痕がみられる。4は杯蓋で、復元口径15.5cmをはかる。天井部はヘラ削りを行ない半坦にしている。口縁端部は小さく立つ。4～6いずれも少量の砂粒を混え、焼成良好、4・6は青灰色、5は淡灰色を呈する。いずれもSD06からの出土である。

(3) 古河川と杭列（第6図）

調査区の北側で検出した。調査時すでに、周囲は団地造成にかかっており、発掘範囲を拡げることができず、この古河川と杭列（S X01）の全貌は把握できなかった。ただ、第2次調査の第3地点で、これに続く古河川を検出している。

古河川は前述した土壤・溝がのる台地から約80cmほどゆるやかに落ち、さらに北側に向って深くなる。覆土は大まかに2層に分かれ、深さ50cmほどまでが粗砂・疊層で、それ以下が灰黒色粘質土となる。ただ北側に深くなるにつれ、砂層は厚くなり、灰黒色粘質土は薄くなる傾向にある。

杭列はこの南河岸から約2.5m離れ、北東—西南に4列並んでいる。杭は砂疊層下部近くに頭

No.	出土造構	出土状態	種類	残存長(cm)	径・幅(cm)	樹種	備考	採因	図版
W 1	杭列 I	杭	角杭	11.5	3.0	シイ	先端部付近のみ	*	
2	タ	タ	角杭	14.0	6.0	シイ	*		
3	タ	タ	角杭	47.0	6.0	シイ		9	
4	タ	タ	角杭	40.0	6.0	スギ			
5	タ	タ	板角杭	21.0	9.0	シイ	先端部付近のみ		
6	タ	タ	角杭	5.0	3.0	ユズリハ	*		
7	タ	タ	角杭	24.0	5.5	シイ	*		
8	タ	タ	角杭	20.0	5.0	シイ	*		
9	タ	タ	角杭	30.0	7.5	シイ			
10	タ	タ	角杭	17.0	3.0	タブノキ	先端部付近のみ		
11	タ	タ	角杭	19.0	6.0	シイ	*		
12	タ	タ	角杭	11.0	4.0	シロダモ	*		
13	タ	タ	角杭	25.0	6.0	シイ	*		
14	タ	タ	角杭	6.0	5.0	シイ	*		
15	タ	タ	角杭	8.0	3.0	タブノキ	*		
16	タ	タ	角杭	27.0	6.0	シイ	*		
17	タ	タ	角杭	39.0	5.0	シイ	*		
18	タ	タ	角杭	31.0	5.0	タブノキ			
19	タ	タ	角杭	43.0	8.0	シルイ			
20	杭列 II	タ	角杭	36.0	5.5	シルイ			
21	杭列 I	タ	角杭	33.0	5.0	シイ			
22	タ	タ	半截杭	34.0	6.0	シイ			
23	*	*	角杭	48.0	4.0	シイ			
24	杭列 II	タ	角杭	37.0	5.5	シイ			
25	杭列 I	タ	角杭	25.0	6.0	スギ			
26	タ	タ	角杭	36.0	6.0	シイ			
27	杭列 II	タ	角杭	36.0	6.0	シイ			
28	杭列 I	タ	角杭	40.0	9.0	シロダモ			
29	タ	タ	角杭	14.0	5.0	シロダモ	先端部付近のみ	*	
30	杭列 II	タ	角杭	12.0	3.0	モミ			
31	*	*	角杭	45.0	9.5	シイ			
32	杭列 III	タ	角杭	35.0	4.0	シロダモ			
33	*	*	角杭	30.0	5.0	シイ			
34	杭列 I	タ	角杭	42.0	6.0	シイ			
35	*	*	角杭	15.0	5.0	シイ	先端部付近のみ		
36	杭列 II	タ	角杭	49.0	6.0	シイ		9	
37	タ	タ	丸角杭	52.0	7.0	サカキ			
38	タ	タ	角杭	40.0	6.5	シイ			
39	タ	タ	角杭	15.0	4.5	シイ	先端部付近のみ		
40	杭列 I	タ	角杭	28.0	5.0	シイ			
41	杭列 II	タ	半截杭	28.0	6.0	シイ	先端部付近のみ		
42	タ	タ	板杭	28.0	7.0	シイ			
43	タ	タ	丸角杭	45.0	5.0	シイ		9	
44	タ	タ	半截杭	42.0	6.5	サカキ			
45	タ	タ	丸角杭	48.0	5.0	ゴマギ?			
46	タ	タ	丸角杭	33.0	5.5	サカキ			
47	タ	タ	角杭	49.0	5.5	ユズリハ			
48	杭列 III	タ	角杭	43.0	4.5	シャシャンボ			
49	タ	タ	角杭	48.0	5.5	シイ			
50	*	*	角杭	30.0	3.5	サカキ			
51	杭列 II	タ	板角杭	40.0	6.0	ユズリハ		39	
52	タ	タ	丸角杭	46.0	4.0	シイ			
53	杭列 III	タ	角板	41.0	8.0	クヌキ			
54	*	*							

第1表 SX01出土材観察表I

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長(cm)	径・幅(cm)	樹種	備考	持岡	岡版
55	杭列Ⅲ	杭	丸杭	44.0	6.5	タブノキ			
56	*	タ	丸杭	43.0	4.5	シロダモ			
57	*	タ	丸杭	50.0	5.0	ユズリハ			
58	杭列Ⅳ	タ	丸杭	15.0	3.5	カシ	先端部付近のみ		
59	*	タ	半截杭	49.0	8.5	クリ			
60	*	タ	丸杭	46.0	5.5	クリ			
61	*	タ	角杭	45.0	7.5	クリ			
62	*	タ	丸杭	40.0	4.5	クリ			
63	杭列Ⅲ	タ	丸杭	33.0	5.5	サカキ			
64	*	タ	丸杭	40.0	5.5	シイ			
65	*	タ	板杭	49.0	8.0	シイ			
66	*	タ	角杭	53.0	7.5	クスノキ			
67	杭列Ⅱ	タ	角杭	45.0	8.0	シイ			
68	杭列Ⅴ	タ	角杭	22.0	5.0	シイ			
69	*	タ	角杭	12.0	4.5	シイ			
70	*	タ	半截杭	42.0	8.5	クリ			
71	杭列Ⅰ	タ	半截杭	37.0	7.0	シイ			
72	*	タ	丸杭	20.0	1.5	クリ	先端部付近のみ		
73	*	タ	板杭	22.0	4.0	シイ			
74	杭列Ⅲ	タ	丸杭	48.0	4.5	タブノキ			
75	*	タ	板杭	43.0	5.0	シイ			
76	杭列Ⅰ	タ	丸杭	25.0	4.5	シイ	先端部付近のみ		
77	*	タ	丸杭	51.0	3.5	アワブキ			
78	杭列Ⅱ	タ	丸杭	42.0	4.0	シイ			
79	杭列Ⅴ	タ	板杭	35.0	3.5	シイ			
80	杭列Ⅳ	タ	丸杭	35.0	4.0	サカキ			

第2表 SX01出土杭材観察表II

部があり、灰黒色粘土をつき抜け、疊の基盤層へと打ち込まれている。ただ一部の杭は基盤層に達していない。杭の残存長は、その先端部しか残さないW6の5cmから、角杭であるW66の53cmまであるが、40cm前後のものが最も多い。杭の種類には丸杭・角杭・半截杭・板杭がみられるが、そのほとんどは前2種によって占められている。

検出した杭列は、河岸側より杭列I～IVとした。杭列IはW1～W76の列をさす。西側部分では幅10cm間隔で南北に2列になる。打ち込まれた34本の杭の種類は、角杭18本、丸杭10本、板杭4本、半截杭2本である。樹種をみれば、その大半がシイで、他にはスギ2本(角杭)、タブノキ3本(丸杭)、シロダモ2本(丸杭)、クリ・アワブキ・ユズリハがそれぞれ1本づつ(いずれも丸杭)にすぎない。このうちタブノキおよびシロダモの杭は、他の杭に比べ浅く打ち込まれており、樹種の違いなども考え合せれば後次的なものである可能性が強い。

杭列IIは、杭列Iの北側に平行して打ち込まれたW24・62～W78の列である。構築杭は25本で、うち3本は取り上げ以前に流出し、丸杭という以外の詳細は不明である。その3本を除いた杭の種類は、丸杭12本、角杭5本、板杭3本、半截杭2本である。その樹種はシイ12本、サカキ3本、ユズリハ2本、ゴマギ・モミ・タブノキが各々1本である。

杭列IIIは、杭列IIの北側に近接したW63・66-W80のラインである。15本の杭から構成され、その種類は丸杭10本、板杭3本、角杭3本である。樹種はシイ5本、サカキ3本、クスノキ・シロダモ各2本、ユズリハ・タブノキ・シャシャンボ各1本とバラエティに富む。

杭列IVは発掘区の最北端のW58-W62の列がある。杭は5本で、丸杭3本、半截杭・角杭各々1本である。樹種はW58がカシである以外はクリである。

以上の杭列I~IVは、河岸に平行に築かれた杭列であるが、発掘区の東側では、これに直交する杭列も検出した（杭列V）。これはW68・69・70・79の4本の杭からなり、杭列Iと河岸の間を西北に2.5m延びる。角杭2本、丸杭・半截杭各1本で、樹種はW70がクリ以外はすべてシイである。

この河川および杭列に伴う遺物は多くなく、砂礫層の上面から土師器片等が少く、また灰黒色粘質土から縄文～弥生前期の上器片等がパンケース1箱たらず出土したにとどまった。以下、灰黒色粘質土から出土した土器、および杭列構築杭についてみてゆく。

出土遺物 灰黒色粘質土から出土したのは縄文式土器、弥生式土器、石器であるが、石器は第2地点の項で一括して述べる。また杭列から取り上げた杭についても、ここであわせて記述する。

縄文式土器（第7図、1~11） 出土したのはすべて小破片の資料であり、ここでは口縁部分の一部を図示したにとどめた。また小破片ということで、その口縁の傾きも確定なものとはいがたい。

1~6・8は深鉢形土器である。1は平坦な口縁端部に連続した爪形状の押圧文様を施したものである。外面には横位の二枚貝による条痕、内面はナデ調整を行う。胎土には石英粒を含み、焼成良好、内面淡黒色、外面灰褐色を呈する。2は、外面で右から左方向へのナデが強く、また内面も板状工具による擦痕が残る。胎土には砂粒を含み、焼成良好、内面黒色、外側は灰褐色を呈す。3の外面は板状工具による横位方向のナデが行なわれている。内面は荒れ、調整は不明。胎土には砂粒を含み、焼成良好、内面淡褐色、外面暗茶褐色を呈する。4・5は、内外面とも横位の二枚貝による条痕の上をナデで仕上げた上器である。胎土には砂粒を混えるが、5にはそれに加え雲母粒が混る。ともに焼成堅致で、淡灰褐色を呈する。6は口縁端部を外に折り返すように強くナデしており、また内外面とも強い指ナデ調整が施されている。8は口縁下に一条の断面蒲鉾形の隆帯を巡している。隆帯は本来2条以上あったものと考えられる。内外面とも地文の条痕をナデ消している。胎土には砂粒を含み、焼成は堅致、色調は淡黒色を呈する。

7は壺形上器である。口縁端部に接して突窓を貼り付け、棒状工具で右回りに刻目を施している。外面には横位に平行して走る条線がみられ、これはヘラ状工具による調整痕と考えられる。内面はナデ調整で平滑になっている。胎土には砂粒を含み、焼成は堅致、色調は内外面とも淡灰褐色を呈する。

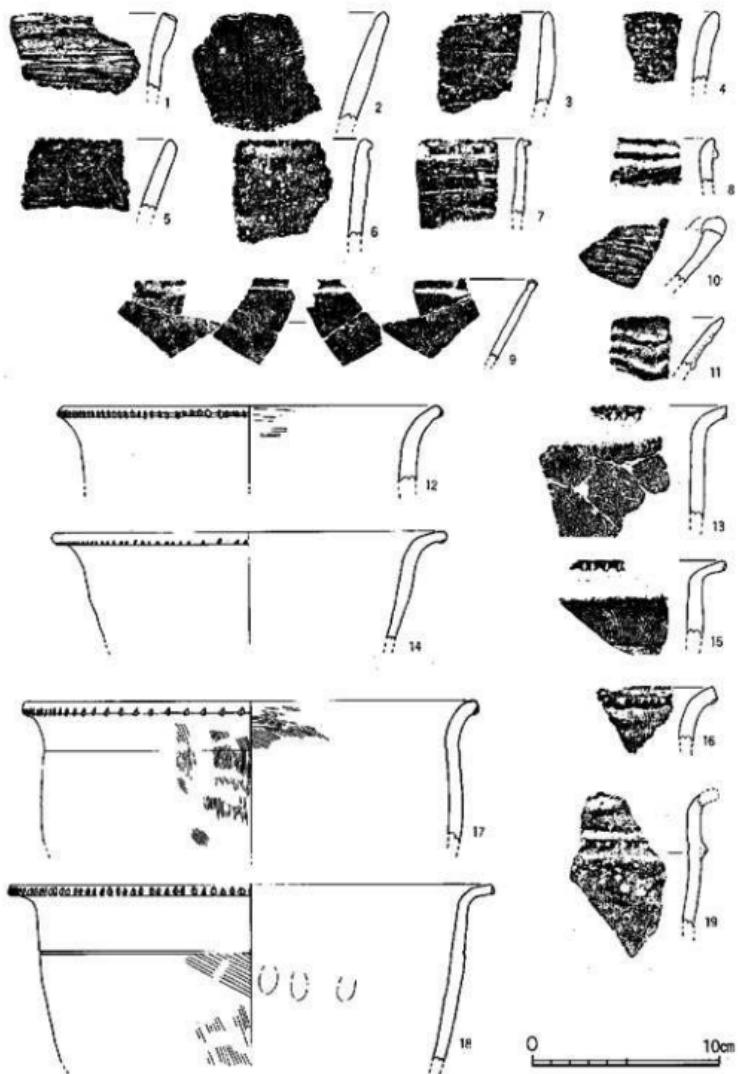
9～11は鉢形土器である。9は内外面とも研磨された精製土器で、口縁上端に小さな突起状の貼り付け文を施す。外面には1条ないし2条の、また内面には1条の沈線をめぐらせてている。精選された胎土で、焼成は良好、色調はややくすんだ黒色を呈する。10は平坦に作られた口縁端部に、粘土を貼りつけ突起部を設けている。外面は横方向の条痕を残すが、外側はナデにより条痕を消している。胎土には石英・長石粒を少量含み、焼成は堅歯、内面灰黒色、外面淡灰色を呈する。11は、口縁下にゆるやかに波打つ2条の断面鉢形の隆帯があげてある。器面の調整・胎土・焼成・色調は8と同様である。

以上、縄文式土器について観察を行なってきたが、1・8・11は前期轟式系統の文様構成をもち、また9・10は晩期前半、7は晩期末の夜円式に属する。また図示しえなかつたが、胎土に滑石を混入し、外面に幅広い凹線を施した中期阿高式土器の破片も出土している。

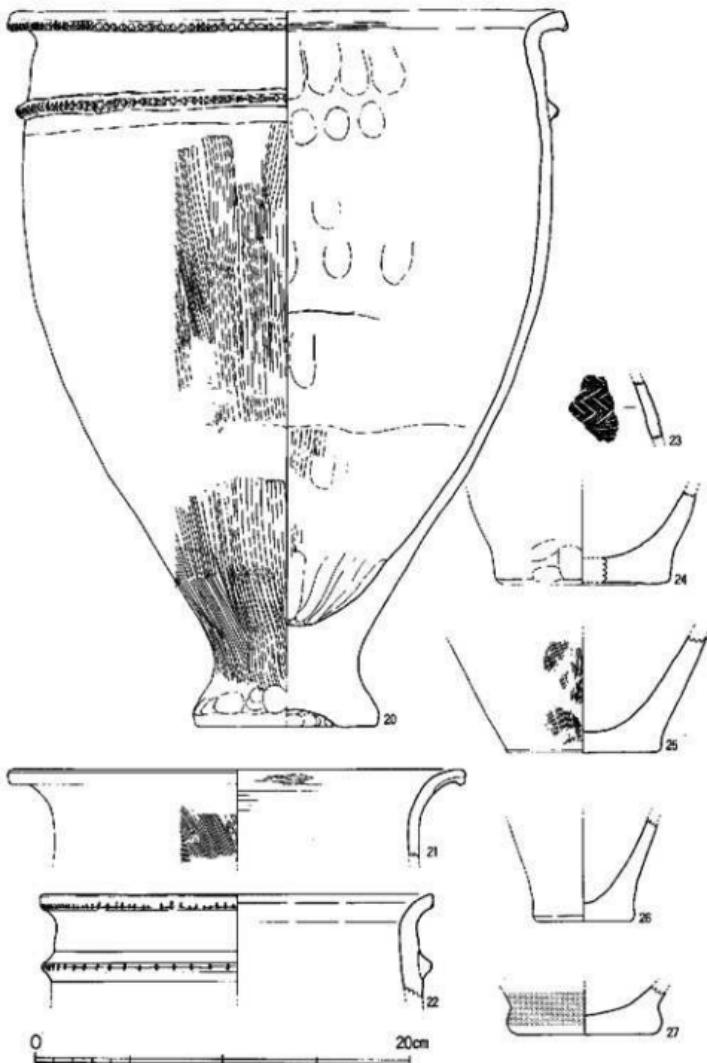
弥生式土器（第7・8図、12～27） 灰黑色粘質土から出土した弥生土器は、19が比較的残存状況が良かった以外は、すべて破片、および細片である。器種は壺形土器と壺形土器に分れる。

12～22は壺形土器である。いずれも比較的張りのない胴部から、口縁部がゆるやかに、あるいは強く外反する。口縁下端には小さな刻目を入れるのが通有のあり方である。12・14～16は外反する口縁下端に刻目を有するだけの一類である。外面口縁下は縦の刷毛目で調整するが、12・14は器表の磨滅が著しくそれは痕跡的に見られるだけである。内面はナデで仕上げているが、12の口縁部近くには横刷毛目がうかがわれる。いずれも胎土に砂粒を混え、焼成良好、暗褐色に近い色調を呈する。これは他の壺形土器にも共通する所である。12・14の外表には煤が付着している。13・17は外面口縁下に線状の細い沈線をもつものである。この沈線は明確なものではなく、ナデ調整の際ついた可能性も強い。これに対し18は、外面口縁下に明瞭な沈線を有している。沈線から上部および内面はナデ調整、沈線下は斜削尾目で仕上げている。復元口径25.6cmで、外表には煤の付着がみられる。19・20・22は口縁下に刻目尖帯を付設するものである。残存状態の良好な20は、あまり張りのない胴部から口縁部が強く外反し、口縁端部は肥厚気味になる。口縁部下端には小さな刻目を施す。底部は細く縮った後、外方に開く、内側はあげ底となる。外面突帶下から底部付け根までは縦刷毛目で調整し、他の部分は指ナデで仕上げる。内面および底部には指頭痕が著しい。外面胴下半には煤が付着する。口径29.2cm、器高32.9cm、底径9.6cmを有する。19・22は20にくらべ口縁部の外反が緩やかである。21は口縁部が丸みをもって外反し、垂れ下り気味の端部には刻目をもたない。外面口縁下には斜めの細い刷毛目、口縁内面には粗い刷毛目調整が行なわれている。24～26の底部も壺形土器のもので、いずれも平底をなす。

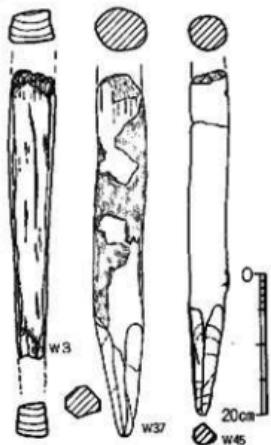
23は壺形土器の胴部片である。沈線間に無軸羽状文をヘラで施したもので、表面はヘラ磨きにより光沢をおびる。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、褐色を呈する。26の底部も壺形土器である。外面には丹を塗布した痕跡がみられる。



第7図 SX01杭列出土土器実測図 I (1/3)



第8圖 SX01杭列出土土器實測圖Ⅱ (1/3)



第9図 SX01構築杭実測図 (1/8)

以上、灰黒色粘質土出土の弥生式土器についてみてきたが、これらは諸特徴から前期後半～終末の板付II式に相当する。壺形土器では、12～7・21が、口縁下に突帯を付ける一群より古いものであろう。ただ27の壺形土器底部は、夜臼～板付I式にあたるものである。

杭 (第9図) SX01を構成した杭は、調査時に流出したものと取りあげた。その本数は80本である。これらの杭は、その木取りの方法から、丸杭・半截杭・角杭・板杭の4種類に分けた。丸杭は丸木を切り離し先端部を削り出しただけのもので、W37など34本がこれにあたる。半截杭は丸木を半截し、先端部を削り出したもので、W22など6本が使用されていた。角杭は、丸木を2回以上立ち割り、さらに先端部を削り出したもので、断面は三角形・方形などを呈する。側面は削ったそのままのものと、さらに削りを加えたものがあるが、また自然面を一側面に残すものも多い。W3など28本が出土。板杭は、板状に加工した材の一端を削って杭としたもので、W54など12本がこれにあたる。

取りあげた杭は、長いものでも50cm程度の残存にすぎず、多くは杭先端部付近のものにすぎない。その樹種は、シイが大半を占める。

3 田村遺跡第1地点から出土した木質遺物の樹種

樹種	丸杭	半截杭	角杭	板杭		
針葉樹	2	—	—	—	1	
スギ	—	—	2	—	2	
広葉樹	ク リ	3	2	1	—	6
スル デ	1	—	—	—	—	1
落葉樹	アワブキ	1	—	—	—	1
ゴマギ	1	—	—	—	—	1
シイ	7	3	24	11	—	45
カシ	1	—	—	—	—	1
タブノキ	5	—	—	—	—	1
クスノキ	—	—	1	1	—	—
常緑樹	シロダモ	4	—	—	—	4
ユズリハ	4	—	—	—	—	4
サカキ	5	1	—	—	—	6
シャンポン	1	—	—	—	—	1
14種	34	6	28	12	80	

第3表 SX01出土杭材樹種一覧表

福岡市早良区にある田村遺跡の第1地点、SX01杭列について樹種を調べた。

試料は数mmから1cmくらいの大きさのブロックで、これから切片をつくり、プレパラートに仕上げて検鏡した。変質または収縮の著しい試料の中には同定できなかったものもあり、やや不確実のものには?をつけた。

その結果は第1・2表中に示した。

これをまとめれば、第3表のようになる。杭材にはシイが最も多く、丸杭には多く

の樹種を含んでいる。福岡付近の弥生時代の杭材には、シイ・カシ・クリが多く使用されているので、これらを主杭材とすると全体の65%を占める。(鳩倉己三郎)

4 小 結

第1地点は、試掘調査で古代の住居跡・溝が検出され調査に至った地点である。発掘調査の結果についてはすでに前述したとおりである。検出したのは土壌・溝、古河川とそれに付設された杭列である。住居跡の出土ではなく、また柱穴と考えられるピットも全く認められなかった。

調査区南側で検出した土壌は、その性格・時代ともに不明確である。その堆積上はいずれも溝と同じ砂質のものが多い。出土遺物はほとんどなく、あったとしても細片にしかすぎない。SK 02・04~06は縄文式土器片のみの出土であるが、遺構に属するものかは決したい。SK 01からはヘラ切り底の土師器皿が出土しており、これが6基の土壌群の時期を暗示するものであろう。

溝はSD 07・08を除けば、ほぼ東西方向をとるものが多い。うち調査区の南側を走るSD 01~SD 05は、その切り合い関係から、北側のものほど古いことがわかる。出土遺物もほとんどなく、これらの時期の決定は困難である。また道路をはさんで隣接する第3地点の調査では、これらの溝が続いている状況はみられず、その性格も不明な所が多い。

1982年には、この地点の西南隅接地で、民間の住宅建設に伴う試掘調査が行なわれているが、台地状の地形は続くものの遺構の検出には至っていない。第1地点の台地上の遺構のあり方を考え併せれば、すでにこの辺りは遺跡の外縁部にあたる可能性が強い。

調査区北側で検出した古河川とそれに伴う杭列は、先述した台地上の遺構とは時期を違えている。河川の堆積土は大きく砂礫層一灰黒色粘質土の上・下2層でとらえられ、これらの土層中には弥生時代以後の遺物はみられなかった。この河川の右岸は、第3地点を横切り、第4地点の南側を抜け、さらには第8・9地点間を通ることを確認している。しかし左岸については、流路の変り方が激しく、また明確な台地がないため把握が困難である。後述する第2地点の古河川をその左岸と考えれば、その川幅は100mを越えるものとなる。

河川中に築っていた杭列は、河岸に平行するもの4列(杭列I~IV)、河岸に直交するもの1列(杭列V)の都合5列が確認できた。一番河岸に近い杭列Iでも3m離れており、杭列IVとの間は6m近く距離がある。この杭列は第3地点に続いており、同様の状況を示している。構築杭をその樹種からみると、杭列Iがほとんどシイで占められるのに対し、杭列II・IIIは各種が混り、また杭列IVはクリがほとんどである。これらの樹種の違いは杭列の構築時期の違いを示しているのではないかと考えられる。詳しい検討は第3地点の杭列の報告の際行ないたい。

杭列の先端部近くにあたる灰黒色粘質土から、弥生前期後半の土器が出土しているが、杭の折損状況、第3地点の杭列間出土土器などから考えれば、弥生中期後半に構築されたものと想定できる。

V 第2地点の調査

1 概要

第2地点は第1地点の西北に位置する。第1地点の発掘調査終了後の1981年1月7日より調査を開始し、4月14日に終了した。試掘調査の結果、発掘調査を必要とする部分が三角形状に残され、第1地点との間は発掘開始時にはすでに団地の建設が進んでいた。当地点の概要については「田村遺跡I」で述べたので、ここでは簡単に触れるにとどめる。

遺構検出面（黄褐色土）の上には現耕作土・床土が載るだけで、その厚さは30~40cmである。場所によってはこの間に、薄い砂混り褐色土を挟む。ただ発掘区の東北・西南斜辺に沿って黄褐色土はなくなり、かわりに赤褐色砂土上に遺構が拡がる様相を呈した。この変換部分は極めて明瞭で、赤褐色砂土部分は古河川にあたり、その埋没後遺構が作られたものと把握できた。ただ後年に削平がかなり行なわれている状況がある。

検出した遺構は、弥生時代の河川とそれに付設された棚状遺構など、古代～中世にかけての棚・掘立柱建物・堅穴住居跡・土壤・溝などである。また縄文時代・古墳時代の遺構も散見する。出土遺物は縄文前期～中世までの様々な時期のものがあるが、その量は発掘面積に比べて多いとはいはず、また遺構に完全に伴うものは少ない。

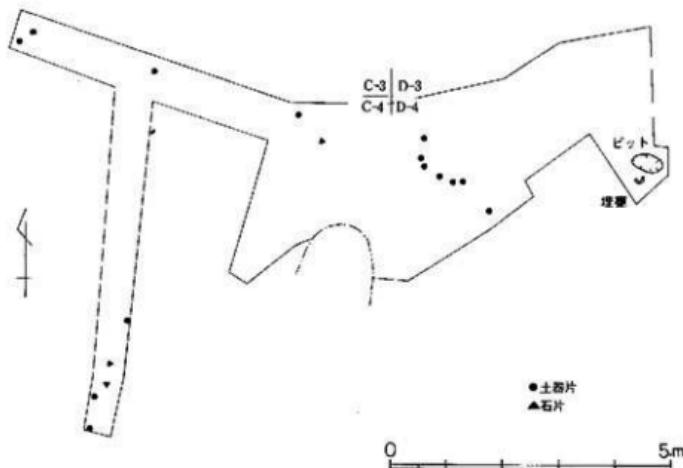
古代・中世（一部古墳時代も含む）の遺構は「田村遺跡I」で行なった。ここでは縄文時代の遺構と遺物、弥生時代の遺構と遺物、そして前報告書で未報告であった古墳時代～古代・中世の遺物について報告を行なない。前報告では調査区を東・西・南区と略称していたが、今報告では調査時の地区割りに従った（付図1）。

2 縄文時代の遺構と遺物

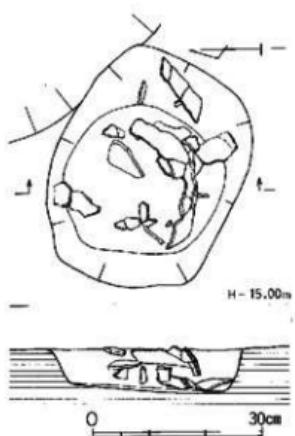
(1) 遺構

黄褐色土で遺構の検出を行う際、縄文土器片・石器などの出土をみた。また各遺構中においてもこれらの混入が多く、縄文時代の遺構あるいは包含層の存在が予想された。そこで、黄褐色土から出上がる比較的多いD-4区を中心に、古代・中世遺構の調査が終了後、トレンチ方式で調査を行なった（第10図）。

黄褐色土層下は褐色シルト層-茶褐色粘質土-砂礫層と続く。黄褐色土から砂礫層上面までの厚さは70~80cmである。トレンチ内で検出した遺構は、埋葬状遺構およびビット1ヶ所にすぎなかった。ともに黄褐色土層に属するものであった。また遺物の出土状態から、この黄褐色土が包含層をなすことが判明したが、遺物の多くはその上部からの出土であった。その時期は後期後半～晩期前半にあたる。褐色シルト層以下からは遺物の出土はなかった。



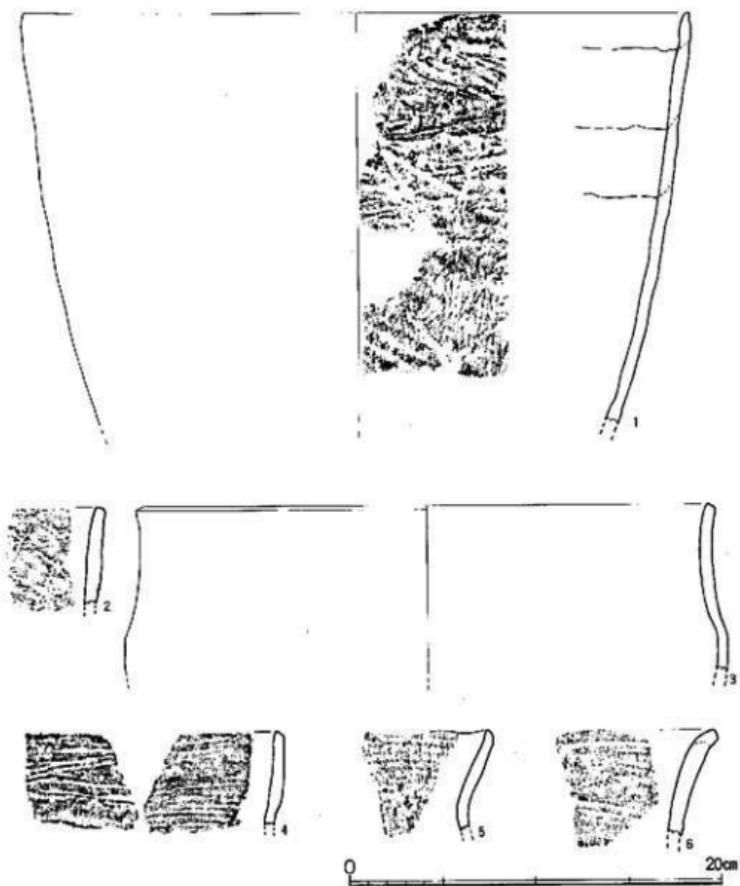
第10図 縄文時代調査区 (1/100)



第11図 埋葬状遺構実測図 (1/10)

埋葬状遺構 (第11図) D-4区の縄文トレンチの東端側で検出した。この一部は中世・古代の遺構検出の際露呈していた。その掘り方は不鮮明であるが、南北に長い楕円形をなすものと思われる。この壙の南側に縄文土器深鉢の胴部が、約1/4ほどめぐる。この下には同じ上器の胴部片が敷きつめられたようになっている。壙底までの深さ15cm。この深鉢は後期後半に属するものであったが、遺物移動の際一部を散逸し復元には至らなかった。

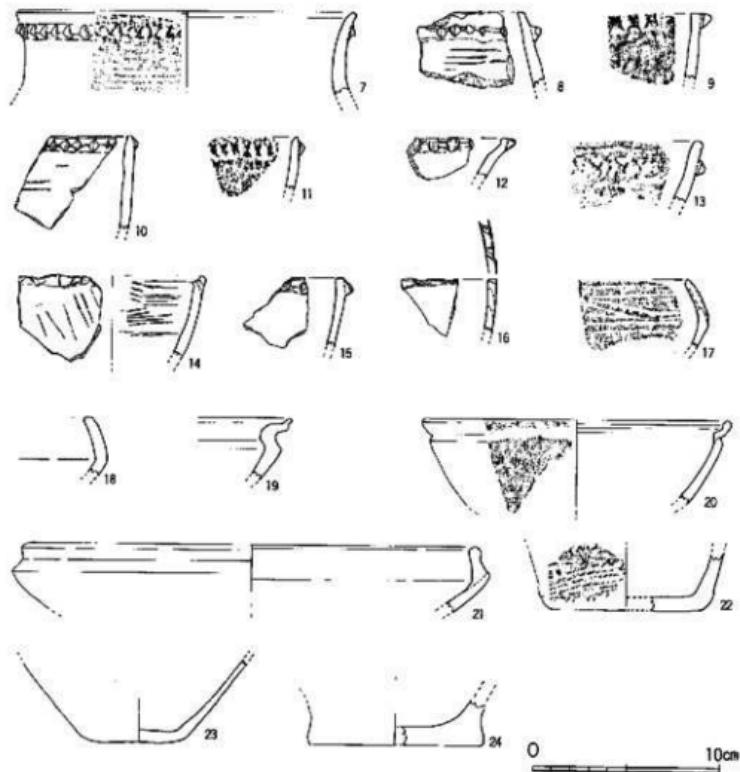
ピット 埋葬状遺構下を掘り下げた際、東南側で一部重複して検出した。58×38cmの南北に長い楕円形を呈し、深さは52cmをはかる。この遺構は埋葬状遺構の下にあたる黄褐色土層の下部から掘り込まれている。覆上面には焼土様の上がみられ、またピット内から深鉢1個体の破片が出土した(第12図1)。後期後半の時期に相当しよう。



第12図 縄文式土器実測図 I (1/3)

(2) 遺物

トレンチ内の遺物の量は少なく、また細片で実測できるものがほとんどない。ここでは他の時期の遺構に混入したもの、またそれらの遺構検出の際出土した縄文遺物を中心に述べる。そのことによって、第2地点の縄文時代のおおまかな存続期間等をうかがうことができよう。なお石器については、第1地点出土のものも編集の都合上併せて掲載した。



第13図 桐文式土器実測図Ⅱ (1/3)

土器（第12・13図） 前期～晩期にわたる資料が出土しているが、いずれもまとまったものではない。以下、器種ごとにその特徴などについて詳述する。

深鉢形土器（1～6・16） 1はトレンチ内のピットから出土した粗製土器で、体部上半が1/8ほど残存している。肩部はゆるやかに外反し、最大径を口縁部にもつ。複元口径は35.2cmで、直立した端部はやや尖り気味に丸くおさめる。外面は二枚貝条痕を施し、その後にナデ調整で仕上げているが、十分ではなく器表の凹凸が激しい。内面は粗い条痕で、下半部はそれをナデ消している。胎土には砂粒を混え、焼成良好、暗褐色を呈する。後期三万田式に伴なうものか。2は直立する口縁部外面に斜格子状の沈線を施したものである。口縁端部は平坦である。

内外面とも横ナデ調整で仕上げられ、その後尖ったヘラ状工具によって沈線を入れている。胎土には砂粒を含み、焼成良好、灰褐色～赤褐色を呈する。文様構成からすれば、前期曾畠式の系統に属するものかと考えられる。3は、口縁部が内湾する脛部から反転し、やや外傾気味に直立する。端部はわずかに外傾する面をつくる。外面口縁部は丁寧な横ナデを行ない脛部には粗い条痕の痕を残す。胎土には砂粒を含む、焼成良好、黒褐色を呈する。半精製土器の範疇に入る土器であろう。4は直立する口縁の端部を尖り気味にしたもので、内外面とも横の二枚貝による条痕で調整されている。微砂粒・雲母を混えた胎土で、焼成良好、灰褐色を呈する。5は外反する口縁部を波状にした土器である。内外面とも横の条痕がうかがわれる。胎土には砂粒・雲母を混え、焼成良好、灰褐色を呈する。磨滅が著しい破片である。6は外反する口縁部片で、縫肉は端部にいくにつれ厚くなる。器面調整は外面が斜位、内面が横位の粗い条痕で行う。胎土には砂粒・赤色粒を含み、焼成良好、灰褐色を呈する。4～5は共伴する精製土器が不明で、時期決定は困難である。16は薄手の口縁部片で、口唇部に棒状工具による刻目が施されている。調整は内外面ともナデである。砂粒を含んだ胎土で、焼成良好、赤褐色を呈する。晩期後半の所産か。

菱形土器(7～15)　すべて刻目凸帯文土器の類である。口縁部凸帯の位置から4つのグループに分けられる。7・8・13は比較的大きめの三角凸帯を口縁下にもつものである。刻目はいずれもヘラ状工具で切り込まれている。外面を2枚貝腹縁による条痕、外面をナデで仕上げているが、13の破片には内外面ともナデしかみられない。胎土には砂粒を混え、焼成は堅緻。色調は7が外面灰褐色、内面黒褐色、8が外面灰色、内面黒色、13が内外面とも淡褐色を呈する。口縁の傾きからすれば、7・8は脣部に凸帯がめぐる可能性が強い。10・11・15は口縁部に接して凸帯が斜に貼付けられたものである。凸帯は小さく、刻目もヘラあるいは細い棒状の工具で押圧されている。いずれの口縁部も直立気味で、残存部には条痕が見受けられない。内面はナデで仕上げている。いずれも胎土に砂粒を混え焼成良好(10はやや軟)、10は赤褐色、11は淡黄褐色、15は外面灰褐色、内面黄褐色を呈する。9は口縁部と水平に厚い三角凸帯を貼り付けたものである。刻目は細い棒状工具によって押圧されている。残存部は内外面ともナデ調整である。胎土には砂粒を混え、焼成良好、外面灰黒色、内面灰褐色を呈する。12・14は口縁端部に上向きに凸帯を貼りつけたもので口縁内面には小さな段がついている。刻目は棒状工具による押圧で、そのため口縁上端部は波をうったような状態を呈する。14の内面口縁下に刷毛目らしき調整痕がみられる以外は、すべてナデで仕上げている。胎土には砂粒を多く混え、焼成良好、12は外面褐色、内面黄褐色、14は内外面とも灰黒色を呈する。7～15は晩期終末前後の時期に相当しよう。

浅鉢形土器(17～21)　いずれも内外面とも研磨された精製土器で、17が黄褐色を呈する以外はすべて黒色を呈する。17は脣部から屈曲して内傾する口縁部をもつ破片である。口縁部外面

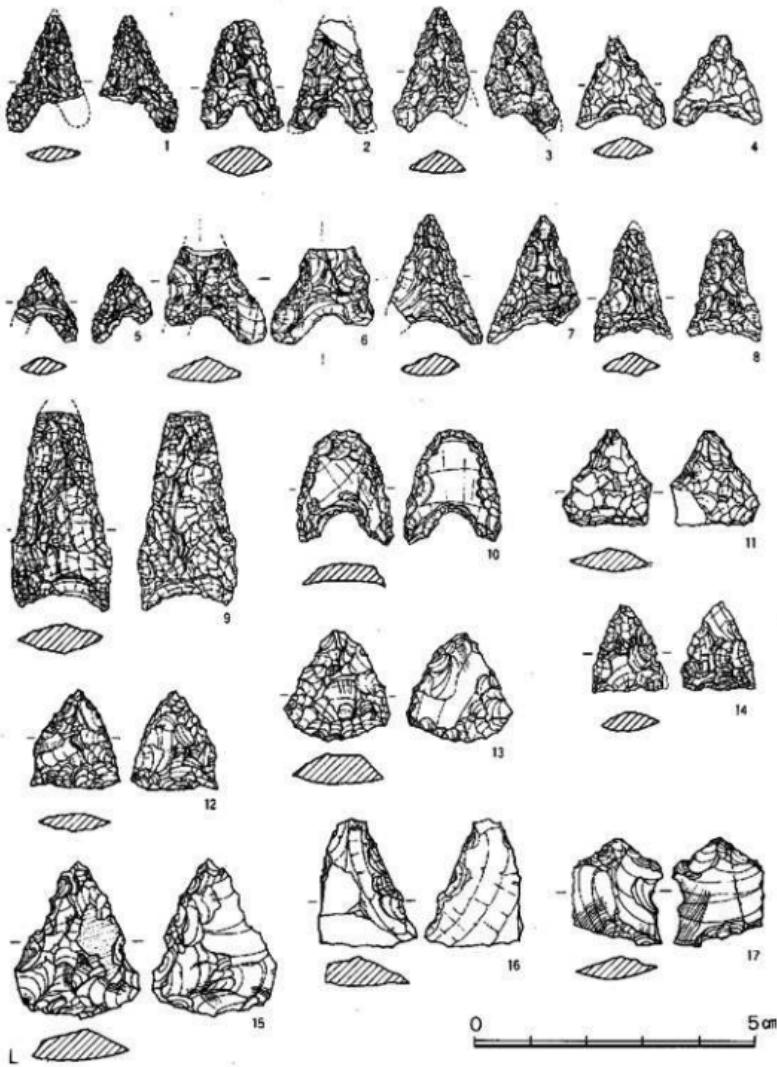
には、上に1本、下に2本の横の沈線があり、その間に「X」字状（右半分のみの残存）の沈線や、横または斜の沈線を配している。胎土には砂粒を混え、焼成良好である。18も17と同様の器形をなすが、無文で、また口縁端部も18が丸くおさめるのに対し角ばる。器面は横の条痕の後、研磨を行っている。砂粒・金雲母を混えた胎土で、焼成良好である。17・18とも後期三方田式に属し、18は無文化している点で17より後出するものと考えられる。19は外反する体部上半に、丸い棒状工具を押付して半円形に屈曲させ、さらに口縁部を上方に引き出したものである。口縁部外面には浅い沈線をめぐらす。胎土には微砂粒を混えただけで、焼成は堅緻である。かなりの厚みをもった土器である。20は19に比べ薄手で、体部の口縁部の境の屈曲も大きいものではない。口縁端部は丸くおさめ、その内面に沈線をめぐらしている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。復元口径15.6cm。19・20は晩期前半～中頃の時期のものであろう。21は外反する体部から口縁部が内側に屈曲し、端部が立ち上がり丸くおさまる器形をなす。胎土には微砂粒を混えただけで、焼成も良好である。復元口径24cm。前述した刻目凸帯文の變形土器に伴うものである。

底部（22～24） 22は深鉢形土器の底部で、平底をなす。外面は横の条痕が荒く行なわれていて、内面には炭化物らしきものが凝固する。底部にはスサ状纖維の圧痕を残す。胎土には砂粒を混え、焼成良好、外面淡赤褐色、内面灰黒色を呈する。23は浅鉢の底部と思われるもので、体部と底部の境は丸みをおびる。内外面ともナデで仕上げているが、外面はやや荒い。胎土には砂粒を混え、焼成良好、外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。器内の薄い土器である。24は台形状に開く厚手の底部である。残存部は内外面ともナデで仕上げられている。胎土には微砂粒を含み、焼成良好、外面灰褐色、内面赤褐色を呈する。

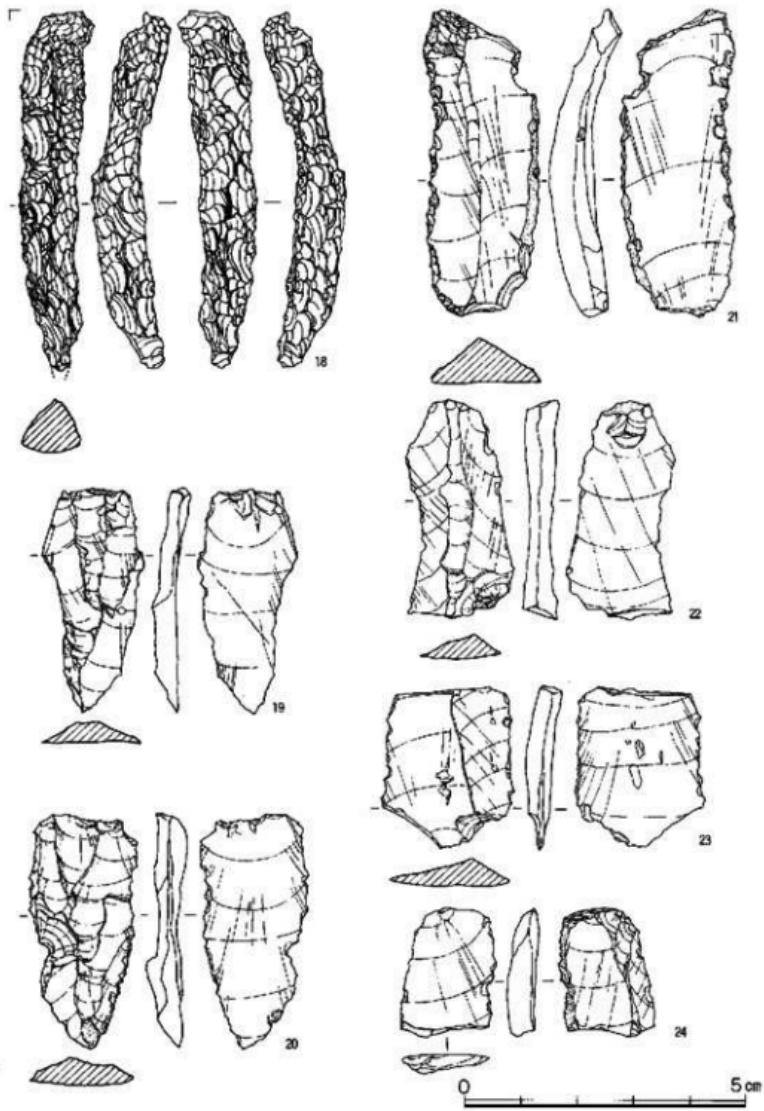
石器（第14～20図） 石器については第1・2地点あわせてここで観察を行う。いずれも遺構に伴って出土したものではなく、表上、表土下包含層から出土したものが多い。古代・中世の遺構の覆土からも一部出土しており、全体的にローリングを受けている。石鎌・石斧・削器・石錐・凹石・砥石などの種類があるが、その時期については決しがたい。以下、石器の器種ごとに、その特徴などについて述べる。

石鎌（第14図） 全部が22点出土した。うち16点を図示した。これらの形状は多様で、時期幅が大きいことをうかがわせる。基部の形態から2類に大別した。

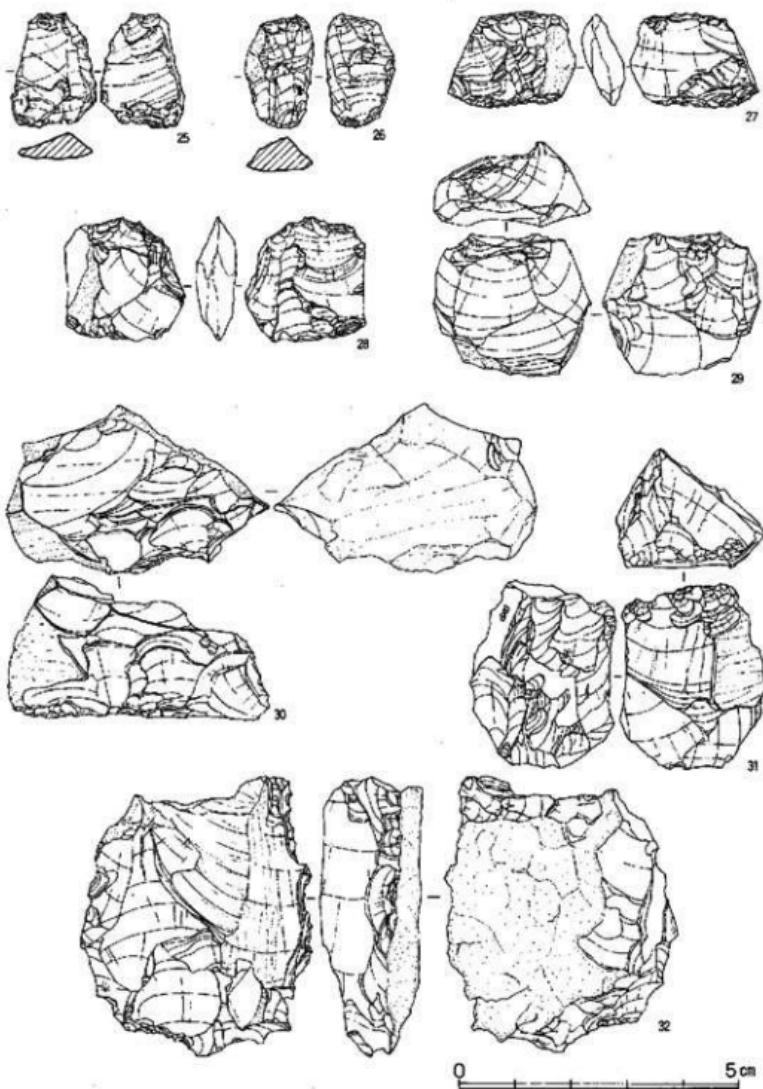
1類（1～10、17） 凹基をなす石鎌である。5は正三角形を呈し、抉入は全長の1/2ほどによよぶ。図示しなかったなかに同種の安山岩製のものが1点ある。1・2は抉入が全体の1/3以下に逆V字状に作られたものである。ともに鋸歯鎌の類で、全面に細い刺離が施されているが、1に比べ2の刺離は大きめである。3・4・6～10は抉りが弧状を呈するものである。3・6はそれが深めで、脚端部は幅広である。4、7～9は弧状の抉りが浅いもので、脚端部は尖り気味になる。4は正三角に近く、先端部下に下さく肩を設ける。9は先端部が欠損している



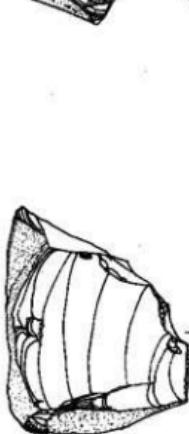
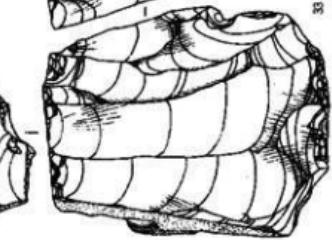
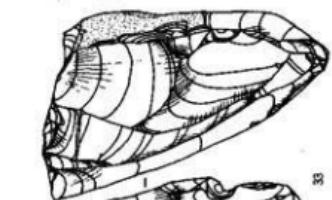
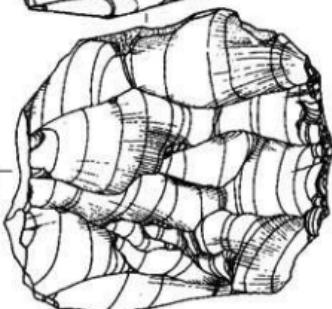
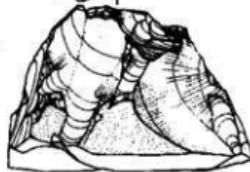
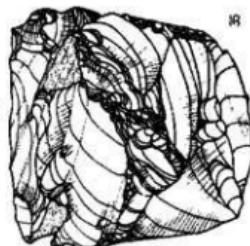
第14図 石器実測図 I (1/1)



第15圖 石器測量圖 II (1/1)



第16図 石器実測図Ⅲ (1/1)



が、他の石器と比べ細長のものである。両側縁は先端から直線的に広がり、下位に肩をもち、そこより脚端部にかけ内彎気味に続く。10は先端部を丸く調整した鎌で、弧状の抉りも深い。縱長剝片の打面を基部とした広義の剝片鎌である。17は剝片鎌で、先端部および凹基部に調整を施しているが、側縁部はそれがほとんどみられない。形状は五角形に近い。石材は3・9が古銅輝石安山岩の他はすべて黒耀石である。

II類(11~16) 平基をなす鎌である。11・12・14は基部が直線的なもので、正三角形に近い形状を呈する。11の脚端が丸みをおびるのに対し、12・14は尖る。13・15は基部が外方にやや張り出るもので、13は正三角形、15は二等辺三角形に近い。16は未製品である。石材は11~15が黒耀石、16が古銅輝石安山岩である。

石錐(第15図、18) 剥片利用を考えられる石錐である。断面三角形で、長軸上の端部に急斜度調整で刃部を作り出す。細部調整は全面におよび、角辺がそれぞれ刃部を形成する。基部にわずかな抉入が加えられ、つまみ状の部分を作りだす。全体的に細身で弧状を呈する。黒耀石製。

楔状石器(第16図、25~28) 25、26は縦形のもので、台形状を呈する。上下方向からの剥離によって形成される。26は表面に自然面残す。27・28は横形のもので、いずれも表面に自然面を残して剥離を行っている。いずれも黒耀石製である。

使用痕ある剝片石器<UF>(第15図、19~23) いずれも縱長剝片の端部あるいは側縁を使用している。20や23のようにバルブを切断したり済したりしたものがある。19は両端のバルブを除去し、一侧片に微調整を加えている。

石核(第16・17図、29~35) 29、31は縱長不整剝片を取った石核で、複剥離打面をもつ。32は石刃状剝片の石核で、表面は両設打面である。下端に調整を行う。いずれも黒耀石である。

33~35は良質の漆黒の黒耀石角礫を素材とした石核である。32は上下に打点をもつもので、上下とも打角は60度前後である。剝片剥離は左上から始まり、右横下、右端下、左上、右横上、右横上、右横下、左横下の順となっており、3~5cmの縱長剝片を剥ぎ出している。なお打面には調整痕がみられ、下の打面は一部研磨している。34も上下に打点をもつもので、上の打点の打角は90度前後、下は60度前後である。剝片剥離は右下から始まり、左下、右下、左上、左横上、左下の順となり、残核となっている。打面には上下とも調整痕がみられ、下の打面は一部研磨している。なお剝片の長さは3cm前後である。35は上下打面をもつ他、裏面中央に交互剥離の打面をもつ3面体石核である。最後の剝片剥離は上下に打点をもつもので、上下とも80~90度の打角である。最終剝片剥離は右下から始まり、左下、左横上、左横下、右上、右下、左横下の順で、4cm前後の剝片剥離を行なっている。打面には調整痕がみられ、下の打面は研磨している。

石斧(第18・19図、36~41) 36~38は磨製石斧である。36はやや幅広の始刃状の石斧で、頭

部は欠損し、刃こぼれがみられる。37は断面凸レンズ状で、両刃をなす石斧である。外縁部の欠損が著しい。38は両側縁が研磨され、石斧正面との間に棱を作り、断面は楕円長方形となる。いわゆる定角式磨製石斧の類である。

39～41は打製石斧である。39は安山岩製のもので、楔形を呈する。表裏面に主要剥離面を残す。調整は全周しており、表面右側に細い剝離が集中し、左側は比較的大きな剝離を行っている。刃縁はわずかに弧をなし、両刃となる。40も39とほぼ同様の形態。調整がみられるが、剝離面が39に比べやや大きめである。安山岩製。41は表面左側に段を設けるものである。右側は直線で、刃部は折損している。表面の剝離は大きめである。裏面は研磨によって平坦化しており、側縁にわずかに剝離痕が残るだけである。

削器（第19・20図、42・43）42は両端部が欠損するが、細長の台形状を呈するものと思われる。剝離は一側面に細かく両側から行なわれている。安山岩製。43は横型で、両側縁および下端に剝離を行う。しかし42に比べ剝離は大きい。あるいは打製石斧かとも考えられる。安山岩製。

砥石（第20図、44）一端が欠損する。残存部は長方体をなし、欠損部と一側面を除いたすべての面に研磨痕がみられる。特に裏面の研磨痕は、幅4mmほどの直線が10数本やや斜方向に残っている。

（3）小結

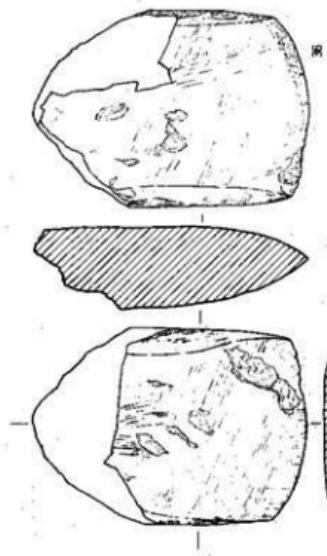
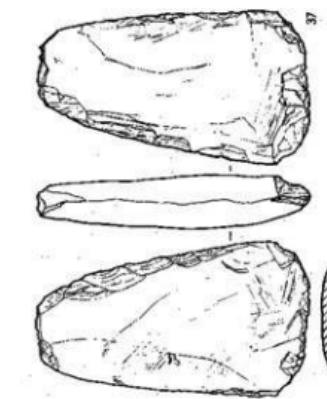
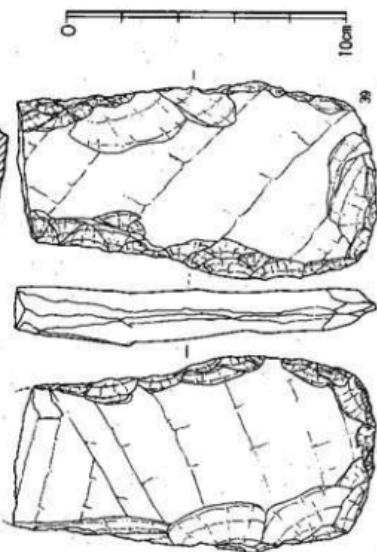
第2地点では、石器、上器などの出土から縄文時代の遺構の確認を行なったが、十分な成果は得られなかった。地山面とした黄褐色粘質土が包含層であることは判明したが、その時期については明確にしえなかつた。ただ埋甕状遺構の土器からすれば、縄文後期の可能性が強い。この黄褐色粘質土は田村遺跡の各地点に拡がっており、第3地点、第8地点でも明確な遺構は作らなかつたが、縄文後期の土器・石器が出土している。後世の削平をすでに受けたものと考えられ、遺構の検出は困難である。

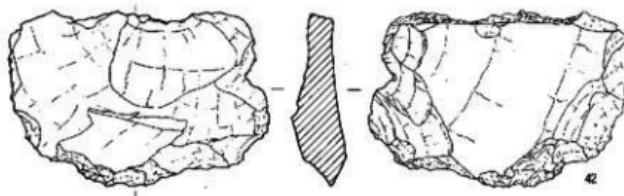
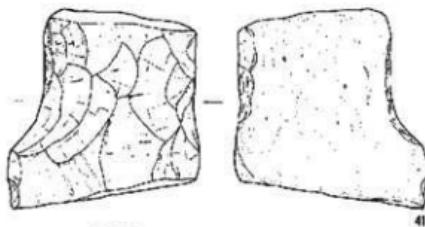
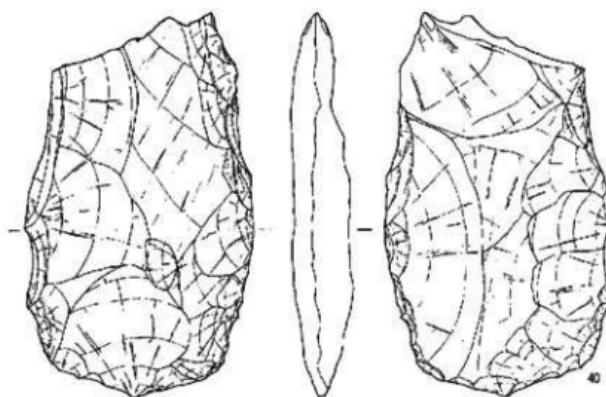
土器は縄文前期～晩期まで少量ずつではあるが出土している。これに伴う遺構がないことは前述したとおりであるが、この遺跡の南約800mに位置する四箇遺跡では良好な縄文時代の遺存が検出されている。おそらくこの遺跡近辺に何らかの遺構が存在するものと考えられる。

石器もその時期幅によるバラエティをもつが、ここでは第17図33～35の石核を中心に本遺跡出土の石器について留意点を記す。^{注12)}まず石材についてであるが、現在種々の黒耀石分析を行ない、産地同定が可能となってきている。こうした中で、科学的分析を行なっていないが、肉眼的観察から、本遺跡出土の黒耀石や四箇遺跡出土の黒耀石は、福岡平野で多く出土している黒耀石製石器類の中では、最も佐賀県伊万里市腰岳産出の黒耀石に似ているといえよう。剝片剝離技術からいくと、3点とも打面を上下両極にもち、打面調整を行なっており、また打面の一部を研磨する技術をもっている。剝出剝出しは、必ずしも上下を交互にくり返さないが、2～3

石器大图 V (1/2)

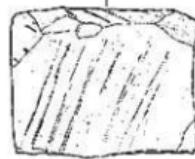
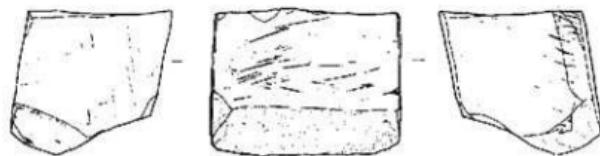
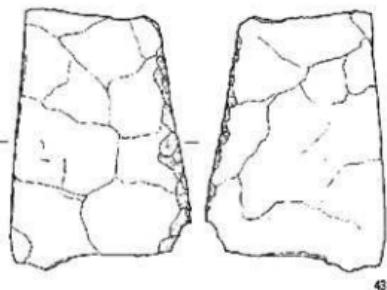
新18图





0
10cm

第19圖 石器実測図VI (1/2)



0
10cm

第20圖 石器實測圖面 (1/2)

回同じ打点から剥出し、他極の打点から剥出するという共通点をもっている。打面を上下両極にもつ剥片剥離法^{註2)}として、從来から鈴桶技法が知られているが、本遺跡出土の石核は剥片剥出工程及び打角が一定していないなど、鈴桶技法とは少し異なっている。本遺跡出土の石核と近似するものとしては、春日市柏田遺跡^{註3)}出土の石核がある。また剥片でみていくと四箇遺跡・柏田遺跡で、本遺跡出土の剥片と共にあるものがある。さらに石器組成からみていくと、剥片鑿・つまみ形石器・刀器状剥片などをもっており、西北九州の鈴桶型刀器技法の石核をもつ遺跡の石器組成と共通している。本遺跡出土の石器群は、時期決定はできないが、その多くが縄文時代後期のものと思われる。本遺跡出土の石核は類鈴桶型石核、剥片剥離法は類鈴桶型刀器技法と称すべきものであろう。

註1) 以下の考察は山口謙治氏(福岡市埋蔵文化財センター)による。

2) 杉原莊介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」考古学雑誌51-3、1966

3) 横田義章「西北九州における縄文時代の『剝片石器群』」九州歴史資料館研究論叢2、1976

3) 小池史哲(編)「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第4集」1977



图21 古河川5・6区全剖面 (1/100)

3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構

弥生時代に属する遺構は、調査区の東北～西南斜辺に沿うようにして流れる古河川に付設された水利のための各種遺構である。また台地上にも、SD30のように、古代、中世の遺構面を検出する際、古河川の肩部分で途切れ、明らかにこの河川に伴うものとわかるものがある。

古河川は、台地端から場所によってはかなり急に落ち、台地上面と川底との比高差は1.1～1.5mを計る。ただ川底も礫が露出している部分は高い傾向がある。これは自然流路と考えられ、西南から北東に向って流れる。また西北端から西側に沿って南流する溝？がこれに合流している。調査区内で見出せたのは、この河川の左岸とその内側のわずかな部分だけで、河幅等については不明である。第1地点で確認したのは古河川が、この対岸部分をなすものであるなら、その川幅は100mを超えるものとなる。ただ、第1地点と第2地点の間の試掘調査結果や、1982年度に行った第3～5地点の発掘調査からすれば、流路の変更が幾度かあったことが知られており、必ずしも各種水利遺構が付設された時にこの川幅をこの河川が有していたとは考えにくい。土層の堆積状態および出土遺物からすれば、この河川は短期間に埋没したものと考えられる。その後古代、中世の時期に何らかの整地を行って、この上面が生活面として使用されている。

この古河川の左岸に接して、西よりSX18、SX17、SX16、SX15、SX14、SX13の遺構が構築されている。また河岸に沿った杭列や、川底の杭列もみられる。河川中にはこれらの遺構に絡まつたりして、多くの自然木、杭、農耕具などが出土した。ただ土器類は少なく、弥生中期後半を中心とした破片が、パンケース2箱たらず出土したにとどまった。

以下、各々の遺構についての説明を加えてゆくが、各遺構の関連性等については小結の項で述べたい。なお古河川の調査にあたっては、その進行に応じて、東より1区～6区と便宜的に地区を設定した。表中にはこの地区割りで記したが、本文中では全体の地区割を用いた。

SX17棚状遺構（第22図） A-6区（河5区）の川底に構築された棚状遺構で、全長約8m、幅約1.5mをはかる。この遺構は、複雑な出入りをみせる左河岸から約1.5m離れ、発掘区の西側壁から南北方向に延びている。その東北側にはSX16水溜状遺構が付設されている。また前庭部にも、この遺構と関連すると考えられる杭などがみられる。

SX17棚状遺構は、ほぼ前後2列に打ち込まれた杭、それを固定した横木などからなる。この構造を細くみてゆくと、まず建築材を再利用した長さ3m余のW323を横に置き、それを南側からW320、321、370、371などで固定する。この場合、W320、W321は杭頭部を河岸に向けるのに対し、残りのものは河中央部に向いている。また北側からもW304、W374などを打ち込み、さらに固定を強くしている。このW323を枕木にするかのように、W301～304、306～315、335、

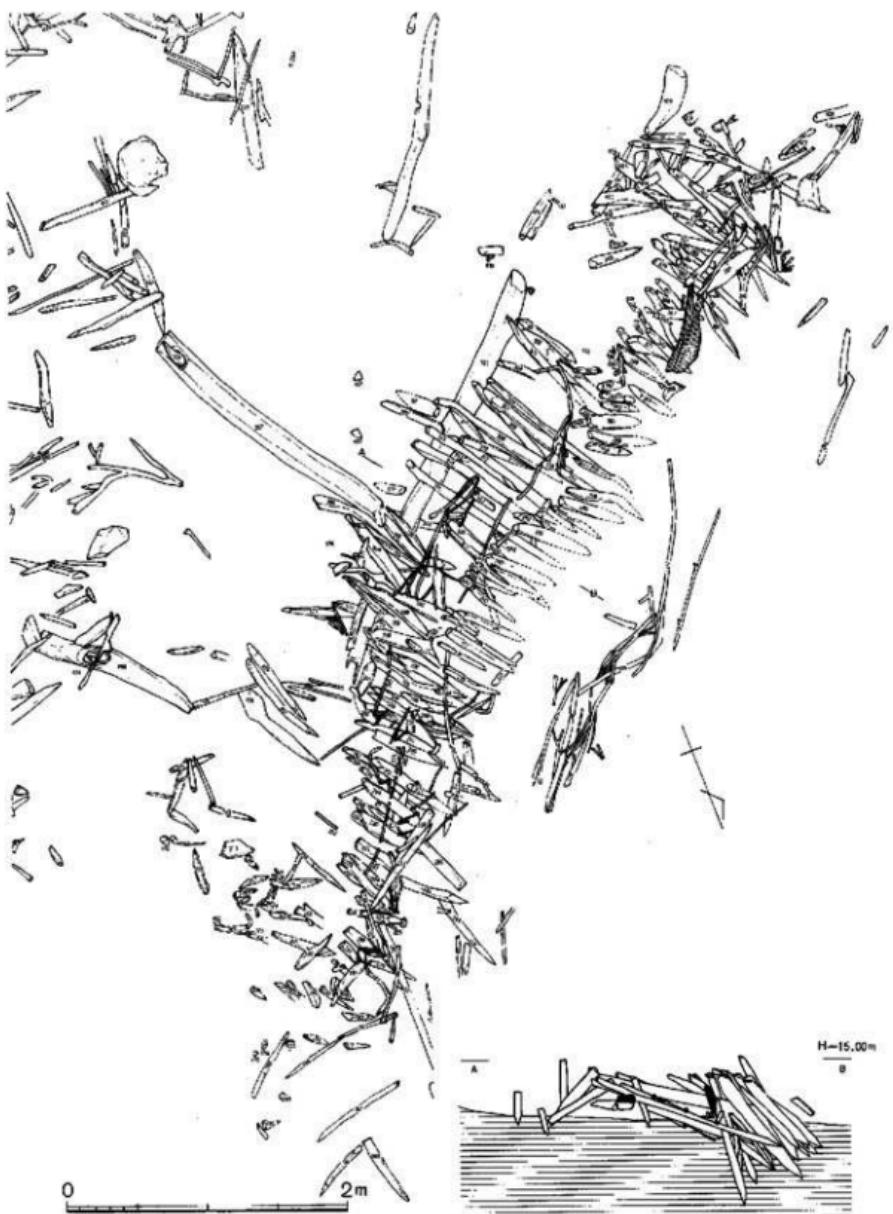
340、344、349～352、354～359などの杭が、北西方向から打ち込まれている。これらの杭が1列目を構成しているのだが、W354～359を除けばいずれも打ち込み角度20度未満と小さく、あたかも川底にはわせたかの様相を呈している。またこれらの杭は、2列目の杭の下にもぐり込んでおり、残存長も大きい。杭と杭との間に、少なくとも上、下2ヶ所、小枝状の横木で繋がれた痕跡が残る。この1列目の杭は、遺構の南北中央部に位置するW323の幅の範囲にあり、その両側に明確に延びるものはない。これに対し2列目の杭は、多少の乱れはあるものの、遺構の西南端から東北端まで続く。杭の打ち込まれる角度は60度前後で、1列目に比べ直立気味である。杭の間を繋ぐ横木は、遺構の両側に部分的に見られるだけで、中央部ではない。両端部は杭が乱れており、特に南西端部は2列目の南側に多数の杭が打ち込まれている。

この桿状遺構の中央部北側には、河岸にはさまれ小枝が、南西～北東の向きで集積している。前庭部の川底には、この遺構と直交して建築材を利用した横木が2本置かれている。1本はW357で、東南端部は枘穴を利用して杭(W433)で止めているのに対し、もう一端はSX17の1列目の杭の上に載っている。柵状遺構と関連性をもつとするなら、この出土状態は不自然で、西北端は本来、その南西側のW431とW432の間に固定されていた可能性が強い。もうひとつは、W357から北東に約2m離れた、やはりSX18に直交するW669である。これも建築材を転用したもので、中央の枘穴に杭(W434)を打ち込み固定をはかっている。ただ短いため、SX18とは約1.3mの間隙をなす。またSX18の北東端から、これに向うような杭がみられる。これら前庭部川床に設けられた横木が、どのような機能をもってSX17と関わっていたかについては、いまひとつ明確にしがたい。

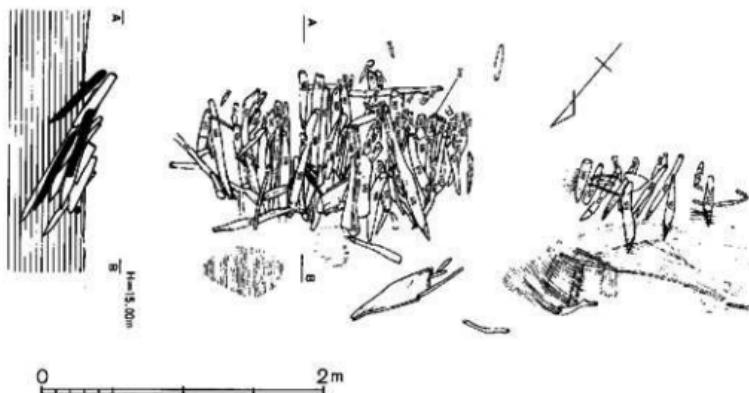
SX17桿状遺構を構築する杭材は199+α本におよび、さらに横木がこれに加わる。取り上げた199本の杭材の内訳は、丸杭111本(55.8%)、半截杭3本(1.5%)、角杭58本(29.1%)、板杭16本(11.1%)、その他5本(2.5%)となる。圧倒的に丸杭が使用され、その後に角杭が続く。その他としたものは杭として利用されているものの、材の先端部を削り尖らせていないものを指す。横木はすでに述べたW323のように建築材を転用したもののが他に1点、角

樹種	根性	丸杭	半截杭	角杭	板杭	その他	樹種計
シイ	50	2	46	13	4	115	
カシ	14	1	3	1			19
タブノキ	3	—	—	—	—		3
ユズリハ	3	—	—	—	—		3
サカキ	6	—	—	—	—		6
シャシャンギ	2	—	—	—	—		2
ヤブツバキ	2	—	—	—	—		2
ヒサカキ	3	—	—	—	—		3
イヌイワ	1	—	—	—	—		1
モチノキ類	1	—	—	—	—		1
タリ	9	—	7	1	1		18
カキノキ	5	—	—	—	—		5
ヤナギ	1	—	—	—	—		1
ガマズミ	—	—	—	1	—		1
アリヅキ	2	—	1	—	—		1
ヤマグワ	1	—	—	—	—		1
サクラ類	1	—	—	—	—		1
欅	1	—	—	—	—		1
不明	5	—	—	1	6	—	12
杭種計	111	3	58	22	5	199	

第4表 SX17構築杭杭種・樹種一覧表



第22図 SX17構造実測図 (1/40)



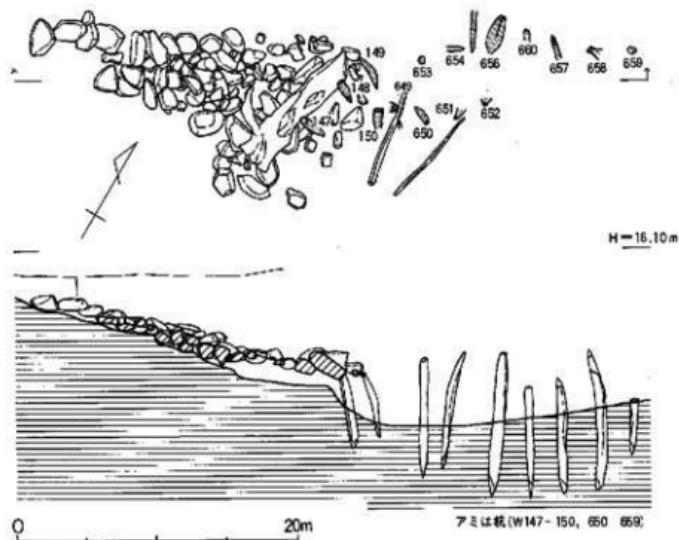
第23図 SX18構造実測図(1/40)

樹種	品種	丸杭	平裁杭	角杭	板杭	その他	樹種計
シイ		23		10	—	—	33
カガシ		18	—	1	—	—	19
タブノキ		4	—	—	—	—	4
ユズリハ		13	—	—	—	—	13
サカキ		3	—	1	—	—	4
ヤブツバキ		2	—	—	—	—	2
ヒサカキ		2	—	—	—	—	2
マツ		1	—	—	—	—	1
クスノキ		1	—	—	—	1	2
モチノキ類		1	—	—	—	—	1
エゾノキ		1	—	—	—	—	1
クリ		—	—	6	—	—	6
カキノキ		2	—	—	—	—	2
アワブキ		3	—	—	—	—	3
クヌギ		3	—	—	—	—	3
アカメガシワ		1	—	—	—	—	1
ノリウツギ		1	—	—	—	—	1
カエデ類		1	—	—	—	—	1
散孔材		4	—	—	—	—	4
不明		1	—	—	—	—	1
杭種計		85	0	18	0	1	104

第5表 SX18構築杭杭種・樹種一覧表

材、板材を使用しているものが3点、残りは木の枝を利用したものである。SX17の周辺部には、かなり多くの杭材がみられ、本来はさらに多くの杭材を用いたものと考えられる。取り上げた杭材については、第1地点で示した鳴倉先生の表にならって、その杭種と樹種を第4表に掲げた。樹種では判明した186点のうちシイが115点で60%強を占めている。SX17を樹種別に色分けすれば、シイがほぼ1、2列目ともまんべんなく使用されているが、西南側では各種の杭が混り合い、北東側でもカシを中心とした杭が多くなっている。

また中央部の一画にはクリだけで構成

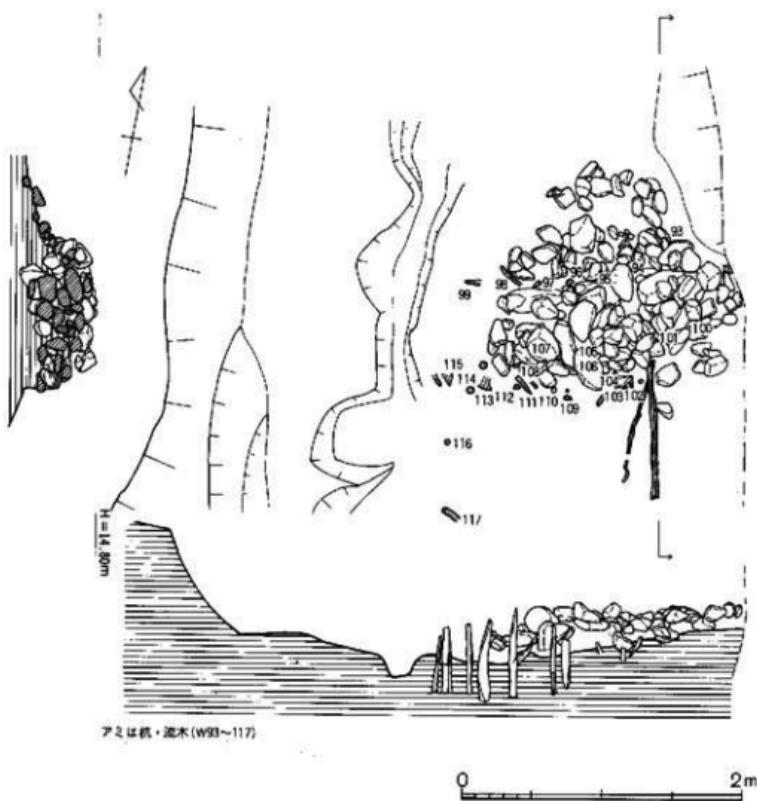


第24図 SX15実測図 (1/40)

される部分がある。これらの樹種の変化は、樋状造構の構築、改修などと大きな関り合いをもつものと考えられる。横木として使用されていた小枝状のものは、ユズリハ、サカキ、ヤナギ、ヒサカキで、他のものはクリが1点ある以外はシイである。

S X 18樋状造構（第23図） A - 6区で検出したもので、S X 17の西北約6mに位置する。西南一北東に列をなす、全長4mほどの樋状造構である。ただこれは連続しておらず、中央や西側寄りで1m弱途切れている。杭は東南から西北に向って打ち込まれ、その傾斜角度は30度木満のものが多い。杭の密度はS X 17に比べ著しく高く、103本もの杭が幾重にも絡みあっていいる。横木は少なく、南側に3本、杭を転用したものがみられるにすぎない。またこの造構の北側には小枝を絡ませた葉状のものが、特に西南側を中心に敷きつめられた状況を呈する。

これを構築している104本の杭は、丸杭84本、角杭18本の2種の他に建築材の転用1点だけでも丸杭がその80%強を占めている。これに対しその樹種は多く、18種余におよんでいる（第5表）。鑑定結果を得た98点のうちシイが33本（33.7%）、カシ18本（18.4%）、ユズリハ13本（13.3%）を除けば、6本以下で、1本のものも6種ある。大まかにとらえれば、シイが樋の最下部に打ち込まれている傾向がある。



第25図 SX14実測図 (1/40)

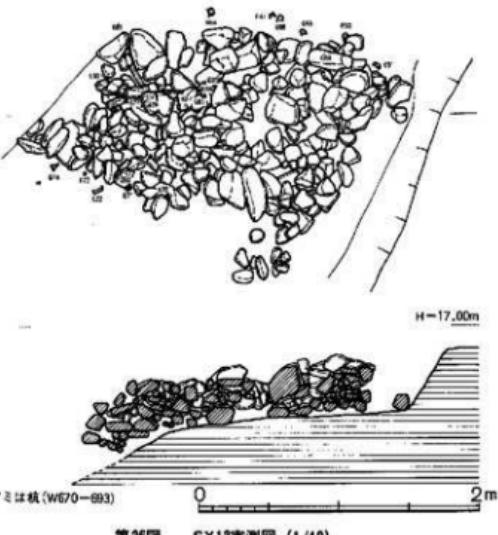
S X15 (第24図) C-5区で検出した。台地の肩部から川底に続く石敷きと、その先端部北側寄りから東側に延びる2列の杭である。石敷に使用された石は、20~30cm大のものが多いが、特に扁平なものという訳ではない。南側はすでに崩壊していたが、その幅は1.2mほどと推定される。台地肩部から距離にして約2m、比高差にして0.5m下った所で石敷は途切れ、そこに径20cm、長さ100cmの枝つきの丸木を横置している。この木は東側から2本の杭によって固定されており、これより東側に、北側8本、南側5本からなる杭列が延びている。杭はほぼ垂直

に打たれる。その種類は丸杭 6 本、半截杭 1 本、角杭 5 本、板杭 1 本で、樹種別にみればシイ 12 本、カシ、サカキ、コナラ各 1 本となる。石敷と杭列は、その配置等からみても同一遺構として把えられ、河川を利用する際の登り降りに供されたと考えられる。

S X14 積遺構（第 25 図） D - 4 区の河川底で検出したが、東側は調査区外にかかりその全体を把握するこ

とはできなかった。遺構は河左側下端から 0.5m 離れ、まず杭を南北 2 列に打ち込み、その間を暗黄色の砂と拳大の石を充填したものである。幅は約 1.2m で、北側には転石がみられる。残存高は 0.6m で、断面は半円形をなす。河岸下端との間には幅 0.3m、深さ 15cm ほどの小溝があり、これに沿うように南側へ W116-119 の杭列が 1.5m 続いている。発掘区内で S X14 に使用されていた杭は 30 本近くあったが、先端部分付近のみの残存も多く、取りあげたのは 23 本にとどまった。その種類の内訳は丸杭 12 本、半截杭 1 本、角杭 8 本、板杭 2 本である。樹種別にみるとシイ 11 点、タブノキ、サカキ各 3 点、ユズリハ 2 点、クリ、トネリコ類各 1 点、不明 2 点で、シイが多い。遺構内の樹種の違いによる特徴は特にみられない。石組の井堰となると考えられる。

S X13 石組遺構（第 26 図） E - 3 区で検出したが、調査区外にかかり、遺構の全貌は明らかにできなかった。幅 1.5m の石組が、河川左岸の段落ち部分から東に延びている。石組は 10cm 大の石から 40~50cm 大の石を積み重ねたもので、厚さは 40~50cm に達する。この両側および東側中央部には 3 つの杭列がみられる。うち内側の杭列はこの石組を固定する役割を果しているが、中央部の杭列は石組下にあり、その機能は問題が残る。杭種は丸杭と角杭が各 10 本、板杭が 4 本である。樹種は圧倒的にシイが占め（17 点）、他にはヒサカキ、サカキ、クリ、タブノキ、ユズリハが 1~2 点あるにすぎない。中央部の杭列は樹種の混りが多い。この遺構の性格は判



第 26 図 SX13 実測図 (1/40)

然としない。

S X16水溜状遺構 S X17棚状遺構の内側にある幅3.5m、奥行4.5mの入江状の遺構である。河岸肩との比高差は80cmほどで、南に向って緩く下っている。一番奥まった所に溝状遺構が取りつけられ、台地上にと続くが、すぐに途切れる。遺構底からは三叉鍬などの農耕具片がまとまって出土した。

杭列 三ヶ所で確認した。一ヶ所はB-5区の河底で、4本の杭(W644-647)がほぼ南北に1m並ぶ。いずれも角杭で、樹種はシイ2点、カシ、ヤブツバキ各1点である。二ヶ所目はS X15の西から、河底下端に沿って打ち込まれた5本の杭(W139-143)で、1.3m続く。いずれも角杭で、樹種はシイである。もう一ヶ所はS X14の西側河底の杭列で、4本の杭(W116-119)が1.5m続く。1本が角杭の他は丸杭で、樹種はユズリハ2点、シイ1点である(1点不明)。これらの杭列の残存状態は良くなく、各杭材も先端部近くだけを残すものが多い。この他単発で河底に打ち込まれた杭も多くみられた。

(2) 遺物

古河川およびそれに付設された遺構から出土した遺物は、土器・石器・木製品であるが、木製品を除けばその量は少ない。石器についてはすでにとりまとめて述べたので、ここでは土器と木製品について観察を行う。

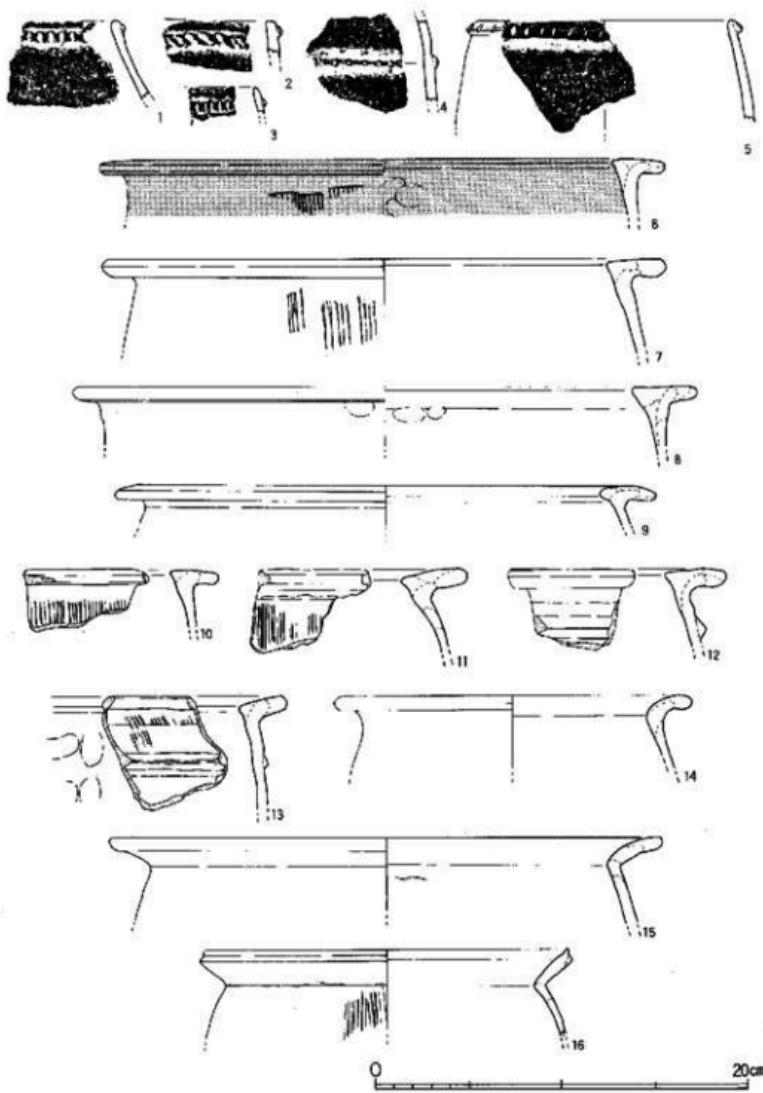
土器 (第27~29図)

出土量はパンケース2箱足らずと少なく、またそのほとんどが小破片であった。一部縄文後期の土器片が出土しているが、これについては縄文時代の遺物の項に入れた。ここでは夜臼式も含め弥生時代の土器を扱う。その主となるのは、中期後半~後期初頭の土器である。以下、器種ごとに観察を行なってゆく。

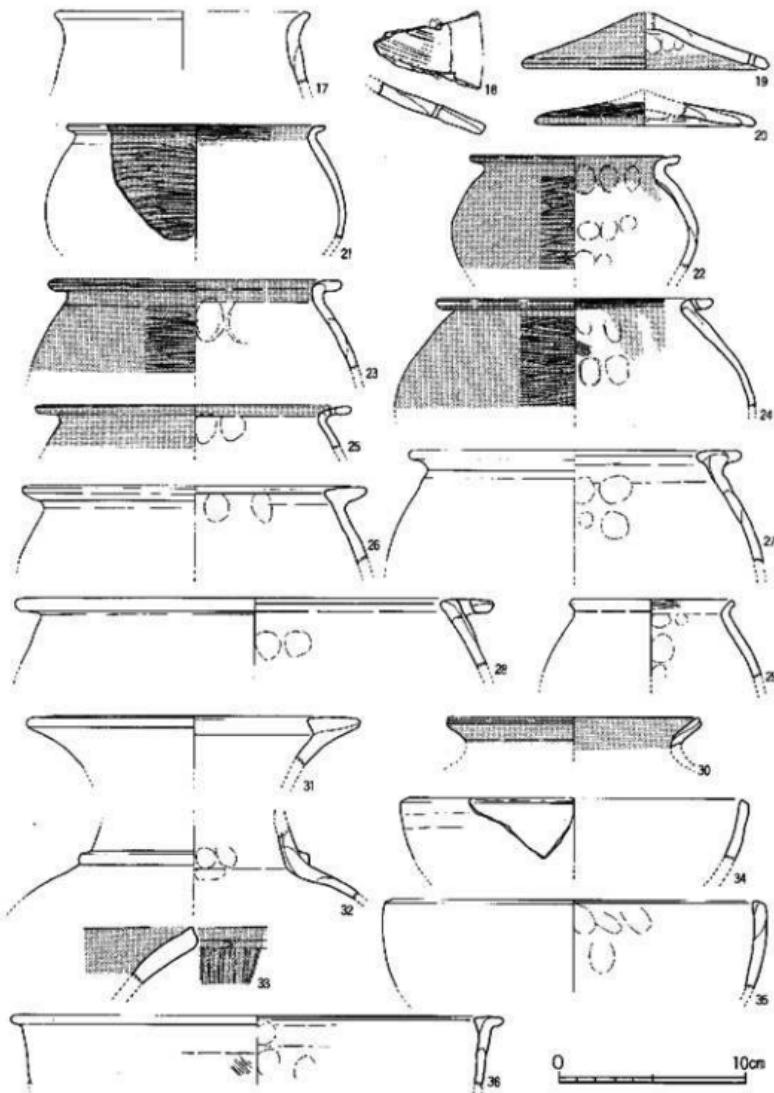
壺形上巻 (1~16) 1~3・5は夜臼式の壺形土器である。内傾する口縁部の外側に一条の刻目突帯を設けている。傾きからすれば、胴部にも一条の刻目突帯をめぐらせるものであろう。残存部はいずれもナデで仕上げている。4は板付II式の胴部片で、小さな刻目を有する突帯を一条めぐらせている。いずれも胎土に砂粒を混え、焼成良好、暗褐色~灰黒色を呈する。

6~13は、逆L字状口縁を呈する一群である。口縁上面がほぼ平坦なもの(6~9)、外傾するもの(10)、内傾するもの(11~13)に細分できるが、その差は大きいものではない。12~13は口縁下に一条の断面三角形の突帯をめぐらしている。磨減が著しいが、外面は縦の刷毛目、内面はナデで調整されていることがうかがわれる。また6には残存部の内外面とも丹が塗布されている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、暗褐色を呈するものが多い。

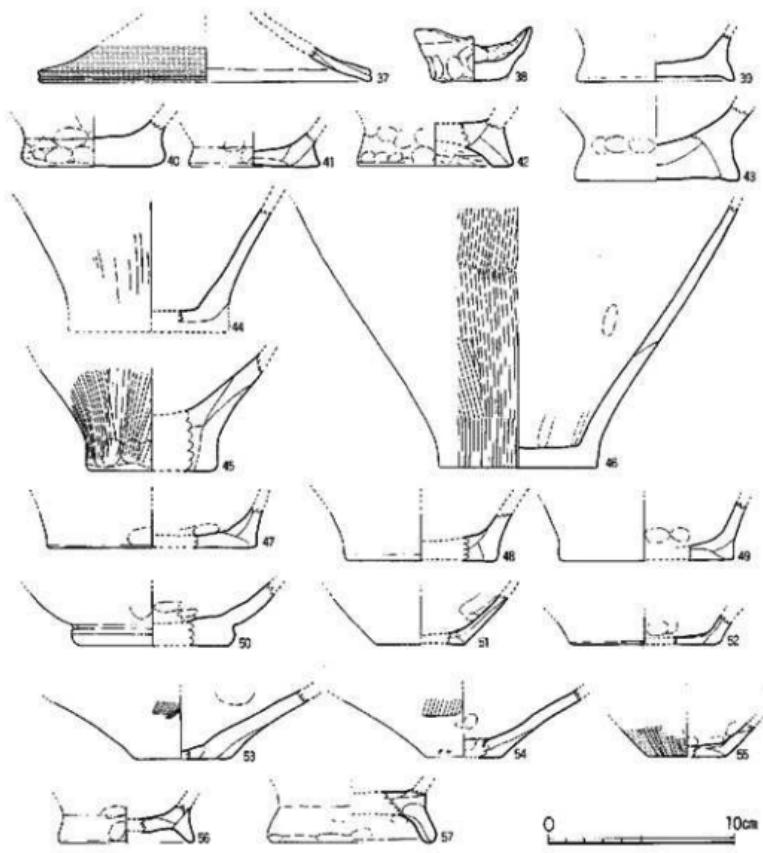
14~16はくの字状口縁をなすものである。14・15が外反部内面もゆるやかで、口縁端部も丸みを帯びているのに対し、16は内面に稜をつくり、端部も角ばっている。調整は外面が縦刷毛



第27圖 出土土器實測圖 I (1/3)



第28図 出土土器実測図 II (1/3)



第29図 出土土器実測図面 (1/3)

日、内面が横ナデを主体に行なっている。胎土は砂粒を混え、焼成良好、14が淡黄褐色、15・16が茶褐色を呈する。いずれも磨滅が激しい。

壺形土器 (17~33) 17は内傾する頸部から口縁部が短く外反したもので、内外面とも横の擦磨を行っている。胎土には砂粒を混え、焼成良好、暗褐色を呈する。夜白式に属しよう。

21~28は無縫壺である。口縁部の作りから、丸く外反するもの(21~25)、丸く外反し上面が平坦になるもの(25)、逆L字状口縁に近いもの(26~28)に細別できる。このうち前2類にか

かるものは、精良な胎土を用い、外面は横の箝調を行っている。外面および口縁部内側に丹塗りを施す。口縁部には紙孔を対に2孔ずつ設ける。26~28は胎土中に砂を混える。調整は磨減が著しく明瞭でない。部分的に付塗りの痕跡も残っている。これらの無頸壺はいずれも焼成良好で、淡黄褐色~淡赤褐色を呈する。18・19は無頸壺の蓋をなすものである。笠状の形態をなし、割裂・胎土・色調も無頸壺と変る所はない。ただ18の残存部には丹塗りは見られない。

29・30は短く外反する口縁をもつ壺形土器である。29は球状に近い胴部をなす。磨滅が激しく外面の調整は不明、内面は指ナデ。30の残存部は丹塗りが行なわれている。31は動形口縁をなす広口壺、33はラッパ状に口縁が聞く広口壺である。32は31の類の肩部で、一条の三角突帯をめぐらせており、いずれも磨減しているが、33の残存部は全面丹塗りで、また外面にはタケ研磨が暗文様に施されている。

鉢形土器 (34~36) 34・35は内湾氣味に立ち上る口縁部をなし、端部は外傾する。残存部内外面ともナデで仕上げる。36は逆L字状の口縁部をなす、34・35に比べひとまわり大きい鉢である。外面には斜削毛口の調整痕が残る。いずれも胎土に砂粒を混え、焼成は良好である。

高杯 (37) ラッパ状に聞く脚部部である。端部はナデにより窪む。外面には丹を施している。胎土は精良、焼成も良好で、赤褐色を呈する。他に動形口縁をなす杯部片も出土した。

手捏ね土器 (38) 口径6.3×5.4cm、器高2.8cm、底径4.1cmをはかる、鉢形土器を模した手捏ね土器である。口縁部は波うち、内外面とも多くの指頭痕が残る。胎土には砂粒を混え、焼成良好、暗褐色を呈する。

底部 (39~57) 39~43・56・57は夜日式の壺形土器の底部であろう。台形状に開き、あげ底氣味のものが多い。56・57は台的なものをなすと考えられる。

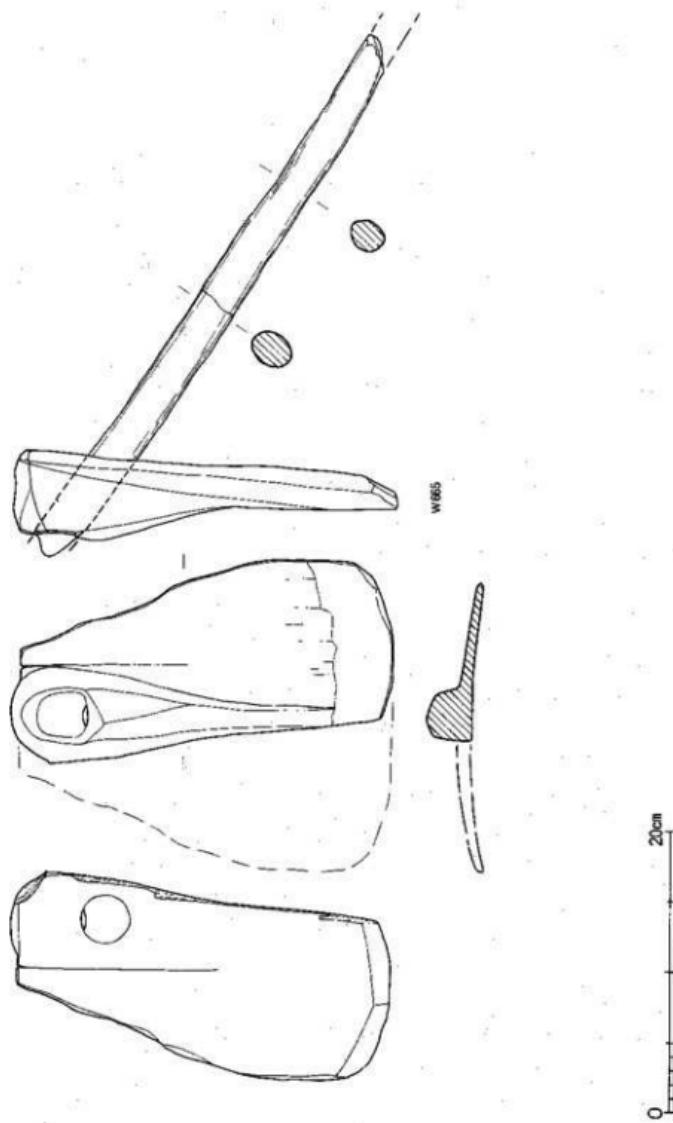
44~49は弥生中期の壺形土器の底部で、平底をなす。外面には縦の刷毛目調査、内面はナデで仕上げる。45は底部の陥み等からして前期に属する可能性もあるが、小片で断定しがたい。

50は夜日式に伴う壺形土器の底部であろう。円盤状の底部をつくる。51~55は弥生中期の壺形土器の底部で、小さな平底から洞部が大きく張りだすものが大半である。外面には刷毛目の痕跡が残るものもある。55の外面は縦の荒研磨の後、丹を塗布している。

木製品 (第30~39図、第6~17表)

古河川内からは、杭を中心とする多量の木器品が出土した。そのうち取り上げを行なったのはW81~W699の619点 (W329・669・694~698は欠番) で、その内訳は農耕具25点、建築材7点、用途不明製品1点で、残りは棚状造構・杭列等の構築に使用されていた杭・横木材586点である。以下、個々の木製品について器種ごとに説明を加えてゆく。なお遺物の計測値は福岡市拾六町ツイジ遺跡の計測方法に準拠した。¹³⁾

農耕具 農耕・土木具としては平鋤1点、三叉鋤13点、鶴3点、又歛刀部片6点などが出土した。農耕具本体に使用された材の樹種はいずれもカシで、柵目取りを行なっている。



半鉄（第30図） W665は着柄状態で出土した。身部が全長27.2cm、推定復元幅22.2cmを計る平面台形状をなす広鉄であり、厚さ4.2cmの柄孔隆起を残して半折している、所謂舟形隆起状を呈しており、頭部に向かって若干突出している。身部は身表側に向かってやや湾曲しており、身は厚く刃部下4.0cmでは、1.3cmに達する。刃縁部には使用によるとみられる磨滅、刃こぼれが観察され、また端部は打圧によってさざくれており、砂粒のくい込みがみられた。残存する刃縁部の中央に新たに稜が削り出されていることから、身部が半折した後に刃部に再加工を施し、再び狭鉄として使用したものと考えられる。柄部は残存長43.5cm。割材を断面梢円形状に加工している。先端部は使用、接地による磨滅が著しい。身部との着柄角度は57度を計り、両者とも明瞭な加工痕は観察されなかった。柄部はサカキの芯無し材を用いている。現在のところ北部九州において同類の半鉄は検出されておらず、北部九州における舟形隆起をもつ平鉄の変遷をたどる上で注目される資料である。

三叉鉄（第31～35図） 出土した三叉鉄は、他遺跡出土の司器種のものと比較すると、以下に述べるような共通の特色がみられる。

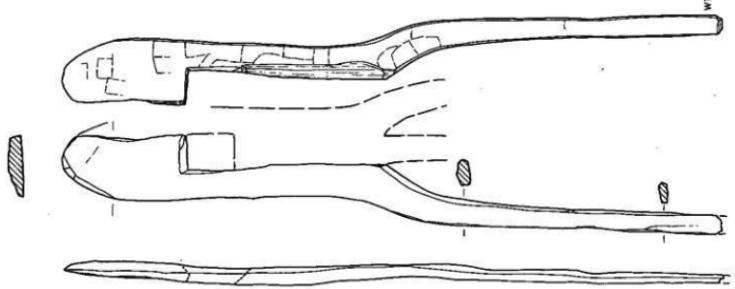
- ① 身部全長が60cmを超える長い三叉鉄である。
- ② 刃部も①に付合して長く完形では40cm内外を計るものが多い。
- ③ 刃部は身表側に向かって若干の反りをもつように削り出されている。
- ④ 両側縁の刃部はあまり外側へは張り出さず、三本とも併行して刃先に伸びるものが多い（W159・W663など）。
- ⑤ 柄孔隆起がひとまわり大きいものを含む（W573・616など）。
- ⑥ 破損に際して、特に中央の刃部の破損、欠損の割合が高く、柄孔部から刃部に向かって抜き取られたような欠損状態を示しており、使用時の衝撃による破損と考えられる。
- ⑦ 器表の磨耗が著しく加工痕の残在状況は良くない。

以上のような共通要素をふまえたうえで、ここでは便宜上身頭部の形態によって、頭先端部が三角形状を呈するもの（I類）、頭先端部がコの字状に加工されているもの（II類）、先端部はI類ほど尖らずにまるみをもつものの（III類）に分類した。

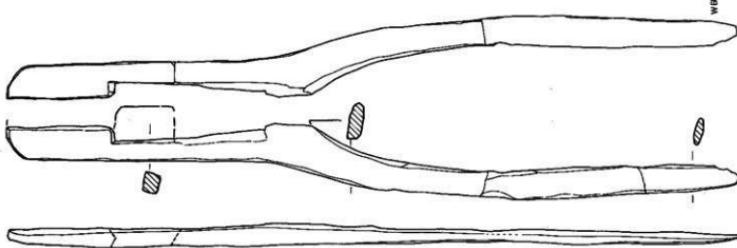
I類にあたるものは、W159・663・157である。W159は出土三叉鉄中で最も残存状況が良く、全形を知りうる好例のひとつである。全長61.6cm、刃部長40.1cm、頭部長21.5cm、基部長74.1cm、復元推定幅17.0cmを計る。中央刃の一部を残して半折しているが、側縁刃はほぼ先端部まで遺存しており、外側へはあまり張り出さずにまっすぐに端部に向かって伸びている。刃は断面六角形状に削り出されており、身表側に向かっての湾曲が顕著である。柄孔は 5.6×5.2 cmの長方形（推定）、穿孔角度（K-1）は49度である。基部長が、他と比較して短いことを特徴としている。器表は磨滅が著しく明瞭な加工痕は観察されなかった。W663はW159と同じく半折した状態で出土したが、中央刃は完全に欠失している。全長73.8cm、刃部長43.0cm、基部

20cm
0

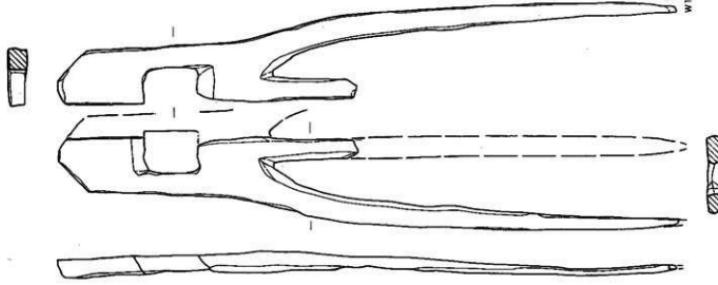
W155



W156



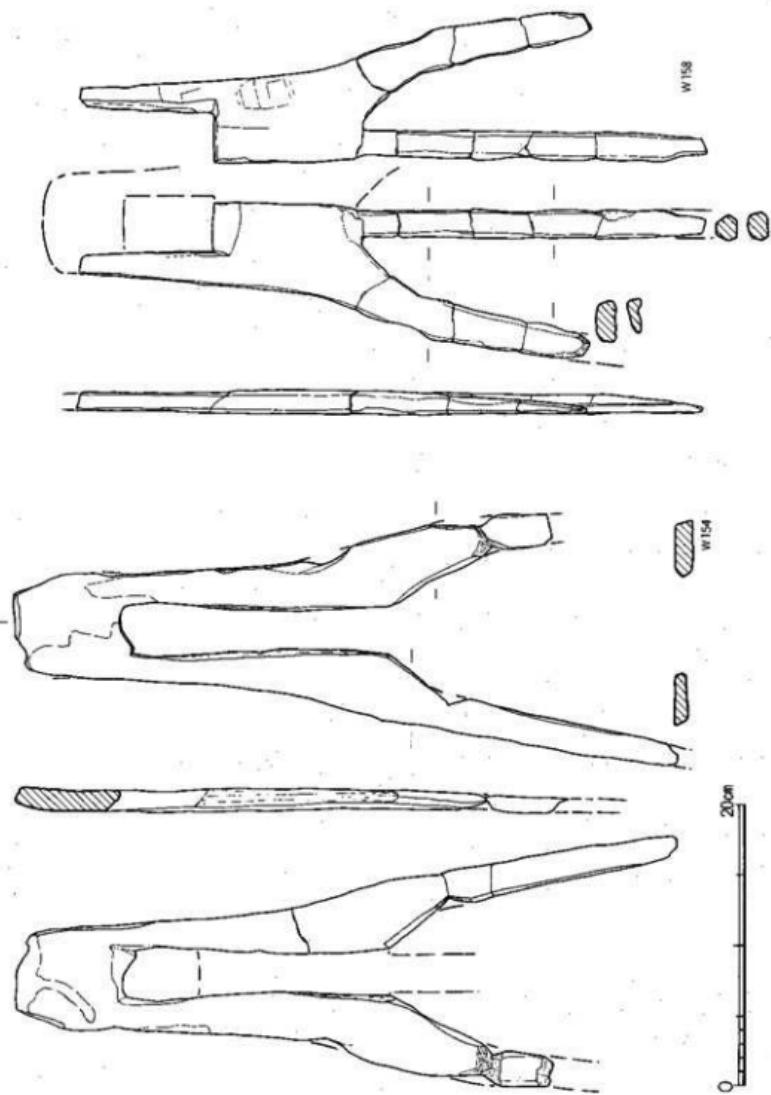
W159

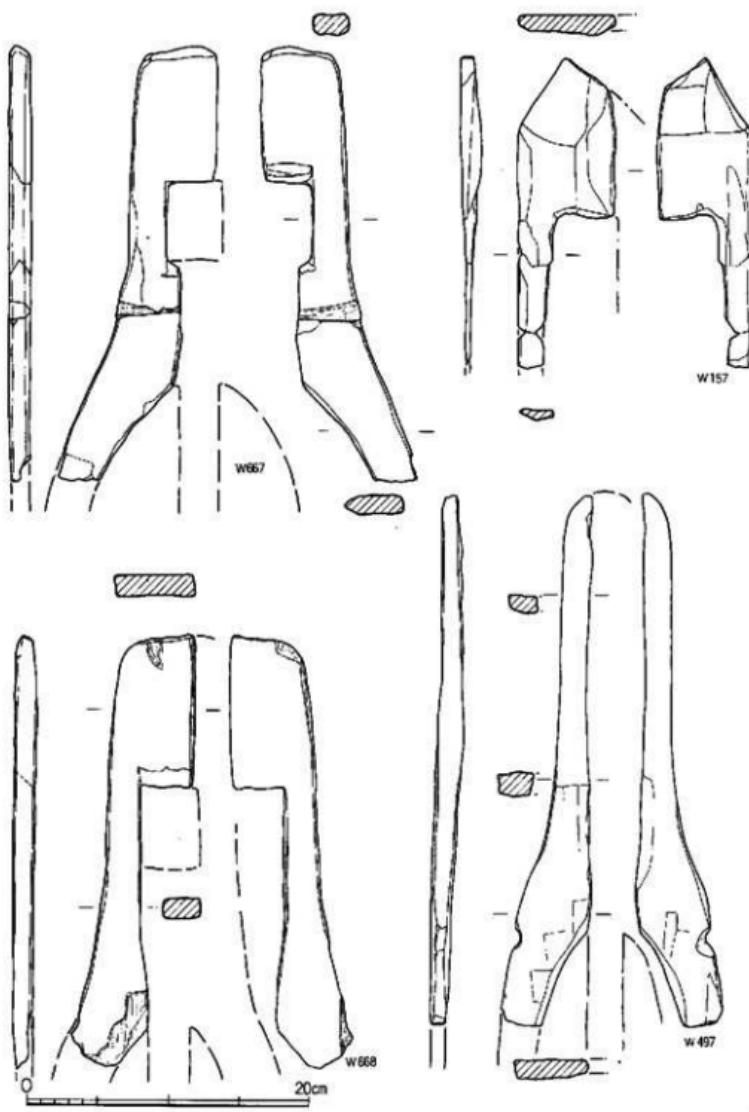




W158

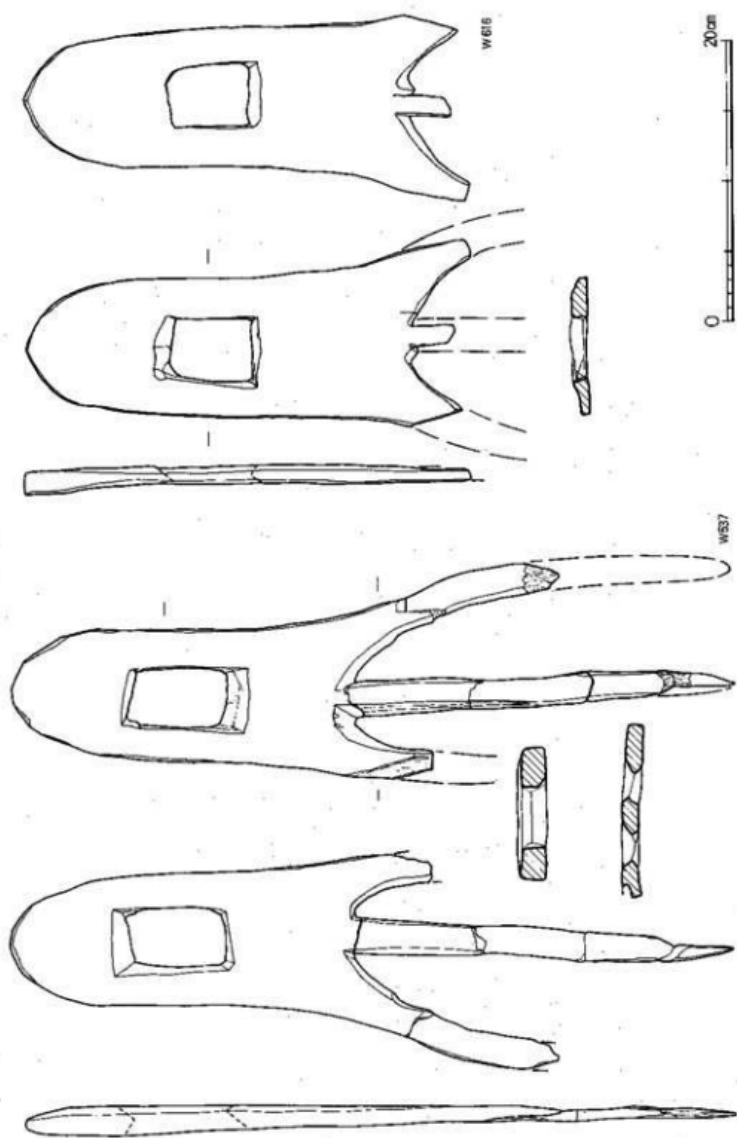
W154



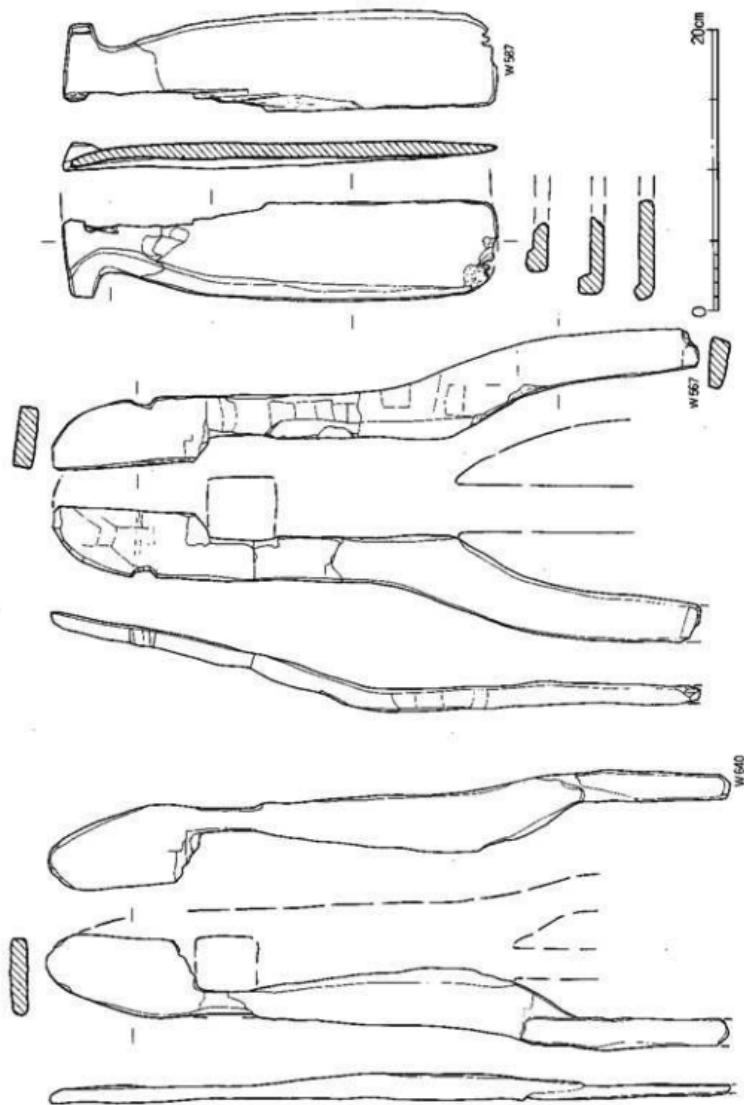


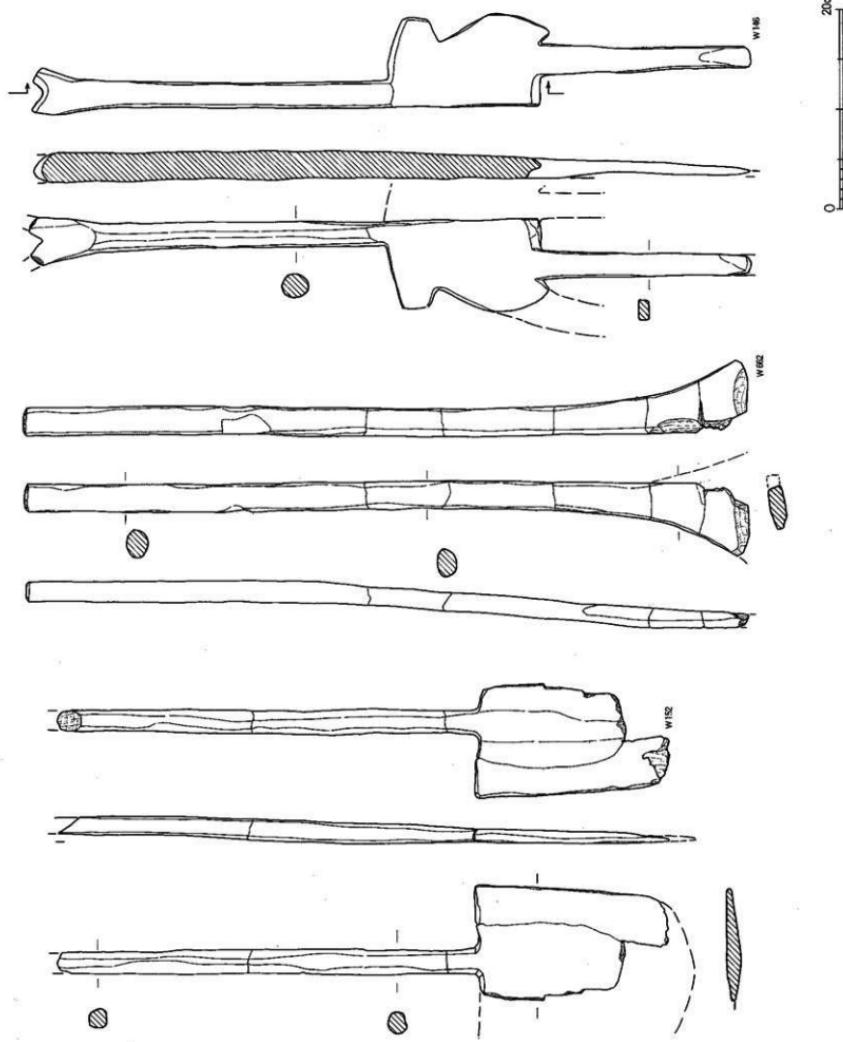
第33図 木器実測図IV (1/4)

第34图 木柄实训图 V (1/4)



第35圖 木器實測圖 II (1/4)





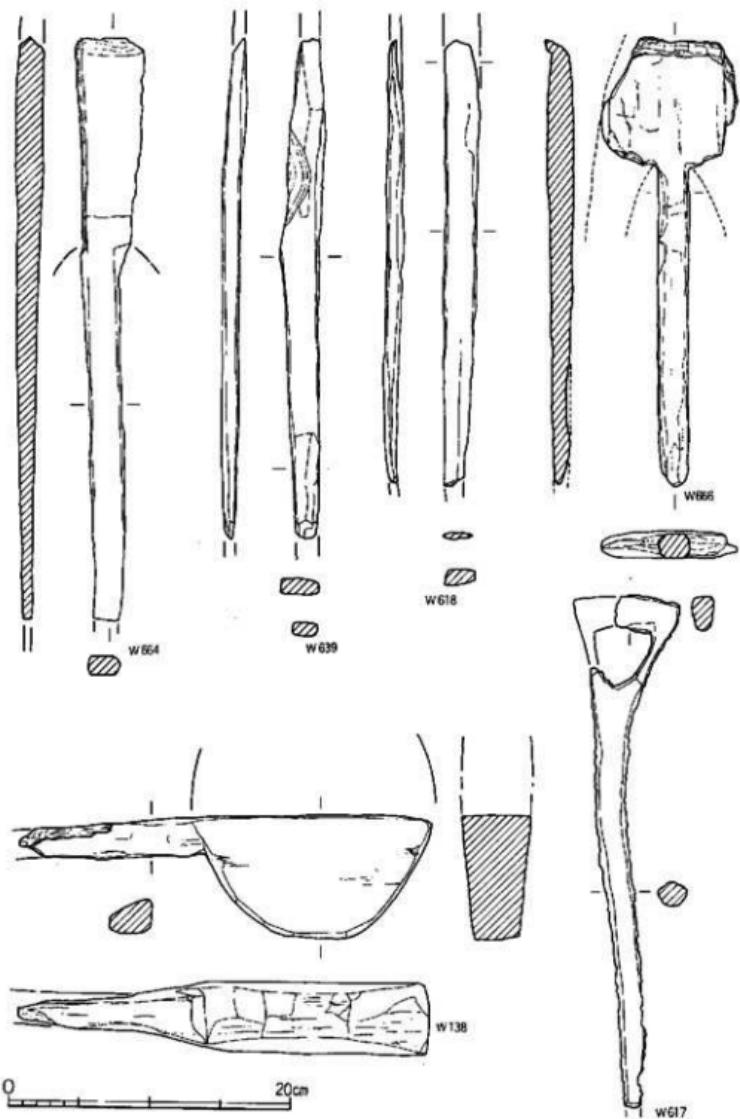
第36图 木连沟剖面W (1/4)

長13.8cm、復元推定幅18.8cmを計る。頭先端部はW159ほど突出していないが、ゆるやかな三角形状を呈すと思われる。側縁刃部はやや幅広で、なだらかに外側に張り出した後、刃先部にむかってやや内湾しながらも直線的に伸びる。刃は断面を五角形に削り出されている。柄孔は推定 6.2×5.6 cmの方形状をなしていたと思われる。穿孔角度（K-1）は49度を計る。W157は頭部のみの出土である。残存長22.1cmを計り頭先端部は鋭く三角形状に突出しているが、器厚は薄く最大厚は1.5cmである。柄孔は方形に穿っているが難存状態が極めて悪いため、詳細は明らかにし難い。

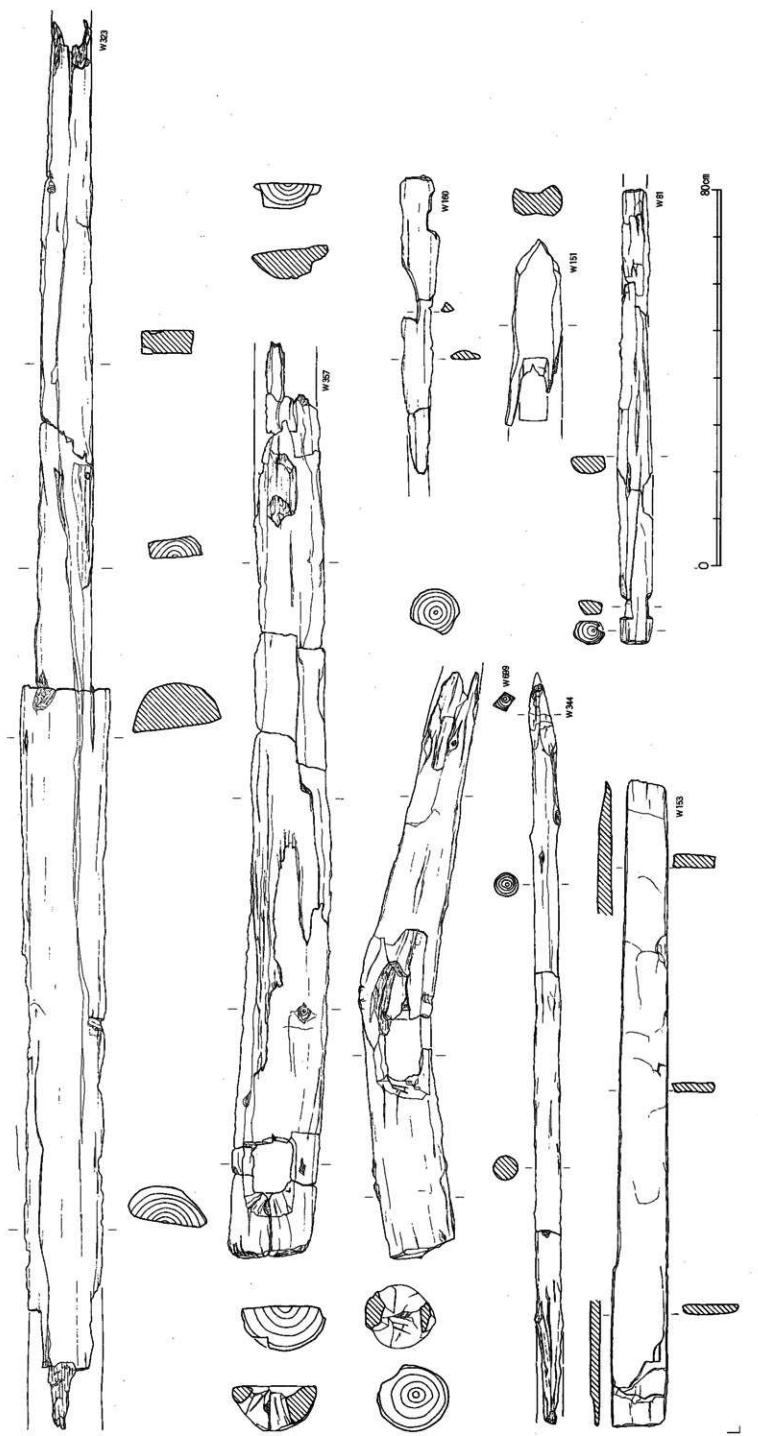
II類にあたるものにはW154・158・667・668がある。W154の残存状況は良好とは言い難い。残存長47.2cm、頭部長26.4cmを計る。中央刃が柄孔部下からすっぽりと抜きとられたように欠失しており、一見二又鐵状を呈す。頭先端部は若干原形を逸するが、本来は明瞭なコの字状に削り出されていたものと考えられる。刃は断面五角形状に加工されており、外側に向かって張り出し、直線的に伸びている。身基部長はやや長めにくり出されており刃部長はやや短くなると思われる。柄孔幅は3.9cm、穿孔角度（K-2）は44度を計る。W158は頭端部が欠失しているが、他の種々の特徴からII類に加えた。残存長44.5cm、基部長10.5cm、復元推定幅19.2cmで、中央刃部を残し半折している。刃部は中央刃が断面六角形、側縁刃が四角形に削り出されており、側縁刃はなだらかに内湾ぎみに外側に張り出しが、I類に比べその張り出し方は頗著である。柄孔は幅3.7cmを計る方形状で、穿孔角度（K-1）は36度である。刃部はさほど長く伸びずに、残存部がほぼ原形を保っていると考えられる。裏面柄孔下に若干の加工痕が観察された。W667・668はともに頭部片で、半折した状態で出土した。W667は残存長30.9cm、基部長7.9cmを計る。刃部は側縁の根幹のみであるが、断面五角形状を呈し、W158と同様外側に張り出す。頭部は平面形が明瞭な団丸のコ字状に成形されており、器厚も厚く1.7cm程度である。柄孔は 5.6×4.8 cm（推定）の方形状を呈し、穿孔角度（K-1）は41度である。器表に焼痕が認められた。W668も同様の残存状態を示すが、刃部は根幹から欠失しており詳細は明確にし難い。残存長37.0cm。柄孔部はW667に比べてやや大きく、身部長もやや長めである。穿孔角度（K-2）は51度を計る。W158・167・668は身部の形態、寸法が近似しており、近接時間内での同一集団による製作の可能性を示唆している。

III類は量的には最も多く出土しており、身基部の柄孔部の形態によって二種に細分される。一方はW155に代表されるように平面形態はI類に近似して細い刃部を有すが、同時に細長い身基部を共有する一群である（III-a）。他方はW537にみられるように、側縁刃が大きく外側に張り出し、身部は短く幅広で大きな方形柄孔を有するものである（III-b）。

III-a類としてはW155の他、W497・567・640があげられる。W155は残存長65.9cm、基部長15.3cm、復元推定幅16.0cmを計る。刃部は断面五角形状に加工されており、根幹部からさほど外へ張り出さず、先端部に向かって直線的に伸びている。刃長は長い。頭先端部はやや尖りぎ



第37図 木器実測図面 (1/4)



附图二 大溪文化II (1/8)

みであるが明顯な後を持つほどではなく、表裏から削りを加えて面を作らずに尖らせてある。柄孔は小さな方形で 4.6×1.9 cm（復元推定）を計り、穿孔角度（K-1）は44度である。基部は長めにつくり出されており、W663に似る。刃部先端付近は磨滅が著しいが、基部表面には若干の加工痕が残存している。刃部は、土圧により身裏側へ湾曲した状態で出土した。W497も当折品であるが、側縁部寄りのみの出土で、また磨滅も著しく柄孔部は確認できなかった。残存長37.5cm、頭部長30.9cmを計る。形態はW155に似るが若干刃部が幅広い。刃部外縁にU字形の小さな抉りを穿っているが、繩縛痕らしき痕跡は観察されなかった。刃部根幹部に若干の加工痕跡を残していた。刃部断面は正五角形を呈す。W567は残存長46.2cm、基部長13.3cm、復元推定幅18.4cmを計る半折品である。土圧によって中心から大きく肩曲しているが、本末はまっすぐに伸びるものであろう。刃部は断面五角形のやや幅広のものであり、他に比べて外側へ張り出しが大きく、刃先部へはやや開きぎみに伸びている。外縁の柄孔部上12.8cmにコの字状の小さな抉りを穿っており、表面に繩縛によるとみられるわずかな凹みがみられる。柄孔部は 4.8×3.6 cm（復元推定）を計り、基部が長い。穿孔角度（K-2）は38度である。基部裏面および側縁に加工痕が残存する。残存状態は良い。W640は腐蝕が著しく残存状態は良くない。残存長48.4cm、頭部長33.4cm、基部長18.4cmを計る。頭部はやや長めに突出しており、基部長が著しく長い。刃部は断面長方形で、外に小さく張り出した後直線的に伸びる。柄孔は長さ4.4cmの小方形を穿っており穿孔角度（K-2）は42度である。

III-a類の加工が丁寧なのに比べIII-b類は加工が粗く不整形であるが、器厚は厚手であるため身部の残存状態はよい。他遺跡の類似例としては四箇遺跡K-1002、拾六町ツイジ遺跡東^{昭31}側調査区出土上大器^{昭44}122があげられるが、いずれも基部長が本遺跡出土例に比べ長く、製作の時間差・地域差を考慮する必要がある。この類に属するのはW537・616である。W537は全長51.2cm、刃部長27.1cm、頭部長24.1cm、幅4.3cm、最大厚2.1cmを計る。外側刃は大きく張り出し内湾ぎみに先端部に向かう。断面は外側が五角形、中央は六角形をなし刃幅は狭い。頭先端部は表裏面から削りを加え面をつくらず鈍く尖らせている。柄孔は 6.9×4.1 cmの長方形で他種に比べてひとまわり大きく、穿孔角度（K-1）は39度である。平面形は右寄りに変形しているが製作当初からの変形であるかは明らかにし難い。保存状態は良いが明顯な加工痕は側面および柄孔部に若干残存するのみである。W616は刃部が全て欠失しているがW537と同様の形態をもつものと考えられる。残存長31.7cm、頭部長27.5cm、基部長11.3cm、頭部幅9.8cm、頭端部に最大厚をもち1.4cmである。保存状態が悪く加工痕等は不鮮明であるが、残存する刃部の状況から外側断面は五角形、中央は六角形であった。柄孔は 5.9×4.5 cmの長方形で穿孔角度（K-1）は28度、（K-2）は41度を計る。平面形はW537とは逆に左側に変形している。

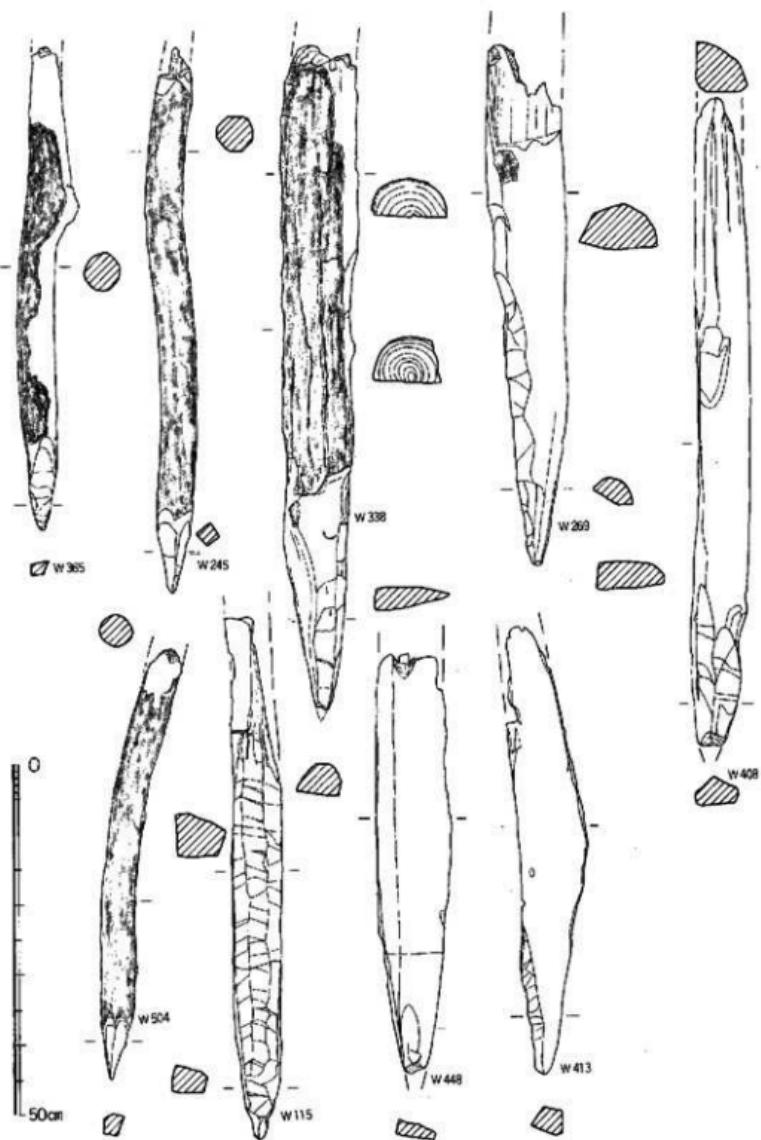
その他の鉤（第37図） 以上の三叉鉤の他に又鉤の刃部と思われる棒状のカシ材、破損後に他の用途に転用されたものが数点出土している。W225は又鉤身部外側縁^片であろう。両端が欠

失しており外形の復元は困難であるが柄孔の隅部が一部残存している。最大厚は1.5cm。W666は三又鉤の一部であろう。器表は磨滅が著しいが中央刃部は本来は断面六角形状を呈していたと考えられる。しかし他の又鉤に比べ刃幅が狭く小形の三又鉤であろう。残存長32.1cm、最大厚1.9cmである。上部には打圧によるさきくれがみられることから、破損後に立杭等に転用されたと考えられる。W156・161・618・639・664は又鉤刃部片である。W156・664は断面六角形、W161・168・639は断面四角形を呈しており、前者は中央刃部、後者は外側刃部片と考えられる。図示しなかったW156・161も同一の類と思われる。

鎌（第35～37図） W146は身部が半折しているが、四又のフォーク状鎌であったと考えられる。残存長71.6cm。身部には明瞭な肩を有し、肩下には大きなV字状の抉りを設けている。残存する刃部は断面長方形に加工されておりやや幅広である。外側刃は外側へ張り出す。又部は中央がコの字状、外側がV字状に削り込まれている。柄部は断面円形を呈し把手部は削り出しの三角形に巡るものであると考えられる。W152はスコップ状の鎌である。身部推定復元幅15.0cm、身部には明瞭な肩を有し、身表裏中央には背を設け補強が加えられているがつくりは薄手である。柄部は加工が粗く太めであり不正橢円形を呈する。把手部は残存しなかった。小形長柄鎌である。W587は身部側縁部のみの出土である。身部長30.8cmを計るスコップ状の鎌である。明瞭な肩部を有しており肩下にゆるやかなV字状の浅い抉りが施されている。身表側の側縁片には断面コの字状の突唇をめぐらせており、刃縁はコの字状を呈する。W617は柄部のみの出土であるが保存状態が悪く原形を保っていない。残存長36.4cm、把手部は削り出しの三角把手があり、幅7.6cm程度である。把手部が小さいことから小形鎌に伴うものと考えられる。W662も柄部のみの出土であるが身部との接合部の一部が残存する。残存長72.8cm、身部は明瞭な肩部を有せず、なだらかに柄部から外側に広がる構造あるいはへら状を呈するものであろう。柄部は2.8×2.2cmの断面楕円形を呈し丁寧に加工されている。先端部は外側から内側に向かって丁寧な面取り加工を施しており把手となる横木をはめ込んだ痕跡は見られなかった。柄部は中央から裏面に向かって若干湾曲し、身部から再び身表側に向かって反る。

用途不明品（第37図） W138は半折品であり一端は欠失している。残存長29.3cm、幅8.8cm、最大厚5.2cmを計る。半円形の身部に柄状の突出部をもち、身部は本来平面円形を呈していたものと思われる。残存状態は悪く表面の腐喰が進んでおり、加工痕は判然としない。杓子の未製品の可能性をもつ。樹種は腐喰が著しいため判定は困難であった。

建築材（第38図） W81は一端を欠失している。現存長96.7cm、幅7.5cm、最大厚5.0cmを計る。半截材の端部に面取り加工を施し先端部下5.7cmに幅4.0cm程のコ字状の抉りを向側縁から抉っている。先端部が最も厚く他端に向かうにつれて厚さは薄くなる。樹種はシイである。W151は先端付近のみの出土である。残存長39.6m、断面は長方形をなし先端部は二側面から削りを加え尖らせている。先端部下28.3cmに幅5.4cmの長方形孔を穿っている。樹種はシイと思われる



第38図 木器実測図 X (1/8)

が腐喰が著しく判然としない。芯持材である。W153は全長137.6、最大幅12.6cm、厚2.6cmの断面長方形に加工された釘目取りの板材である。両端とも先端部に向かって一面のみ削りを加え厚を薄く仕上げており、一端は段を有すほどで柄状をなしている。両端とも他の部材に組み合わせて使用されたものと考える。器表には若干の加工痕が残存していた。樹種はスギである。W160は板目取り板材である。残存長は63.5m。両側縁に各々1ヶ所ずつコ字状とL字状の抉りを設けている。樹種はシイと思われる。杭に転用していた。W323は柵の横木に転用されていた。残存長302.9cm、丸木の半截材を使用しており、一端から長さ153cmにわたって半截後未加工であるが中途より他端に向かって11.5×4.9cmの断面長方形になるように三面から加工を加え、幅、厚さとともにせばめているが裏面は半截時の状況を止め未加工である。両端部はともに腐喰が著しい。保存状態は良くない。樹種はシイである。W357も丸木の半截材を使用している。残存長94.4cm、最大幅18.1cm、厚さ9.6cmを計る。先端部は内縁より中心に向かって面取り加工が施されており、端部下14.2cmに10.8×8.0cmの方形孔を穿っている他に明瞭な加工痕は観察されなかった。W323と同様に杭列の横木に転用されていた。樹種はシイと思われるが腐喰が著しく明確ではない。W699も横木として使用されていた。残存長124.4cm、最大径15.9cmの丸木材の先端部下37.6cmに13.0×7.8cmの方形孔を穿っている。現在はやや弯曲しているが、それは孔部の破損と土圧による変形に起因しており本来の形態ではない。樹種はドングリである。

杭・横木（第38・39図） 本遺構より出土した杭材を丸杭、半截杭、角杭、板杭に大別してその割合を比較すると51：2：31：16の数値を示し、径5～6cmの丸木の一端を加工して杭材に使用しているものが最も多かった。角材についても幅4～6.5cmの範囲におさまるものが大半を占めており、杭製作時に使用に適した大きさにそろえられていたことが推測される。樹種はシイを使用したものが最も多いことが特色である。図示した杭材は、取りあげた杭材のうちから残存状態のよいものを選び出したものである。

W245・344・365・504は丸木杭である。W344を除きいずれも未加工面には樹皮を残している。頭部は欠失しており、先端部の加工は4面～5面にわたり全周をめぐって削り込み尖らせている。樹種はW245・344がクリ、W365はカシ、W504はクヌギである。

W269は半截杭である。未加工面には樹種を残し先端部は一面からの粗い削りのみで仕上げている。樹種はシイ（あるいはクリ）。

W115・408・413は角杭である。割削後表面を丁寧に面取りした例（W115）もあれば、粗削後先端部を二面から尖らせたのみ（W413）というように形態には多様性がみられる。樹種はW115がタブノキ、W408・413はシイである。

W448は杭材である。断面クサビ状に割削した後二面から削りを加え先端を尖らした矢板状を呈す。樹種はシイである。

註1) 山口謙治、松村道博「拾六町ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集、1983

2) 方形枘孔の場合、穿孔角度=着柄角度とは言い難く、ここでは用語をわけて使用した。

3) 柳田純孝「四雪遺跡」『第14回埋蔵文化財研究会資料』、1983

No.	出土状況	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	図版
81	古河川1区	流木	建築材	108.0	8.0	シイ		
82			板材	49.0	12.0	サカキ		
83			自然木	—	—	ムクノキ		
84			自然木(枝)	—	—	トネリコ類		
85			自然木(枝)	—	—	タブノキ		
86			角杭	40.0	7.0	クリ		
87			自然木	—	—	クリ		
88			板材	28.0	6.0	クリ		
89	古河川2区		自然木	—	—	散孔材		
90			自然木	—	—	クヌギ		
91			角杭	56.5	5.5	クリ		
92			自然木	—	—	カシ		
93	古河川3区 SX.24番地付近	杭	板杭	38.0	5.5	—		
94			板杭	42.0	6.0	シイ		
95			角杭	54.0	5.0	シイ		
96			角杭	70.0	8.0	シイ		
97			角杭	63.0	6.0	シイ		
98			丸杭	22.0	3.5	—	先端部付近のみ	
99			丸杭	21.0	2.5	—	タ	
100			丸杭	13.0	2.5	シイ	タ	
101			丸杭	26.0	2.5	サカキ?	タ	
102			丸杭	37.0	3.0	サカキ?		
103			角杭	25.0	3.5	トネリコ類	先端部付近のみ	
104			丸杭	28.0	3.5	シイ		
105			丸杭	9.0	3.0	シイ	先端部付近のみ	
106			丸杭	50.0	3.5	ユズリハ?		
107			丸杭	51.0	2.5	ユズリハ		
108			半截杭	60.0	9.5	シイ		
109			角杭	32.0	5.5	散孔材		
110			角杭	45.0	3.5	シイ		
111			丸杭	58.0	3.5	シイ		
112			角杭	67.0	5.5	クリ?		
113			角杭	80.0	6.0	タブノキ		
114			丸杭	39.0	4.0	サカキ		
115	古河川3区 SX.24番地付近		角杭	79.0	8.0	タブノキ		
116			丸杭	28.0	2.5	ユズリハ		
117			丸杭	34.0	4.5	ユズリハ		
118			丸杭	17.0	3.0	シイ		
119			角杭	27.0	3.5	—		
120	古河川4区		丸杭	12.0	3.5	シロダモ	先端部付近のみ	
121			丸杭	7.0	2.0	シャンシンボ	タ	
122			丸杭	16.0	1.5	アワブキ	タ	
123			角杭	16.5	3.5	シイ		
124		流木	自然木(丸木)	70.0	7.5	(散孔材)		
125			丸杭	77.0	4.5	コナラ		
126			自然木(丸太)	350.0	30.0	クリ		
127			角杭	120.0	5.5	クリ?		
128			丸杭	73.0	5.5	イヌノキ		
129			板杭	80.0	5.5	シイ		
130			自然木(丸木)	73.0	2.5	サカキ		
131			角杭	85.0	4.5	クリ		
132			角杭	47.0	4.0	シイ?		
133			自然木(丸木)	113.0	5.5	タブノキ		
134			自然木(丸木)	63.0	4.0	シイ		

第6表 第2地点出土木製品観察表 I

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	播磨 国版
135	古河川4区	流木	自然木(丸木)	118.0	5.5	ヤナギ類		
136	・	・	自然木(丸木)	93.0	4.0	ヤナギ類		
137	・	・	自然木(丸木)	81.0	3.0	ヤナギ類		
138	・	・	木製品			(不明)		
139	古河川4区 SX15(西側壁面)	杭	角杭	10.5	3.0	シ	イ	先端部付近のみ
140	・	・	角杭	20.0	6.5	シ	イ	
141	・	・	角杭?	22.0	5.0	シ	イ	先端部付近のみ
142	・	・	角杭?	13.0	3.5	シ	イ	
143	・	・	角杭	11.0	4.5	シ	イ?	
144	古河川4区	流木	建築材?			—		
145	・	・	丸杭					
146	・	・	又動					
147	古河川4区 SX15(右端)	杭	板杭	62.0	6.0	カ	シ	
148	・	・	角杭	59.0	6.0	カ	イ	
149	・	・	丸杭	61.0	5.0	シ	ラ	
150	・	・	板杭	41.0	6.5	サ	ナ	
151	古河川5区 SX17(南端)	流木	建築材→杭			コ	シ	建築材を杭に転用
152	・	・	半動			カ	イ	
153	・	・	板材			カ	シ	
154	古河川5区 SX16(東側壁面)	・	又歛			カ	シ	
155	・	・	又歛			カ	シ	
156	・	・	又歛先			カ	シ	
157	・	・	又歛?			カ	シ	
158	・	・	又歛			カ	シ	
159	古河川5区 SX17(南端)	流木	三又歛			カ	シ	
160	・	・	建築材			カ	シ	
161	・	・	又歛先			カ	シ	
162	古河川5区 SX16(水槽底裏面)	自然木		83.0	5.0	タ	リ	
163	・	・	自然木(繩の芯)			(樹皮)	シリ	
164	・	・	杭	30.0	5.0	ク	リ	
165	・	・	板材	55.0	6.0	シ	イ	
166	・	・	丸杭	70.0	5.0	ユズリハ?		
167	・	・	自然木(丸木)	70.0	4.0	タブノキ	イ	
168	古河川5区 SX17(中央)	・	角杭	55.0	5.0	シ	ズリハ	
169	・	・	自然木(丸木)	54.0	3.5	スズリハ		
170	・	・	自然木(丸木)	44.0	3.0	カ	シ	
171	・	・	杭	31.5	4.5	カ	シ	
172	・	・	角杭	33.5	6.0	シ	イ	
173	・	・	角板杭	27.0	6.0	シ	イ	
174	・	・	板杭	20.0	5.0	(不明)		
175	・	・	丸杭	25.0	3.0	シ	イ	
176	・	・	板角杭	20.0	9.0	(不明) 取縮材		
177	・	・	板角板材	38.0	6.5	シ	イ	
178	・	・	流木	8.0	4.5	シ	イ	
179	・	・	板角板材	19.0	6.0	シ	イ	
180	・	・	杭	34.0	5.0	カキノキ		
181	古河川5区 SX16(水槽底裏面)	流木	角丸杭	50.0	7.0	シ	イ	
182	・	・	角丸杭	120.0	5.0	ユズリハ?		
183	・	・	角杭	72.0	3.0	ク	リ	
184	・	・	丸杭	68.0	5.0	ユズリハ		
185	・	・	角杭	53.0	7.0	シ	イ	
186	・	・	自然木(丸木)	58.0	3.0	ヤナギ		
187	・	・	自然木(丸木)	27.5	3.0	ヤナギ		
188	・	・	板杭	23.0	5.0	シ	イ	

第7表 第2地点出土木製品観察表II

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	挿図	図版
189	吉河川5区 SX2? (半埋)	流木?	自然木(丸木)	40.5	6.0	ヤブツバキ			
190		タ	丸 材	38.0	7.0	ク リ			
191	吉河川5区 SX3(水槽底面)	タ	丸材?	26.5	6.5	ユズリハ?			
192	吉河川5区 SX17(半埋)	杭	板 材	26.0	4.5	シ イ			
193	タ	タ	角 材	37.0	7.5	カ シ			
194	タ	タ	板 材	26.0	5.5	—			
195	タ	タ	角 材	24.0	4.5	シ シ			
196	タ	タ	板 材	33.0	6.0	カ シ			
197	タ	タ	角 材	39.0	7.5	シ シ			
198	タ	タ	丸材?	49.0	4.5	シ シ			
199	タ	タ	半截材	13.0	4.0	シ シ			
200	タ	杭	角 材	54.0	6.5	シャシャンボ			
201	タ	タ	板 材	51.0	3.5	シ イ			
202	タ	タ	板 材	31.0	4.5	シ イ			
203	タ	タ	角 材	30.0	4.0	シ イ			
204	タ	タ	角 材	21.0	8.0	タ リ			
205	タ	タ	角 材	26.0	4.5	シ イ			
206	タ	タ	角 材?	13.5	2.0	シ イ			
207	タ	流 木	角 材	30.0	4.0	ク カ			
208	タ	流 木	丸 材	43.0	6.5	サ キ			
209	タ	流 木	板 材	51.5	4.0	タ ク			
210	タ	流 木	杭 丸	24.5	4.0	ナ ギ			
211	タ	流 木	自然木(木本)	33.0	6.5	シロダモ?			
212	タ	流 木	自然木(木本)	26.5	11.0	カ シ			
213	タ	杭	板 材	43.5	5.0	シ カ			
214	タ	流 木	角 材	46.5	5.5	シ シ			
215	タ	流 木	半截杭	37.0	3.5	カ シ			
216	タ	杭	丸 材	77.0	4.5	カ シ			
217	タ	横木?	杭	10.5	4.5	カ シ			
218	タ	杭	?	39.5	5.5	セシャンボ			
219	タ	杭	丸 材	45.5	6.0	カ シ			
220	タ	杭	丸 材	49.0	4.5	カ シ			
221	タ	杭	板 材	29.0	4.5	シ シ			
222	タ	杭	角 材	67.0	7.5	イ			
223	タ	杭	丸 材	41.0	4.5	カ シ			
224	タ	横木?	又歛先	自然木(枝)	20.0	2.0	ユズリハ?		
225	タ	流 木	自然木(木本)	?	4.5	タ ブ			
226	タ	流 木	自然木(木本)	47.0	4.5	ヒサカキ			
227	タ	横木?	杭	46.5	8.5	ガマズミ			
228	タ	流 木	板 材	60.0	10.0	(不明) 収縮材			
229	タ	横木?	杭	28.0	5.5	シ イ			
230	タ	流 木	板 材	19.0	2.5	カ シ			
231	タ	流 木	板 材	60.0	9.0	シ (又はカシ)			
232	タ	流 木	角 材	51.0	5.0	ヤブツバキ			
233	タ	杭	丸 材	41.0	3.5	ユズリハ?			
234	タ	杭	丸 材	75.0	6.5	カ シ			
235	タ	杭	丸 材	99.5	4.0	ヒサカキ			
236	タ	杭	丸 材	33.0	3.5	シ イ			
237	タ	杭	丸 材	68.0	4.5	カ シ			
238	タ	杭	丸 材	101.0	5.0	モチノキ類			
239	タ	杭	丸 材	96.0	4.0	シ イ			

第8表 第2地点出土木製品観察表

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	挿図	図版
243	吉澤川5区 SX17(井戸)		杭	丸	杭	100.0	3.5	ク	リ
244				角	杭	55.0	7.0	シ	イ
245	*			丸	杭	76.5	6.0	ク	リ
246	*			丸	杭	101.0	4.0	ク	リ
247	*			丸	杭	35.5	4.5	—	—
248	*			丸	杭	33.0	6.5	—	—
249	*			丸	杭	95.0	7.5	カ	シ
250	*			丸	杭	42.5	5.5	シ	イ
251	*			丸	杭	95.0	8.5	カ	シ
252	*			丸	杭	53.0	6.0	カ	シ
253	*		流木	半截材		41.5	3.0	シ	イ
254	*			丸	杭	74.5	4.5	イ	イ
255	*			丸	杭	68.0	7.0	イ	イ
256	*			丸	杭	86.5	5.5	イ	イ
257	*			丸	杭	55.0	6.0	イ	イ
258	*			丸	杭	75.0	3.5	シ	シ
259	*			丸	杭	49.5	6.0	シ	シ
260	*			丸	杭	72.5	6.0	シ	シ
261	*			丸	杭	58.0	8.5	カ	シ
262	*			丸	杭	41.0	4.5	カ	シ
263	*			丸	杭	43.5	5.5	ズ	リ
264	*			丸	杭	73.5	6.5	ハ	?
265	*			丸	杭	43.0	5.5	イ	イ
266	*			丸	杭	51.5	5.5	キ	?
267	*			丸	杭	62.0	6.0	バ	キ
268	*		流木	自然木(丸木)		33.0	10.0	バ	キ
269	*			半截杭		76.0	11.0	シ	(又はクリ)
270	*			丸	杭	83.0	4.5	ク	リ
271	*			角	杭	62.0	7.0	ク	リ
272	吉澤川5区 SX17(井戸)		流木	自然木(枝)		130.0	3.0	ズ	リ
273				自然木(枝)		120.0	1.2	ハ	?
274				自然木(枝)		90.0	2.0	カ	?
275				自然木(枝)		86.0	1.5	カ	?
276				自然木(枝)		90.0	2.5	カ	?
277	吉澤川5区 SX17(井戸)		杭	丸	杭	34.0	4.0	カ	?
278	*			丸	杭	35.0	3.5	シ	?
279	*		横木	自然木(枝)		?	1.5	ズ	リ
280	*			自然木(枝)		?	1.5	ハ	?
281	*			自然木(枝)		105.0	2.5	カ	?
282	*			角	杭	86.5	8.5	カ	?
283	*			丸	杭	54.5	3.5	カ	?
284	*			丸	杭	87.0	5.5	ズ	リ
285	*			丸	杭	65.0	5.0	ハ	?
286	*			丸	杭	87.5	4.5	シ	?
287	*			角	杭	83.0	5.5	シ	?
288	*			角	杭	43.0	4.5	カ	?
289	*			丸	杭	37.0	4.5	カ	?
290	*			丸	杭	80.0	8.0	ブ	?
291	*			角	杭	89.0	4.5	ブ	?
292	*			角	杭	53.0	5.5	ノ	?
293	*		横木	自然木(丸木)		25.0	2.5	ナ	?
294	*			丸	杭	74.0	7.5	ブ	?
295	*		流木	角	杭	90.0	5.5	ノ	?
296	*			角	杭	38.5	5.5	ク	?

第9表 第2地点出土木製品観察表IV

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	捲	図版
297	吉河川5区 SK17(井場)	流木	板材	18.5	4.5	クスギ			
298	*	*	角材	12.0	7.0	カシ			
299	*	杭	丸杭	88.0	5.0	シイ			
300	*	流木	自然木(枝)	75.0	2.0	ユズリハ?			
301	*	杭	角材	60.0	7.0	シイ			
302	*	杭	角材	80.0	7.5	シイ			
303	*	*	角材	102.0	6.5	シイ			
304	*	*	角材	24.0	4.0	シイ			
305	*	*	角材	?	3.0	ヒサカキ?			
306	*	*	角材	109.0	5.0	シイ			
307	*	*	角材	88.0	5.0	シイ			
308	*	*	角材	122.0	5.5	シイ			
309	*	*	角材	155.5	6.5	シイ			
310	*	*	角材	59.0	4.5	シイ			
311	*	*	角材	84.0	7.5	シイ			
312	*	*	角材	123.0	6.0	シイ			
313	*	*	角材	83.5	6.5	シイ			
314	*	*	角材	166.0	4.5	シイ			
315	*	*	角材	161.0	4.5	(散孔材)			
316	*	横木	自然木(丸木)	48.0	2.5	(不明)散孔材			
317	*	横木	半截材	21.0	3.0	(針葉樹)			
318	*	横木	自然木(枝)	83.0	2.0	ユズリハ?			
319	*	横木	角材	38.0	7.5	シイ			
320	*	横木	丸杭	37.0	6.5	シイ			
321	*	横木	丸杭	48.0	10.0	シイ?			
322	*	横木	板杭	37.0	6.0	シイ			
323	*	横木	建築材	315.0		シイ			
324	*	横木	丸杭	58.0	5.5	シイ			
325	*	横木?	自然木(丸木)	36.0	4.5	(?)			
326	*	横木	丸杭	111.0	6.5	シイ			
327	*	横木	角材	65.0	6.5	シイ			
328	*	横木	自然木(枝)	43.5	3.5	サカキ?			
329							欠番		
330	吉河川5区 SK17(井場)	流木	角材	60.0	6.5	クリ			
331	*	杭	角材	100.0	6.5	シイ			
332	*	杭	角材	63.0	7.5	シイ			
333	*	杭	角材	91.5	6.0	シイ			
334	*	杭	角材	91.0	6.5	シイ			
335	*	杭	角材	106.0	10.0	シイ			
336	*	杭	角材	115.0	5.5	タリ			
337	*	杭	半截杭	75.0	3.5	タリ			
338	*	杭	半截杭	93.5	10.5	—			
339	*	杭	板杭	?	10.0	—			
340	*	杭	板杭	82.0	11.5	タカ			
341	*	杭	丸杭	54.0	5.0	—			
342	*	横木	自然木(枝)	48.0	2.0	—			
343	*	杭	丸杭	?	2.5	シタリ			
344	*	杭	丸杭	160.0	4.5	シタリ			
345	*	杭	角材	?	4.5	シタリ			
346	*	杭	角材	63.0	7.5	シタリ			
347	*	杭	角材	52.5	5.0	シタリ			
348	*	杭	角材	109.0	7.0	シタリ			
349	*	杭	角材	113.0	5.5	シタリ			
350	*	杭	角材	70.5	4.0	シタリ			

第10表 第2地点出土木製品観察表V

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	図版
351	吉澤川5区 5x27(井戸)		杭	角杭	70.0	9.0	シク	イ
352			杭	角杭	79.0	6.0	リ	?
353			木	自然木(丸木)	27.0	8.5	カシ	?
354			杭	角杭	113.0	8.0	シタブノ	イ
355			杭	丸杭	53.5	3.5	シタブノ	イ
356			杭	丸杭	98.0	8.0	シタブノ	イ
357			木	建築材	210.0	19.5	ク	?
358			杭	半截材	59.0	7.0	タク	?
359			杭	丸杭	39.0	2.5	カシ	?
360			杭	角杭	45.0	8.0	サカシ	?
361			杭	丸角杭	23.0	4.5	サカシ	?
362			杭	角杭	33.0	4.5	サカシ	?
363			木	自然木(合板)	—	—	サカシ	?
364			杭	杭	83.0	4.0	カシ	?
365			杭	杭	74.0	4.5	カシ	?
366			杭	杭	60.0	3.0	カシ	?
367			杭	杭	56.0	7.0	カシ	?
368			杭	角丸杭	70.0	4.5	シ	?
369			杭	丸角杭	68.5	4.5	シ	?
370			杭	杭	63.0	6.5	シ	?
371			杭	杭	74.0	7.5	クリ(又はシイ)	
372			木?	杭	71.0	5.0	クリ(又はシイ)	
373			木?	杭	60.0	3.5	サカシ	
374			木?	杭	58.0	4.5	カシ	
375			木?	杭	104.0	4.0	シ	
376			木?	杭	39.0	4.0	シ	
377			木?	杭	31.0	3.5	シ	
378			木?	杭	18.0	5.5	アワブキ	先端部付近のみ
379			木?	杭	95.0	5.0	カ	
380			木?	杭	124.0	3.5	ヤマグワ	
381			木?	杭	77.0	5.0	サクラ類?	
382			木?	杭	56.0	5.5	アワブキ?	
383			木?	杭	32.5	5.0	カ	
384			木?	杭	97.0	4.5	カ	
385			木?	杭	53.0	5.5	ク	
386			木?	杭	46.0	5.0	シ	
387			木?	杭	20.0	6.5	シ	
388			木?	杭	37.0	4.0	(不明)軟弱材	
389			木?	杭	45.0	3.5	セカキ?	
390			木?	杭	43.0	10.5	シ	
391			木?	杭	22.0	2.5	アワブキ	
392			木?	杭	52.0	5.0	サカキ?	
393			木?	杭	24.0	4.0	シ	
394			木?	杭	56.0	4.0	シ	
395			木?	杭	55.0	6.5	(不明)收縮材	
396			木?	杭	107.5	5.0	クリ(又はシイ)	
397			木?	杭	95.0	5.0	—	
398			木?	杭	59.0	7.0	シ	
399			木?	杭	15.0	5.0	イ	
400			木?	杭	23.0	6.0	シ	
401			木?	杭	122.0	4.0	イヌビワ	
402			木?	杭	55.0	5.0	シ	
403			木?	杭	103.0	4.5	イ	
404			木?	杭	33.0	2.5	シ	

第II表 第2地点出土木製品観察表VI

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	挿図 図版
405	吉河川5区 SX17(井戸)		杭	丸杭	57.0	7.5	シイ	
406		*		丸杭	68.0	6.0	(シイ)	
407	*	*		丸杭	73.5	5.5	シイ	
408	*	*		角杭	94.0	7.0	シイ	
409	*	*		角杭	40.0	7.0	クシリ	
410	*	*		丸角丸杭	59.0	4.0	シイ	
411	*	*		丸角丸杭	45.0	6.5	シイ	
412	*	*		丸角杭	62.0	8.0	シイ?	
413	*	*		板角杭	67.0	9.0	シイ?	
414	*	*		板角杭	30.0	5.0	シカシ?	
415	*	*		板角杭	67.5	8.0	シカシ?	
416	*	*		板角杭	20.0	5.0	—	
417	*	*		板角杭	44.0	5.0	シイ	
418	*	*		板角杭	90.0	6.0	シイ(又はクリ)	
419	*	*		板角杭	24.0	9.0	シイ	
420	*	*		丸杭	36.0	4.5	ヒサカギ?	
421	*	*		丸杭	41.5	2.5	カシ	
422	*	*		丸杭	116.0	5.0	アワブキ	
423	*	流木	自然木(枝?)	自然木	70.0	2.0	カシ	
424	*	*	自然木	自然木	18.0	5.0	モミ	
425	*	*	横木?	板材?	49.0	10.0	シイ	
426	*	*		角杭	57.0	7.5	シイ	
427	*	流木	丸杭	丸杭	30.0	6.0	シイ	
428	*	*	丸杭	丸杭	38.0	8.0	シイ	
429	*	*	速葉材?	速葉材?	56.0	15.0	—	
430	*	*	杭	角杭	30.0	5.0	シイ	
431	*	*		角杭	26.0	7.0	シイ	
432	*	*		角杭	23.0	5.0	シイ	
433	*	*		角杭	91.0	7.0	シイ	
434	吉河川5区 SX17(井戸)	*		角杭	96.0	6.5	シイ	
435	吉河川5区 SX17(井戸)	*		角杭	50.0	5.0	シイ	
436	吉河川5区 SX17(井戸)	流木	角杭	角杭	65.0	5.0	シイ	
437	*	*		角杭	83.0	5.0	シイ	
438	*	*		角杭	52.0	5.0	シイ	
439	*	*		角杭	84.5	7.0	シイ	
440	*	*	杭	角杭	47.5	5.0	シイ	
441	*	*		角杭	39.5	4.5	シカキ	
442	*	流木		角杭	27.0	4.0	シカキ	
443	*	*		角杭	105.0	7.0	シカキ	
444	*	*		角杭	65.0	6.5	シカキ	
445	*	*		角杭	64.5	5.0	シカキ	
446	*	*		角杭	40.0	7.0	シカキ	
447	*	*		角杭	41.0	11.0	シカキ	
448	*	流木		角杭	60.0	11.0	シカキ	
449	*	*		角杭	61.0	8.5	シカキ	
450	*	*		角杭	65.0	6.0	シカキ	
451	*	*		板材?	23.0	4.0	(不明)炭化	
452	*	*		杭	60.0	6.0	シカキ	
453	*	*	流木	角杭	76.5	6.0	シカキ	
454	*	*		角杭	58.0	7.0	シカキ	
455	*	*		角杭	50.0	7.5	シカキ	
456	*	流木		角杭	66.5	6.5	シカキ	
457	*	*		角杭	51.0	6.5	シカキ	
458	*	*		角杭	48.0	6.5	クリ(又はシイ)	

第12表 第2地点出土土木製品観察表VII

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	掃図	図版
459	吉河川 5 区 SX17.5m 頂	流 木	板 杭	64.0	4.5	シ イ			
460			角 杭?	52.0	10.0	ヤブツバキ			
461	吉河川 5 区 SX17.5m 頂	*	杭	42.0	5.5	シ シ			
462	*	*	丸 丸	21.0	3.5	シ シ			
463	*	*	丸 丸	49.0	4.5	シ シ			
464	*	*	丸 丸	19.0	4.0	ヒサカキ			
465	*	*	板 材	17.0	6.5	シ シ			
466	*	*	丸 丸	5.0	2.5	シ シ			
467	吉河川 5 区 SX17.5m 頂	流 木	板 材	51.0	5.0	シ シ			
468	*	*	角 材	69.0	8.0	シ シ			
469	*	*	丸 丸	10.0	4.5	(樹 皮)			
470	*	*	板 材	?	5.0	(不明) 収縮材			
471	*	*	流 木	68.0	7.0	シ (又はクリ)			
472	*	*	自然木(枝)	115.0	2.5	ユズリハ?			
473	*	*	板 材	49.0	7.0	シ シ			
474	*	*	板 材	70.0	6.0	シ シ			
475	*	*	半截材	77.5	5.5	シ シ			
476	*	*	板 材	24.0	6.0	シ シ			
477	*	*	板 材	95.0	7.5	シ シ			
478	*	*	板 材	88.0	4.5	アワブキ			
479	*	*	丸 丸	80.0	3.5	シ シ			
480	*	*	板 材	22.0	3.0	マシナ			
481	*	*	板 材?	27.0	3.4	シ シ			
482	*	*	板 材?	74.0	5.0	シ シ			
483	*	*	板 材?	72.0	9.5	サカカ			
484	*	*	自然木(枝)	56.0	2.5	シ シ			
485	*	*	丸 丸	63.0	4.0	シ シ			
486	*	*	板 材	28.0	6.5	シ シ			
487	*	*	板 材?	39.0	2.5	シ シ			
488	*	*	板 材?	42.0	3.0	シ シ			
489	*	*	角 材	23.0	4.5	タブノキ			
490	*	*	角 材	21.0	3.5	タクシ			
491	*	*	板 材	28.0	4.5	シ シ			
492	*	*	角 材?	?	3.5	(樹 皮)			
493	*	*	板 材	72.0	5.0	サカカ			
494	*	*	半截杭	75.0	8.0	シ シ			
495	*	*	板 材?	53.0	6.0	タブノキ			
496	*	*	板 材	108.5	22.0	タブノキ			
497	*	*	又 眼 材	76.5	6.0	シ シ			
498	*	*	自然木(丸太)	172.0	13.0	シ シ			
500	*	*	板 材	57.0	5.0	シ シ			
501	吉河川 5 区 SX17.5m 頂	杭	板 材	32.5	8.0	ユズリハ?			
502	*	*	板 材	53.0	4.5	ユズリハ?			
503	吉河川 5 区 SX18.5m 頂	*	丸 丸	49.5	8.0	ユズリハ?			
504	*	*	丸 丸	64.5	5.0	クスギ			
505	*	*	丸 丸	24.0	2.5	シ カ			
506	*	*	丸 丸	63.0	4.0	シ カ			
507	*	*	丸 丸	69.0	6.0	ユズリハ?			
508	*	*	丸 丸	62.0	4.5	シ カ			
509	*	*	丸 丸	55.0	5.0	ユズリハ			
510	*	*	丸 丸	50.5	4.0	マシナ			
511	*	*	丸 丸	28.5	4.0	サカカ			
512	*	*	丸 丸	39.0	4.0	ユズリハ?			

第13表 第2地点出土木製品観察表

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	図版
513	吉河川(井戸)		杭	丸	杭	15.5	2.5	カエデ類
514			杭	丸	杭	34.5	4.0	クヌギ
515			横木	丸	杭	95.0	5.0	クリ
516			杭	丸	杭	44.0	3.5	散孔材
517			杭	丸	杭	34.0	5.5	カシ
518			杭	丸	杭	41.0	5.0	ユズリハ?
519			杭	丸	杭	55.0	6.5	ユズリハ?
520			杭	丸	杭	29.0	3.5	カシ
521			杭	丸	杭	41.5	4.0	(不明) 収油材
522			杭	丸	杭	42.5	3.5	シイ
523			杭	丸	杭	27.5	5.0	カシ
524			杭	丸	杭	35.0	4.0	アカメガシワ?
525			杭	丸	杭	45.0	2.5	散孔材
526			杭	丸	杭	96.0	6.0	クリ
527			杭	丸	杭	45.0	6.0	シイ
528			杭	丸	杭	40.5	4.0	カシ
529			杭	丸	杭	30.0	4.0	シイ
530			杭	丸	杭	77.0	3.0	ユズリハ?
531			杭	丸	杭	36.0	5.0	シイ
532			杭	丸	杭	18.0	3.0	イイ
533			杭	丸	杭	37.0	3.5	シリ
534			杭	丸	杭	52.0	5.0	リ
535			杭	丸	杭	53.5	5.0	カシ
536			杭	丸	杭	56.0	4.0	シイ
537			流木	三又	叢	47.0	7.0	カシ
538			杭	丸	杭	32.0	3.0	サカキ?
539			杭	丸	杭	35.0	3.5	シカク
540			杭	丸	杭	44.0	2.5	イイ
541			杭	丸	杭	65.5	4.0	シノキ
542			杭	丸	杭	52.0	11.0	クスノキ
543			杭	丸	杭	54.0	6.0	カシ
544			杭	丸	杭	28.0	6.5	キ?
545			杭	丸	杭	28.0	4.5	イイ
546			杭	丸	杭	13.5	3.0	シリ
547			杭	丸	杭	28.0	5.0	カシ
548			杭	丸	杭	44.0	3.5	カシ
549			杭	丸	杭	52.5	5.5	カキ類
550			杭	丸	杭	35.0	4.0	モチノキ
551			杭	丸	杭	31.0	3.0	散孔材
552			木	自然木	板	50.5	2.0	ユズリハ
553			木	木	杭	58.0	4.5	ク
554			木	木	杭	?	4.5	タブノキ?
555			木	木	杭	?	?	タブツバキ?
556			木	木	杭	20.0	1.5	シ
557			木	木	杭	41.0	4.0	散孔材
558			木	木	杭	61.0	4.0	シ
559			木	木	杭	56.0	5.0	アリブキ
560			木	木	杭	57.0	4.0	カシ
561			木	木	杭	52.0	5.0	シリ
562			木	木	杭	55.0	10.0	タケ
563			木	木	杭	68.0	5.0	イイ
564			木	木	杭	26.5	3.5	クヌギ
565			木	木	杭	56.0	6.0	ユズリハ

第14表 第2地点出土木製品観察表IX

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	切種	備考	排図	図版
567	古河川 5 区 SKX17 (P-40)	流木	又丸角 杭	83.0	6.0	カシ		35	30
568	*		丸	69.5	5.0	ヒサカキ?			
569	*		丸	38.5	4.0	イ			
570	*		丸	75.5	7.5	シカキ			
571	*		丸	64.0	4.0	リ			
572	*		丸	44.0	5.5	タブノキ?			
573	*		丸	100.0	5.0	カシ			
574	*		丸	92.5	3.5	カカキ?			
575	*		丸	80.0	7.5	シカキ?			
576	*		丸	30.0	3.5	ユズリハ			
577	*		丸	?	?	リ			
578	*		丸	39.0	5.5	ヤブツバキ			
579	*		丸	55.5	3.5	材			
580	*		丸	129.0	5.5	シイ?			
581	*		丸	90.0	8.0	シイ?			
582	*		丸	22.0	3.5	シカキ?			
583	*		丸	70.0	4.5	カシ?			
584	*		丸	83.0	5.0	カシ?			
585	*		丸	74.0	4.0	カシ?			
586	*		木						
587	*		木						
588	*		杭	76.0	5.5				
589	*		杭	88.0	5.5				
590	*		杭	77.0	3.5				
591	*		杭	73.0	4.0				
592	*		杭	98.0	4.0				
593	*		杭	40.0	6.0	ユズリハ?			
594	*		杭	50.0	6.5	シ			
595	*		杭	45.5	6.5	アブキ?			
596	*		杭	64.5	4.5	タブノキ?			
597	*		杭	17.0	4.5	エゴノキ?			
598	*		杭	62.0	4.0	タブノキ?			
599	*		杭	62.0	5.0	シ			
600	*		杭	90.0	3.0	ユズリハ?			
601	*		杭	64.0	7.5	シ			
602	*		杭	45.0	4.5	シ			
603	*		杭	51.0	6.0	ユズリハ?			
604	*		杭	40.0	5.0	シ			
605	*		杭	?	4.5	ノリウツギ?			
606	*		杭	68.0	3.5	シ			
607	*		杭	45.0	5.5	シ			
608	*		杭	69.0	3.5	シ			
609	*		杭	38.0	6.5	シ			
610	*		杭	34.5	3.0	シ			
611	*		杭	42.0	4.5	シ			
612	*		杭	38.0	5.0	シ			
613	古河川 5 区 SKX17 (P-40)	横流木	板角	80.0	5.0	ク		34	29
614	古河川 5 区 SKX17 (P-40)		角	85.0	9.0	カカク?		37	30
615	*		又	51.0	5.0	カカク?		37	30
616	*		三						
617	*		筋						
618	*		又						
619	*		筋	99.0	11.0				
620	*		板	82.0	8.5				
			角						

第 15 表 第 2 地点出土木製品観察表 X

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	排図	図版
621	古河川5区 SX27 (南面)	流木	丸杭	61.0	6.0	シイ?			
622	+	+	角杭	64.0	6.0	クリ?			
623	+	+	角杭	93.0	7.0	クリ?			
624	+	杭	丸杭?	20.5	4.0	シイ?			
625	+	流木	丸杭	50.0	4.0	シイ?			
626	+	+	丸杭?	28.0	5.0	シイ?			
627	+	+	板杭	58.0	7.5	シイ?	焼け		
628	+	+	板杭	85.0	6.0	クリ			
629	+	+	丸杭	32.0	6.0	ノリウツギ			
630	+	+	建蔽材?			ヤブツバキ	丸木半截		
631	+	+	板杭	71.0	5.0	シイ			
632	+	+	丸杭	73.0	5.0	ユズリハ?			
633	+	+	丸杭	122.0	5.5	シイ			
634	+	+	丸杭	100.0	4.0	カシ			
635	+	+	板杭	60.0	7.0	シイ			
636	+	+	丸杭	51.0	5.0	シイ			
637	+	杭	丸杭	54.0	6.0	シサカキ?			
638	+	流木	丸杭	73.5	4.5	ヒサカキ?			
639	+	+	又銀先端材?			カシ		37	
640	+	+	又銀先端材?			シ		35	30
641	+	+	板材	118.0	10.0	シヤンバン			
642	+	+	丸杭	107.0	2.5	ヤシヤンバン			
643	+	杭	角杭	78.0	5.0	リ			
644	+	杭	角杭	?	?	シカ			
645	+	杭	角杭	?	?	シ			
646	+	杭	角杭?	?	?	ヤブツバキ	先端部付近のみ		
647	+	杭	角杭?	?	?	イ			
648	古河川5区 SX27 (北面)	+	角杭	?	?	シイ			
649	古河川5区 SX25 (西面)	+	角杭	67.0	5.0	シイ			
650	+	+	角杭	68.0	6.5	シイ			
651	+	+	板杭	73.0	6.5	シイ?			
652	+	+	半截杭	75.0	6.5	シイ			
653	+	+	丸杭	86.5	4.0	シイ			
654	+	+	丸杭	84.5	3.5	シイ			
655	+	流木	自然木(枝?)	76.0	5.0	サカキ			
656	+	杭	角杭	102.0	6.5	シイ			
657	+	杭	丸杭	81.5	4.0	シイ			
658	+	杭	角丸杭	99.0	7.0	シイ			
659	+	杭	角丸杭	55.0	3.0	シイ			
660	+	杭	木製品	77.5	3.0	シイ			
661	古河川5区 SX27 (南面)	流木	繖			シカ		36	31
662	古河川5区 SX27 (北面)	+	又銀?			シカ		31	27
663	古河川5区 SX27 (西面)	+	柄付平銀?			カシ(本体) シカキ(柄)		37	
664	+	+	又銀?			シカ		30	26
665	+	+	柄付平銀			シカ		37	30
666	+	+	又銀?			シカ		33	28
667	+	+	又銀?			シカ		33	28
668	+	+	又銀?			シカ			
669	古河川2区 SX25 (石橋面)	杭	角杭	?	4.0	シイ			
670	古河川2区 SX25 (石橋面)	杭	板杭	?	5.5	シイ			
671	+	杭	板杭	?	7.0	シイ			
672	+	杭	丸杭	?	2.5	シイ			
673	+	杭	角杭	?	5.0	シイ			
674	+	杭	角杭	?			欠番		

第16表 第2地点出土木製品観察表 XI

No.	出土遺構	出土状態	種類	残存長 (cm)	径・幅 (cm)	樹種	備考	挿図	図版
675	吉河川 2 区 Sx13(石塁裏)	杭	丸杭	?	2.5	シイ			
676	*	タ	丸杭	?	3.0	ヒサカキ?			
677	*	タ	角杭	?	4.5	クリ			
678	*	タ	板杭	?	7.0	シイ			
679	*	タ	角杭	?	6.0	シイ			
680	*	タ	丸杭	?	6.0	ユズリハ			
681	*	タ	丸杭			シイ			
682	*	タ	丸杭			サカキ			
683	*	タ	角杭			シイ			
684	*	タ	角杭			クリ			
685	*	タ	角杭			シイ			
686	*	タ	丸角杭			シイ			
687	*	タ	角杭			シイ			
688	*	タ	角杭			サカキ			
689	*	タ	丸杭			シイ			
690	*	タ	角杭			シイ			
691	*	タ	板杭			シイ			
692	*	タ	丸杭			シイ			
693	*	タ	丸杭			タブノキ?			
694							欠		
695							欠		
696							欠		
697							欠		
698							欠		
699	吉河川 5 区 Sx17(石塁裏)	横木	建築材	122.0	15.0	クリ	434がほぞべに 打ち込まれる	38	

第 17 表 第 2 地点出土木製品観察表 VII

(3) 田村遺跡第 2 地点から出土した木質遺物の樹種

福岡市早良区にある田村遺跡の第 2 地点から出土した木質遺物の樹種を調査した。調査方法は第 1 地点の項に記した。

その結果は第 6 ~ 17 表のようになった。以下これをまとめた。

第 2 地点出土の鋤・鎌の類の材はすべてカシであるが、半鋤 (W665) の柄はサカキ、本体はカシである。

建築材の大部分はシイで、W543のみクスノキで、これが柱材であれば面白い。

杭材をまとめると第 18 表のようになる。シイが圧倒的に多く、カシとクリがこれに次ぐ。この傾向は四箇遺跡や板付遺跡の主杭材に一致する。加工の様子によって、丸杭・角杭・板杭・半截杭に分けてあるが、数の多いものから順に示すと次のようになる。

丸杭 ①シイ ②カシ ③ユズリハ ④サカキ (樹種数 22)

角杭 ①シイ ②クリ ③カシ ④サカキ・タブノキ (樹種数 7)

板杭 ①シイ ②クリ ③タブノキ、カシ (樹種数 7)

丸杭ではシイ・カシの次にユズリハ・サカキがあり、その次がクリとなる。角杭・板杭ではシイの次がクリで、その次にカシまたはタブノキ・サカキがくる。なお丸杭では 1 ~ 数本にす

樹種	丸杭	半板杭	角杭	板杭	樹種計
シイ	104	5	101	43	253
カシ	35	1	6	2	44
タブノキ	7		3	2	12
シロダモ	1	—	—	—	1
スズリハ	27	—	—	—	27
サカキ	13	—	3	1	17
シャンポン	4	—	—	—	4
ヤツバキ	4	—	2	—	6
ヒサカキ	8	—	—	—	8
マツ	1	—	—	—	1
モチノキ類	2		—	—	2
エゾノキ	1	—	—	—	1
イスノキ	1	—	—	—	1
クリ	11	2	29	5	46
カキノキ	7	—	—	—	7
ヤナギ	1		—	—	1
ガマズミ	—	—	—	1	1
アワブキ	7	—	—	—	7
トネリコ類	—	—	1	—	1
コナラ	1	—	—	1	2
クヌギ	3	—	—	—	3
アカメガタ	1	—	—	—	1
ノリウツギ	2	—	—	—	2
カエデ類	1	—	—	—	1
散孔材	6	—	1	—	7
不明	7	—	2	7	16
杭種計	255	7	148	62	472

第18表 第2地点出土杭材樹種一覧表

実測したものは1片しかなかった。これらの状況から推しはければ、少なくとも各遺構が構築されたのは弥生中期後半で、埋没したのは後期初頭頃といえよう。埋没はかなり急速に進んだと考えられ、古河川中にそれ以降の遺物はみられない。古墳時代の遺物がみられるのは古河川が埋没し終り、その上面が生活面として使用され始めてからである。

次に古河川とそれに付随する各遺構の関連をみてゆく。古河川は西南方向から東北方向に向って流れる。発掘区内で検出したのはその左岸部を中心とした部分で、その河幅等については不明な所がある。第1地点の古河川をその対岸とすれば、その河幅は100mを越えるものとなる。しかし、その後の調査によれば、幾度かの流路の変更がはっており、单一時期のものではないことはすでに述べた所である。

発掘区の西側にそって、南流する溝状のものがあるが、大半が発掘区外にかかり、規模等については明確にしがたい。この溝の北側に横断する形でS X 18棚状遺構が架設されている。これは発掘区を拡張したため、ほぼ全体を確認でき、その長さは4mで、あるいはこれが溝幅の

ぎないが、木の種類がはなはだ多い。割りやすいクリは角・板杭に、割りにくいカシや太くない雜木は丸杭に用いる傾向があるように思われる。(鳴倉己三郎)

(4) 小結

第2地点南側における古河川と、それに付設された一連の遺構の検出は、今回の発掘においてかなり重要なものである。第1地点でもすでに古河川とそれに伴う杭列を検出しているが、発掘区が限定され、その全貌について知ることができなかつた。これに対し第2地点の遺構は、発掘区の限定があったにしろ、およよその水利関係を把握することができた。

最初にこの古河川の時期について触れたい。すでに述べたように出土した遺物は土器・石器・木製品であるが、時期決定をなす土器の出土量は少なく、かつ小破片のものが多い。時代的には断続的ではあるが縄文前期から弥生後期初頭までの上層が混在する。しかし、その主体となるのは弥生中期後半の上器で、出土土器の大半を占める。弥生後期初頭の土器はわずかで、

およその規模を示しているともいえる。また、この溝が古河川に合流する付近から、北東方向に全長8mのSX17棚状遺構が延び、その内側にはSX16水溜状遺構が設けられている。SX16は小溝で台地上と接続している。これらの遺構は一連の台地上へ取水するための水利施設であると考えられるが、SX18とSX17が同時期に併用して使用されていたのかは判然としない。同時に使用されたとすれば、2ヶ所で取水が行なわれていたことになる。同一時期の使用でない場合、それらの先後関係は出土遺物からは明確にしえない。

SX18とSX17を比較すれば、その規模のもさることながら、構造の点で大きな相違がみられる。SX18が川下側から杭を密に打ち込んだだけのシンプルなものであるのに対し、SX17は横木を河川前面に置き杭で固定し、これを枕木にするように一定間隔をもって緩角度で杭を打ち込む。さらにこの後に直立気味に杭を打ち込んでいる。またこの遺構の全面には、大型の建築材を直交するように固定し、配置している。この相違は、SX18は溝に構築されているのに対し、SX17は直接河川と接する場所に構築されているという事情によるものであろう。SX17の前面に配された建築材は、あるいは河川の流れを調整し、槽状遺構への影響を少なくするものであったのかもしれない。

槽状遺構を構成する杭材の樹種からその構造をみてゆく。これらの遺構が長期間にわたって使用される際には、破損部分の補修・補強が行なわれるは当然考えられる所で、検出した遺構は築造時と变成了るものとなっている可能性もある。これには詳細な杭の構築状態の検討もさることながら、各々の杭材の樹種を調査することが、かなりの有効性をもつものと考えられる。SX18は18樹種におよぶ杭材が用いられており、その中でシイが約4%を占めている。樹種によって打ち込まれる場所が異なるといった状況は特に認められない。しいていえば、シイの杭材がより下の方に集まっている傾向がうかがえる。これに対しSX17では樹種によって打ち込まれた場所がかなり異っている。シイはこの遺構の杭材の半数以上を占め、全体にまんべんなく打ち込まれているが、シイだけで構成されるのは中央部付近である。両端は樹種にかなりの混れがみられ、かなり補修を受けたと考えられる。西南部分は南流する溝が直接ぶつかる所であり、また北東部分はSX16からの排水も兼ねていると考えられる。流れによる破壊とその補修のみならず、取・排水の調整のため打ち込んだ杭を取りはずしたり、再度打ち込んだりした状況があったとしても差しつかえなかろう。

これらの遺構が、台地上への取水施設の一部をなすことはすでに述べたが、台地上には水田土層など見当たらず、農耕に使用されたものかは判然としない。しかし、台地上の古墳へ中世の遺構がかなり削平を受けていること、またSX16の農耕具の出土などからみれば、台地上に水田が開かれていた可能性が強いといえよう。

SX15は古河川の肩から底へ緩く下ってゆく石敷遺構である。川底にはさらに杭が2列延びている。このような遺構の検出例は聞かないが、河への昇降のため滑りやすい粘質土の河岸に

石を敷いたものと考えられる。また河につき出た杭列は、本来その間に土などを充填し、河水を利用するのに供したものと思われる。

S X13・14は、杭を2列打ち込み、その間に拳大から人頭大位の石を種み重ねたものである。構造的には同じともいえるが、S X13が河の肩部から構築されているのに対し、S X14は川底に設けられている。ともに調査区外にかかり、その全貌を把握することはできなかった。類例を待ちたい。

沖積地の開発が進むにしたがい、福岡市内でも水田およびそれに伴う水利施設の調査例が多くなっている。福岡平野では、板付遺跡を中心に繩文晩期末～中世にかかる水田跡・水利遺構が、その周辺部におよんでいる。近年では、1982・83年に発掘された那珂君体・久平遺跡^{註1)}で、古墳時代前期を前後する水田跡が井堰などの水利施設とともに検出されている。早良平野においても下山門・十郎川・拾六町ツイジ・湯納・牟多田・原深町・四箇・野方柳原などの遺跡で杭列・棚状遺構などの水利施設が検出されている。確実な水田跡を伴ったのは拾六町ツイジ・野方柳原遺跡であるが、ともに古墳時代前期以降のものである。棚状遺構などの施設も古墳時代前期以降のものがほとんどである。

田村遺跡第2地点で検出した一連の水利遺構の時期は弥生時代中期後半～後期初頭で、早良平野のこの種のものとしては時代的に遅るものである。またその規模・構造など古墳時代のものと比べても遜色がないといえる。これらの施設の構築材の選定から構築に関わる一連の作業、またその維持・管理には高度な技術と集中した労働力が必要であったであろう。その背景には、弥生時代中期後半・北部九州において各平野を単位とした酋長層の出現が関与していた可能性が強い。ただ早良平野においては、隣接する糸島平野・福岡平野と異なり、その実態は明確さを欠く。これは今後検討・追及すべき大きな課題であろう。

註1) 横山邦雄・浜田哲也(編)『那珂君体遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集 1984
那珂久平遺跡は1983年発掘調査。

2) 山崎純男(編)『下山門遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973

3) 吉岡亮祐(編)『十郎川・福岡市早良平野石丸・古川遺跡』 1982

4) 山口讓治・松村道博『拾六町ツイジ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983

5) 萩原和彦(編)『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集』 1976

6) 烏津義附『牟多田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974

7) 飛高義雄・力武卓二『原深町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 1981

8) 力武卓二『鷲町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976

9) 1983年度発掘調査。二宮忠司氏御教示。

4 古墳時代～中世の遺物

第2地点における台地上の遺構については「田村遺跡Ⅰ」において詳述した。検出したのは櫛8列、掘立柱建物15棟、竪穴住居跡6軒、土壙墓6基、土塼46基、溝状遺構21条などである。居住地がその主体をなすが、一部に墓地、また溝状遺構からすれば生産地（水田）も形成されていたと考えられる。前報告では出土遺物の概要しか述べなかつたため、以下各遺構ごとにその観察を行っていく。ただ一部の遺構を除けば出土遺物は極めて少なく、かつ小破片で、各々の遺構の時期決定を行うのは困難であった。なお前報告と器種・数量が異なる所は、本書をもって正となす。

(1) 櫛出土遺物（第40図）

S A01 櫛を構成するほとんどの柱穴から遺物が出土しているが、いずれも細片で図化しえたのは3点にすぎない。1・2は同安窯系青磁皿で、櫛およびヘラによる施文を内底に行う。釉は淡緑色を呈するが、外面体部下半と底部は施釉されていない。胎は主として青灰色をなす。3は土師器皿で、底部は糸切りを行なっている。復元底径8cm。外面体部と底部の間に小さな段を有する。他に青磁碗・白磁碗・上師器・陶器・縄文土器などの細片とともに、鉄滓・鉄釘などが出土した。

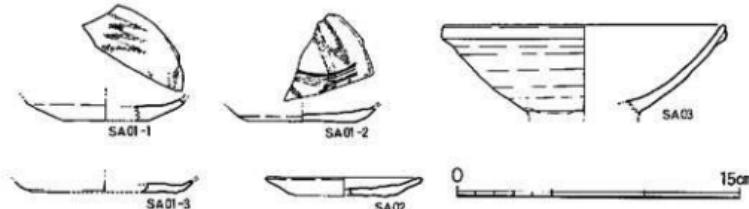
S A02 8柱穴からなる櫛であるが、遺物が出土したのはそのうちの1つにすぎない。図示したのは、復元口径8.3cm、器高1.0cmの上師皿である。底部の切り離しは不明。淡黄褐色を呈する。他に上師器細片、縄文式土器細片がある。

S A03 12の柱穴中9ヶ所から遺物が出土したが、実測したのは1点にすぎない。小さな玉縁をもつ白磁碗で、復元口径14.8cmを計る。釉は乳白色で、内面および外面高台上部付近までかかる。他には白磁碗片（玉縁）、土師器碗・皿、縄文式土器の細片、および鉄滓が出土している。

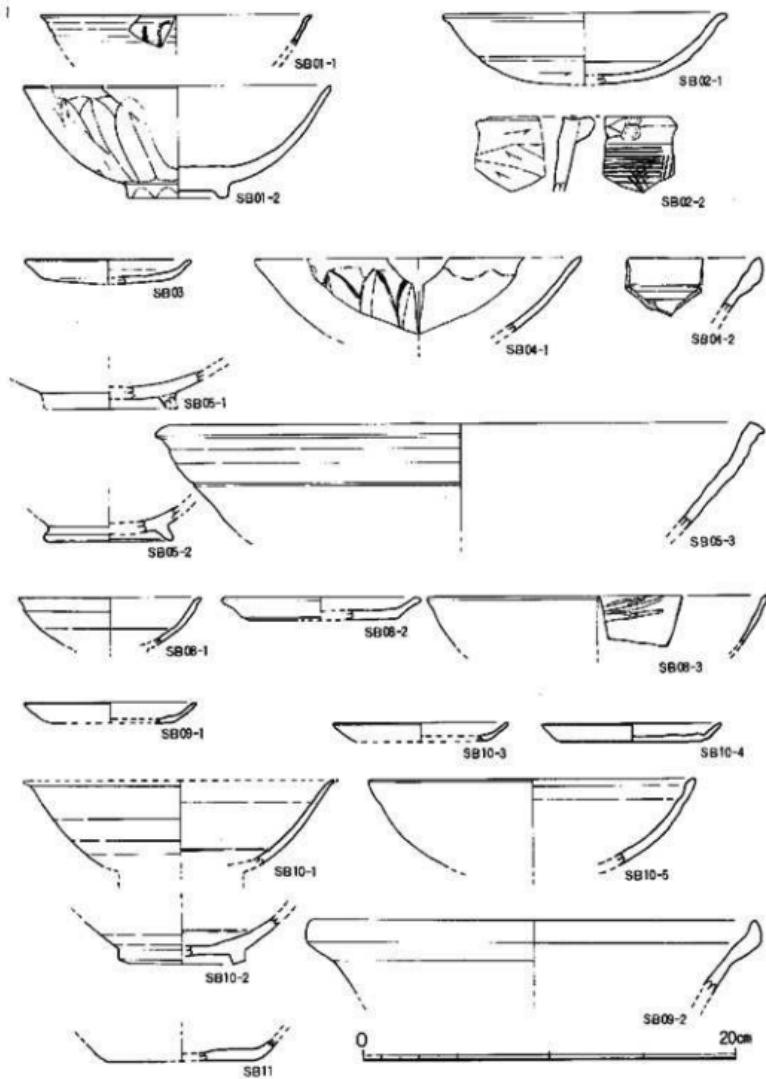
S A04 縄文・弥生式土器、土師器が少量出土しているが、細片で実測できなかった。

S A05 土師器細片、鉄滓が少量出土した。実測は行なっていない。

S A06~08 出土遺物はみられなかった。



第40図 SA櫛出土遺物実測図 (1/3)



第41図 SB掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

(2) 掘立柱建物出土遺物 (第41図)

S B01 白磁・青磁・土師器・滑石製品・鉄滓が出土している。土師器は糸切り皿が7点細片でみられる。白磁・青磁以外は固化しえなかった。1は白磁椀片で器内の薄い端反りの口縁部をなす。外面にヘラ描きの文様を持つ。2は龍泉窯系の青磁椀で、P 6 (体部上半)とP 9 (底部)から別々に出土したものとの接合資料である。高台は断面四角で、部分的に肧胎となる。厚い底部を特徴とする。灰緑色の釉は薄い。外面に蓮弁を削り出している。

S B02 土師器椀・糸切り皿の他に陶器・鉄滓が出土した。1は土師器椀で、復元口径14.8cm、器高3.8cmを計る。口縁端部を小さく外に引き出し、丸く収めている。底部はヘラ切りの後にナデて仕上げる。砂粒を含み淡褐色を呈する。2は陶器で、口縁外面に突帯をつける。体部に不定方向の刷毛目、内面にヘラ削りを施す。砂粒を含み淡赤褐色を呈する。甕か。

S B03 土師器皿・黒色土器椀が出土している。土師器は復元口径8.8cm、器高1.3cmの小皿である。底部はヘラ切りの上に板状圧痕が残る。内外面とも横ナデ調整、精良な胎土で淡赤褐色を呈する。

S B04 青磁・白磁・土師器・須恵器・鉄滓が出土している。いずれも細片で図示できたのは2点である。1は龍泉窯系の椀で、体部下半を欠失する。灰白色の胎土に、青味を帯びた綠色釉を口縁端に厚く施す。外面には鏡蓮弁を陽刻する。2は須恵器鉢の口縁部破片である。内外面とも横ナデされ、灰褐色を呈する。

S B05 1・2は黒色土器椀片である。外方に開く高台をついている。1は磨滅し調整不明、2の内面はヘラナデを行う。焼成は普通。3は須恵質の浅鉢形十器片で、復元口径27cmを計る。外面は回転ヘラ削り、口縁部から内面は横ナデを行う。胎土に砂粒・黒色粒子を混え、焼成良好、淡青灰色を呈する。他に土師器細片が出土した。

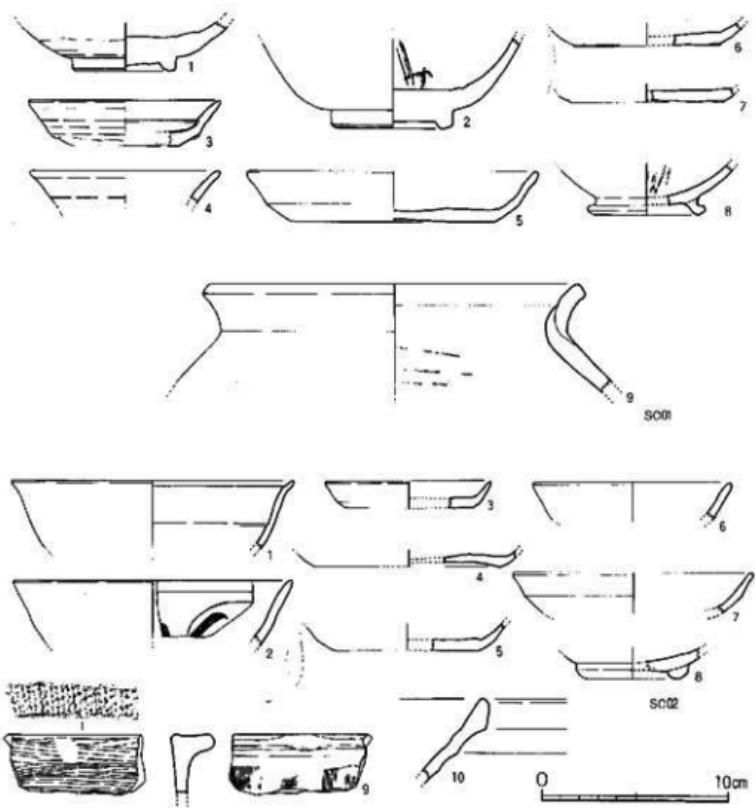
S B06 土師器のみ11片出土したが、細片のため図化しえなかった。

S B07 糸切り底の小皿を含む土師器片が少量出土したが、図化するにたえない資料である。

S B08 1は口縁部を小さく外方に引き出す白磁皿片で、内面見込みに小さな段をつくる。体部下位まで乳白色の釉を施す。胎は灰白色で黒色粒子を混える。2は復元口径10.2cm、器高1.2cmを計る土師器皿である。底部はヘラ切りで、板状圧痕を残す。内底には不定方向の強いナデがみられる。3は内面だけを焼した黒色土器片で、内面ヘラナデ、外面指ナデを行っている。精選された胎土で、焼成良好。他に青磁片・土師器細片・フイゴ羽口片が出土した。

S B09 白磁・土師器・須恵器・陶器・滑石製品が出土したが、実測できたのは図示した2点のみである。1は土師器皿で、復元口径9.1cm、器高1.1cmを計る。底部は糸切りで、内面は一部焼っている。2は鉢形の土器で、口縁部外面が肥厚して立ち上る。その部分は帯状に黒変している。砂粒を混えた胎上で焼成良好、灰褐色を呈する。

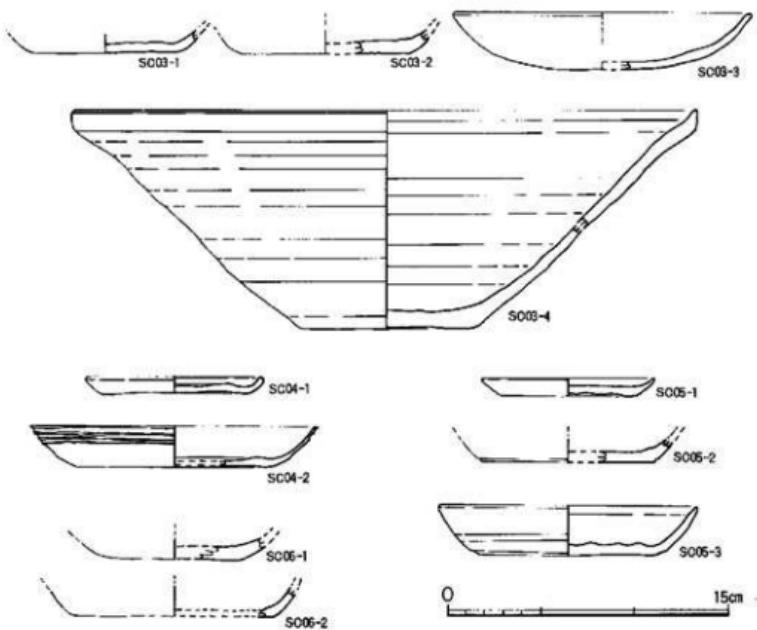
S B10 出土したのは白磁2片、土師器14片だけである。1は白磁椀片で、口縁部を小さく



第42図 SC整穴住居跡出土遺物実測図 I (1/3)

外方に引き出す。体部は丸味をもち、器肉は薄い。内面口縁下と見込みに浅い沈線を設ける。灰緑色の釉が残存部すべてにかかっている。2は白磁碗の底部片である。高台は断面四角形を呈し、底部の器肉は薄い。内面見込みには段をもつ。灰白色をなす釉は、残存する外面上には施されていない。胎土には黒色粒子を混える。

3・4は土師器皿である。3が復元口径9.1cm、器高1.1cm、4が口径9.5cm、器高1.0cmを計る。底部はともに糸切りで、板状圧痕を残す。4の外面上には赤色顔料らしき痕跡がみられる。5は土師器碗で、復元口径17.2cmを計る。内面口縁下はナテにより凹む。内外面の下半部が黒変している。



第43図 SC11 穴住居跡出土遺物実測図 II (1/3)

S B11 土師器が3片出土した。図示したのは糸切り底を有する皿で、復元底径8cmを計る。

(3) 穴住居跡出土遺物 (第42・43図)

S C01 (第42図) 覆土および床面から白磁・青磁・土師器・施釉陶器の破片と鉄滓が出土した。土器は細片が多く、一部しか回復できなかった。

白磁 (1) 分厚い底部で、高台は低く削り出されている。内面は見込みに段を有し、内側にも沈線状の段を施す。黄色味を帯びた釉は貢入が多く、体部下半までかかる。

青磁 (2~4) 2は龍泉窯系の碗で、底部は厚く、高台は内側を斜に削る。内面に五分割の鶴花文を施す。灰緑色を呈す釉は、高台外側までかかる。3は同安窯系の皿で、体部中位で屈曲し、内面に強い段を形成する。釉は胎色ガラス質で、体部下半には施釉しない。4の口縁はやや外反する小椀で、灰緑色の釉を施す。

土師器 (5~7・9) 5~7は床面から出土した糸切り底の杯である。5・7は外底に板状压痕を有する。5の復元口径は、15.0cmである。9は復元口径19.6cmの甌で、頸部下半に格

子目状のたたき痕を残し、内面には屈曲部より下位に強いナデを施す。胎土に砂粒を含み、淡赤褐色を呈す。

S C02 (第42図) 覆土と床面から、白磁・青磁・青白磁・土師器・陶器が出土している。いずれも小片で、図示したものはその一部である。

白磁 (1) 床面から検出された碗である。口縁は緩やかに外反し、伏せ焼の為に「口禿」となる。空色を帯びた釉には貫入が多く入り、胎土に黒色粒子を含む。

青磁 (2) 床面から出土した龍泉窯系の碗で、内面に草花文を施す。釉は灰緑色を呈する。

上師器 (3~8) 3は床面から出土した小皿で、復元口径8.8cmを計る。外底に糸切り痕と板状圧痕を有す。4~7は杯で口縁部あるいは底部を欠損する。4・5の外底には糸切り痕と板状圧痕を残す。6・7は丸底を呈すると考えられ、口径はそれぞれ10.4cm・12.6cmに復元できる。8は高台付碗であるが磨耗し高台は丸くなっている。胎土に砂粒や金色・黒色粒子を含み、淡黄褐色を呈す。6は床面から、他は全て覆土中より出土した。

無釉陶器 (9・10) ともに覆土から出土し、器形は鉢と考えられる。9の口縁部は「L」字をなし、外面に細かい綻刷毛目、内面は横位の刷毛目を施し、L端に縋状圧痕を有す。砂粒を含み、淡褐色を呈す。10は外傾する口縁部は肥厚し玉縁状につくる。横ナデにより器面調整を行なう。胎土に砂粒・赤色粒子を含み、色調は、口縁肥厚部は灰白色、その他は淡橙褐色を呈する。

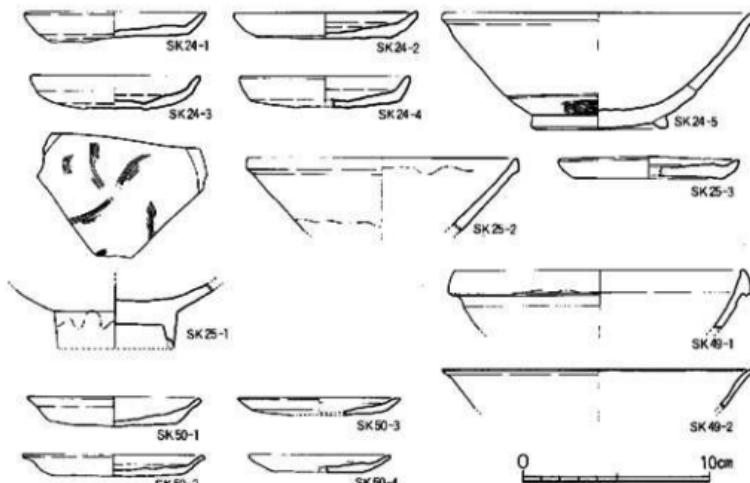
S C03 (第43図) 図示したものは覆土から出土した破片資料である。床面から、白磁1片、土師器4片、須恵器1片が検出されたが、いずれも細片である。

土師器 (1~3) 1~3は杯であるが、1・2は体部上半を欠失するが平底を呈す。底部切離し技法に違いがみられる。1はヘラ切り、2は糸切りが施され、その上に板状圧痕を有す。3は丸底の杯で、復元口径15.8cmを計る。内外面に丁寧なナデを施し、胎土は精進され、色調は、外側部下半が灰褐色、その他は淡黄褐色を呈する。

須恵器 (4) 直線的に外傾する体部と上方へ引き出された口縁端部を持つ鉢である。外底に糸切り痕と板状圧痕を残す。内外面とも横ナデを施し、胎土に砂粒を含み、灰褐色を呈すが、端部外面のみ黒変する。束縛魚住窯産と考えられる。

S C04 (第43図) 覆土と床面から土師器だけが出土し、床面出土の資料のみ図化した。1は、ほぼ完形の小皿で、9.2cmの口径をもつ。糸切りの底部には板状圧痕を有す。2は大皿の器形で、復元口径15.0cmを計る。体部の器内は薄く、外面上半にナデの残滓が付着する。底部は糸切りされる。

S C05 (第43図) 青磁碗の小片が床面から出土した他は、全て土師器である。1は口径9.2cmの小皿で、底部に糸切り痕を有する。体部下半をヘラで平滑化し、他は横ナデまたは不定方向のナデを施す。2は体部上半を欠失する杯で、糸切りされた外底には粗い板状圧痕を残す。



第44図 SK土塙墓出土遺物実測図 (1/3)

3は口径13.8cmの杯で、外底は回転ヘラ切りし、板状座痕を残す。内底には一方への強い指ナデ、体部内外面には横ナデを施す。全て覆上から出土した。

S C06 (第43図) 全て土師器のみ出土し、國化できたのは2片の底部破片である。1・2とも器形は杯になると考えられる。糸切りの痕跡がみられ、内外面ともナデ調整を施す。精良な胎土を用い、淡黄褐色の色調を呈する。

(4) 土塙墓出土遺物 (第44図)

S K22 埋土から龍泉窯系青磁碗・皿・土師器・鉄滓および炉壁片が出土した。上器類はいずれも細片で、流れ込みと考えられる。國化は行わなかつた。

S K24 北側墓床から土師器皿4、瓦器碗1が出土した。1~4は土師器皿である。1・2が口径9.6~9.8cm、器高1.4cmであるのに対し、3・4は口径9.0cm、器高1.7~1.8cmとやや小型であるが深い。底部はいずれも荒いヘラ切りであるが、1・2が平底をなすのに対し、3・4は体部との境が不明瞭で丸みをおびる。底部以外はナデで仕上げる。焼成は良好で、黄褐色～灰褐色を呈する。5は瓦器碗である。口径16.6cm、器高6.2cmを計り、底部には小さな高台を設ける。外面体部下半に接合による段があり、それより上位はヘラ研磨(磨滅して不明瞭)、下位は刷毛状工具による横方向のナデが行なわれている。精良な胎土で、焼成良好、黄白色を呈する。これらの土器は本墓の副葬品であった可能性が高い。

S K25 埋上から白磁・青磁・褐釉陶器・土師器・瓦器・鉄滓などが出土したが、細片のも

のが多く、副葬品の類とは考えられない。図化したのは3点のみである。1は白磁碗で、直線的な体部と小さな玉縁をなす。釉は灰色をおびた淡い緑色で、口縁部内面には厚く垂下している。体部下半は施釉されていない。2も白磁碗で、床面から5cmほど浮いて出土した。内面見込みに浅い沈線をめぐらし、その内側に飾描きによる施文を行う。釉は灰白色で、高く削り出した高台部の外面上位まで施している。3は上師器皿で、復元口径9.8cm、器高1.1cmを計る。底部は糸切りである。焼成良好で、黄褐色をなす。

S K29 龍泉系青磁皿片、糸切り底の土師器皿片などが出土したが、細片で図化できない。

S K49 白磁碗・青磁片・土師皿（糸切り、板状圧痕）、瓦器碗などが出土したが、いずれも細片で、実測したのは白磁碗2点にすぎない。1は玉縁の口縁をもつもので、灰色をおびた緑色の釉が、残存部全体に薄くかかる。胎は灰白色。2は口縁端を小さく外方に引きだしたもので、残存部にはすべて灰白色の釉が薄く施される。器肉はさわめて薄い。

S K50 1～4は土師器皿である。口径7.6cm～9.7cm、器高は0.9～1.6cmを計る。4はやや小型である。底部はヘラ切りで、1と2には板状圧痕がみられる。1・2は基床、3・4は上面からの出上である。基床からは他に杯片、上面からは瓦器碗・土師器皿などが出土。

(5) 土壙出土遺物（第45・46図）

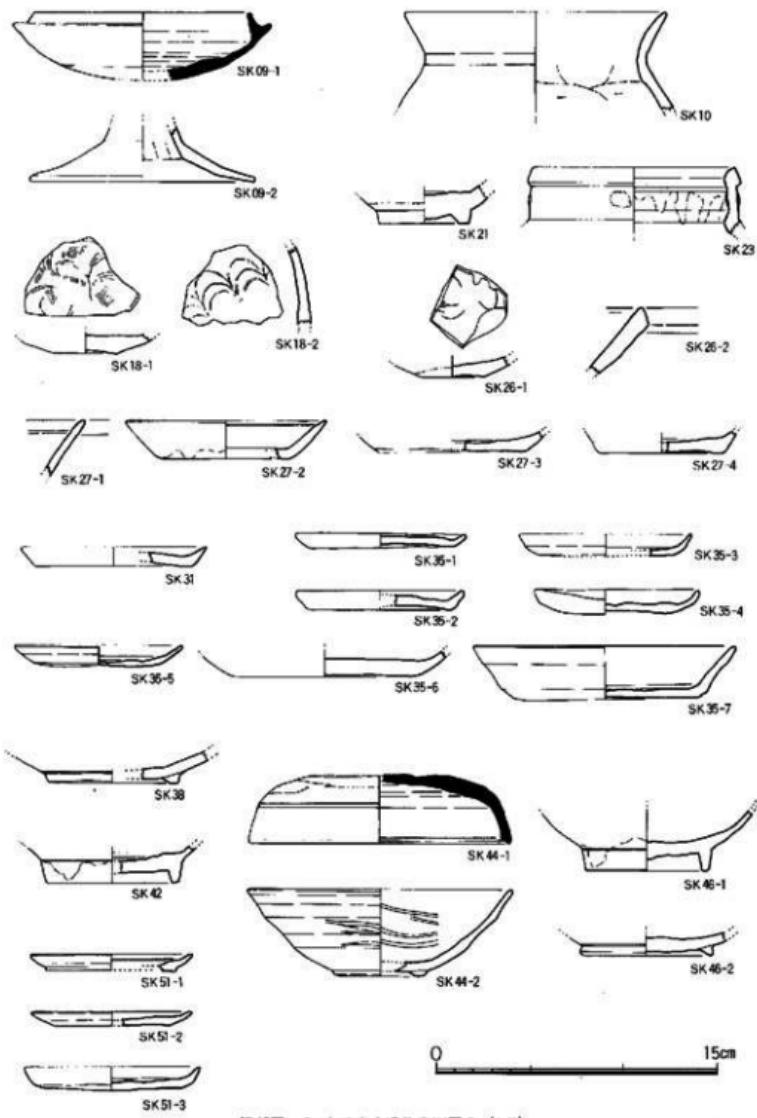
46基の土壙からの出土遺物は少く、かつ細片のものが多かった。ここでは遺物を図示した遠構についてだけ述べる。他の土壙の出土遺物の概要是「山村遺跡I」にすでに記している。

S K09（第45図） 1は須恵器杯で、口径11.5cm、器高4.1cm、受部径13.8cmを計る。立ち上がり部はシャープな作りで、端部は角ぼり内傾する。ヘラ削りは体部下半にあるが、焼成時の付着物が体部を被い、詳細は不明。焼成堅緻で、灰黒色を呈する。2は上師器高杯脚部片で、復元底径12.0cm。筒部内面はヘラ削り、他は横ナデで仕上げる。良質の胎土を用い焼成良好、灰褐色をなす。他に布留式系統の壺・小型丸底壺の底部片があるが、細片で実測しなかった。

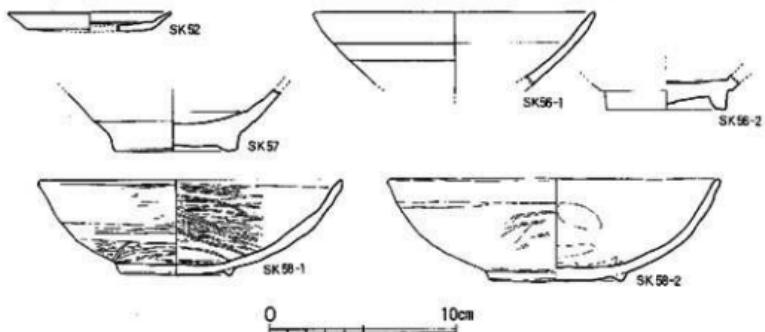
S K10（第45図） 繩文式土器細片を除けば、すべて古墳時代の土師器片が出土した。図示したのは復元口径12.0cmの変形土器で、胴部内面は横のヘラ削り、その他はナデ調整を行う。精良な胎土で、焼成良好、赤みをおびた黄褐色を呈する。

S K18（第45図） 口縁に輪花をもつ白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・景德鎮窯の皿片・土師器皿（糸切り底が主、一部ヘラ切り）・瓦器片などが出土したが、いずれも細片で、図化したのは2点だけである。1は龍泉窯系青磁皿で、内底に桶状工具によって花文を描く。釉は明緑色で、底部には施されていない。2は褐釉陶器の破片で、外面にヘラによって重弧状の花文を彫り込む。胎は灰色で、白色および黒色の粒子を混えている。

S K21（第45図） 土師器・陶器・鉄滓などが出土したが、いずれも細片で、実測できたのは同安窯系青磁碗片のみである。内面見込みに小さな段を設け、底部は厚い。くすんだ黄褐色の釉は、残存部の外面には施されていない。胎は黄白色で、黒色粒子を少量混える。



第45図 SK土壙出土遺物実測図 I (1/3)



第46図 SK土壤出土遺物実測図 II (1/3)

S K23 (第45図) 図示したのは褐釉陶器片である。肩部から口縁が直立ぎみに立ち、端部は肥厚させている。胎は赤みをおびた灰色。残存部はナデで仕上げているが、全体の作りは雑な感じをうける。小口瓶になるものか。他に白磁・土師器・陶器の細片が出土している。

S K26 (第45図) 1は白磁皿で、内底に細い線で描く花文がある。釉は淡緑色で、底部以外に薄く施される。胎は灰色で、若干の黒色粒子を混える。2は口縁端部に向って厚みを増す土師質の鉢で、内面は刷毛目で調整を行う。焼成は良好で内面および外面口縁部は黒色、他は黄灰色を呈する。これ以外、青磁・白磁・土師器・陶器などの細片がある。また椀形の鉄滓も出土している。

S K27 (第45図) 1は青磁椀片で、口縁外面に小さな段、内面に浅い沈線を設ける。内面沈線下にはヘラ描きによる蓮弁状花文がある。釉はくすんだ緑色、胎は灰白色をなす。2は口禿の白磁皿で、内面見込みには浅い沈線を施す。空色がかった白色の釉が全面に施され、外面体部下半はその垂下が著しい。4・5は土師皿と考えられる。3は糸切り底、4はヘラ切りと思われる。ともに雑な作りである。他に龍泉窯系青磁椀・皿、同安系青磁椀、白磁、土師器、陶器、瓦器などの細片があり、また鉄滓も15個出土した。

S K31 (第45図) 尖削したのは土師器皿1点のみである。復元口径9.8cm、器高1.0cm。底部は糸切りである。他に土師器・黒色土器・繩文式土器が少量細片で出土した。

S K35 (第45図) 1～5は土師器皿である。口径8.8～9.2cm、器高0.9～1.3cmを計る。底部は糸切りで、1～3はあげ底を呈する。3～5は精良な胎土を用い、1・4・5が淡赤褐色、2・3が暗褐色をなす。焼成はいずれも良好である。6は復元口径13.6cm、器高1.6cmを計る土師器大皿で、糸切り底をなし、また板状圧痕を残す。7は土師器杯で、口経14.0cm、器高2.9cm。底部は糸切りを行い、他はナデで仕上げている。6・7とも焼成良好で暗褐色を呈する。7の

胎土は精良である。この他に土師器細片や白磁細片が出土している。

S K 38 (第45図) 図示したのは瓦器椀底部片である。小さな高台をもつ。調整は磨滅して不明。精良な胎土で、灰白色をなす。他には黒色土器、土師器、白磁の細片が出土した。

S K 42 (第45図) 烧成したのは白磁碗片1点である。内底には重ね焼きの目跡が残る。釉は青味をおびた灰色で、高台上位までかかっている。他に糸切り底の土師器皿3片、黒色土器1片が出土した。

S K 44 (第45図) 1は須恵器杯蓋である。復元口径14.0cm、器高3.6cmを計る。外面体部と天井部の境には小さな段を有し、口縁内側は凹む。天井部はヘラ削りとともに板による平行タキが残る。また、内面にも同心円状のタキがみられる。2は瓦器椀で、口径14.1cm、器高4.1cmを計る。高台は扁平な半円形状で、器壁は研磨による凹凸がはげしい。精良な胎土で、焼成良好、外面淡暗褐色、内面灰白色を呈する。口縁部は内外面ともすすけている。他の出土遺物は瓦器小片、土師皿(糸切り)小片などである。

S K 46 (第45図) 白磁・土師器・青磁の破片などが出土した。1は白磁碗片1点だけである。細身の高台をもち、内面および外面高台上位近くまで薄めに施釉している。釉色は淡灰褐色である。2は土師器碗で、外方に小さく聞く高台を付ける。内面には研磨痕がみられる。胎土は精良で、焼成良好、淡褐色を呈する。

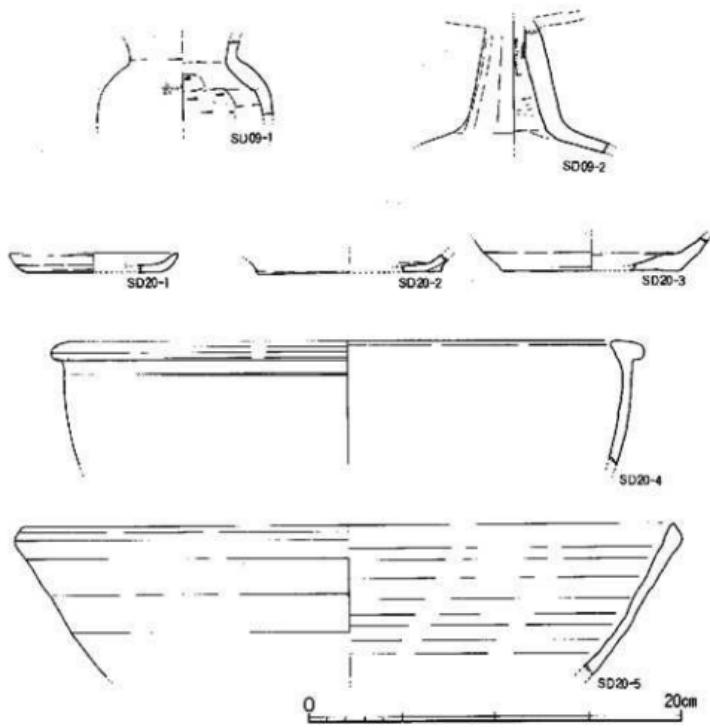
S K 51 (第45図) 1~3はいずれも土師器皿である。口径8.5~9.5cm、器高0.7~1.3cmで、1・2に比べ3が大型である。底部は糸切りで、1・3には板状压痕も認められる。1・2は胎土精良、3は砂粒を多く混え、いずれも焼成良好、赤褐色を呈する。他に土師器・瓦器の細片が出土している。

S K 52 (第46図) 図示したのは口径8.6cm、器高1.0cmの土師器皿である。底部は糸切りで、板状压痕もみられる。焼成良好。他に糸切り底の土師皿片、瓦器片、白磁片などがある。

S K 56 (第46図) 瓦器・土師器・白磁・青磁などが出土したが、いずれも細片で、実測できたのは白磁碗片2点のみである。1はやや内傾気味に立ち上る。内外面の口縁部下部に小さな段を作る。乳色の釉は残存部すべてにかかる。2は内面見込みに段を設けるもので、高台はシャープな台形を呈する。残存部外面には施釉されていない。

S K 57 (第46図) 図示したのは白磁碗片である。内面見込みに沈線をめぐらす。底部は厚く、高台は低い。内面および体部下半まで施釉され、淡灰白色を呈する。他には土師器細片が出土しただけである。

S K 58 (第46図) 1・2とも小さな高台を付けた瓦器碗である。1は口径16.2cm、器高5.1cm、2が口径17.8cm、器高5.8cmを計る。内外面ともヘラ研磨を行なっているが、2は磨滅して不明瞭である。内底にはともに強い指壓痕がみられる。胎土は精良で、焼成はやや軟質である。他にこの遺構からは土師器皿・青磁・白磁・滑石製品なども出土しているが、細片で実測



第47図 SD溝出土遺物 実測図 I (1/3)

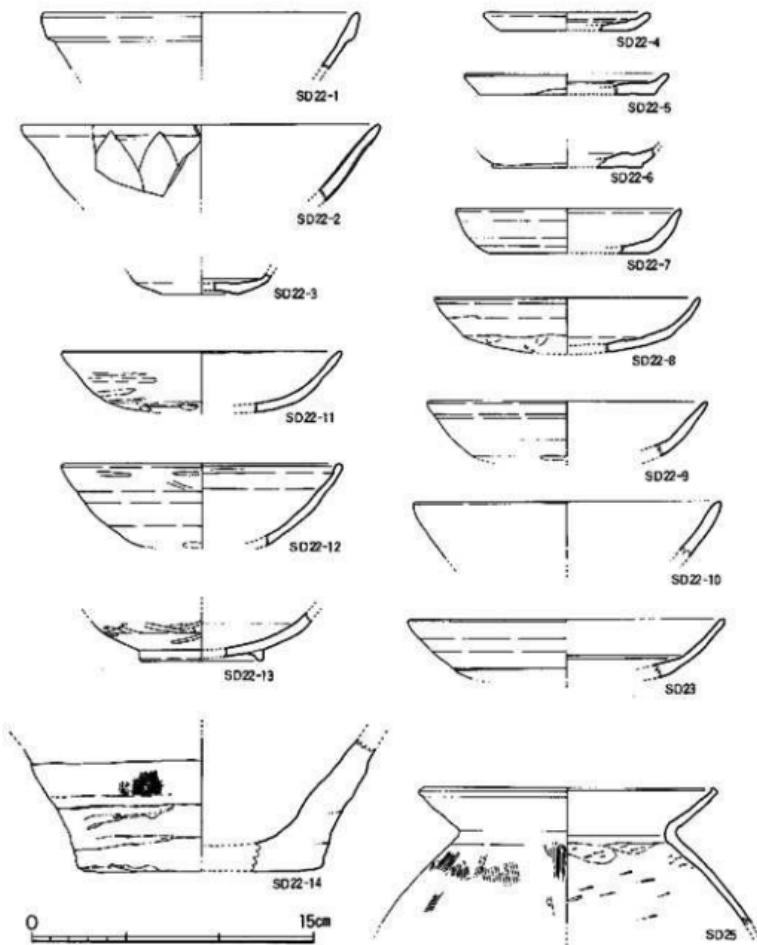
には到らなかった。

(6) 溝出土遺物 (第47・48図)

溝遺構は21条検出したが、出土遺物は少量かつ細片が多く、実測ができたのはほんの一部にしかすぎない。ここでは遺物の実測が可能であった溝遺構のみについて触れる。

S D09 (第47図) 1は土師器壺片である。胸部は球形状で、緩やかに口縁部が外反する。内面は横方向の強いヘラ削り、外面は刷毛目調整を行う。胎土には大粒の砂粒を混え、焼成良好、淡褐色を呈する。2は土師器高杯の脚部片である。外面は縱方向のミガキ、内面は横方向のヘラ削りの痕跡を残す。精良な胎土で、焼成良好、淡褐色を呈する。他に下層より須恵器片なども出土している。

S D20 (第47図) 1～3は土師器皿であるが、1が口径9.0cm、器高1.0cmと小型であるの



第48図 SD2溝出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

に対し、2・3は復元底径が9.6~9.8cmとひとまわり大きい。1・3の底部には糸切りの痕跡が認められる。いずれも焼成良好で、赤褐色を呈する。4は施釉陶器片である。口縁部は肥厚し、逆L字状を呈する。外面口縁下に一条の沈線をめぐらす。外面は横刷毛目の後施釉してお

り、釉色は赤茶色を発する。内面は横ナデで仕上げる。焼成堅緻である。鉢形をなすものか。5は須恵質の鉢形土器片で、口縁部は肥厚し、上方に引き上げられる。器表は凹凸が著しい。胎上には大粒の黒色粒子を混え、焼成良好、淡灰黒色を呈する。束縛產か。

S D22 (第48図) 本溝では破片ではあるが、比較的まとまった土器が出土した。

白磁 (1・3) 1はやや扁平で幅広い玉縁をなす椀で、残存部器表には乳白色の釉が薄くかかる。復元口径15.9cm。2は皿の底部片で、ややあげ感である。釉は乳白色で、底部中央部を除きすべて施釉されている。胎は灰色を呈する。

青磁 (2) 龍泉窯系の椀片である。外面口縁下に小さな段をもち、そこに先端部がかかるように蓮弁文を施す。残存部は全面施釉され淡緑色を呈する。胎は灰色。

土師器 (4~10) 4~7は土師器皿である。4~6は復元口径9.0~11.0cm、器高0.9~1.1cmをはかる。7はこれに比べ大型で口径12.0cm、器高2.3cmである。4の底部はヘラ切り、他は糸切りを行っている。いずれも精良な胎土を用い、焼成も良好である。8・9は杯片である。復元口径14.2~15.0cm、口縁端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデで仕上げている。胎土は精良で、焼成良好、8が赤褐色、9が黄褐色を呈する。10は椀片と考えられる。復元口径16.4cm。器肉は厚めで、口縁端部は丸くおさめる。磨減と器表に付着した炭化物のため調整等不明。

瓦器 (11~13) 11は杯であろう。復元口径15.0cmで、外面には研磨が行なわれる。底部附近にはヘラ切り、押圧痕が認められる。12・13は椀で、小さな高台を取りつける。12の復元口径15.0cm。ともに外面は横方向の研磨を行う。胎土はいずれも精良で、焼成はやや軟質、灰色を呈する。11の口縁部は内外とも黒変部が帯状にめぐる。

須恵質上器 (14) 瓢の底部片である。器肉は厚く、外面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。また体部外面には布压痕が残る。胎土には砂粒を混え、焼成良好、淡緑褐色を呈する。復元底径10.3cm。

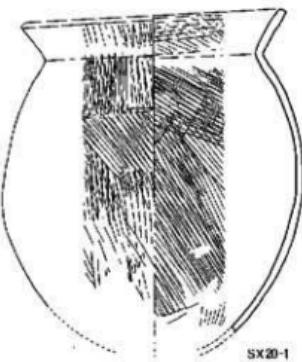
S D23 (第48図) 瓦器2点が出土しただけである。図示したのはそのうちの1点で、杯と思われる。復元口径16.0cm。底部にはヘラ切り痕が残る。良質な胎土で、焼成良好、暗褐色を呈する。口縁端部がわずかに黒ずむ。

S D25 (第48図) 古墳時代前期の土器片が2点出土したが、図示したのは1点だけである。張りをもった胴部から口縁部が丸みをもって屈曲し、やや内湾気味に上方にのびる。端部は小さくつまみあげている。胴部外面は細い継刷毛目、内面はヘラ削りを行う。胎土には砂粒を混え、焼成良好、淡黄褐色を呈する。

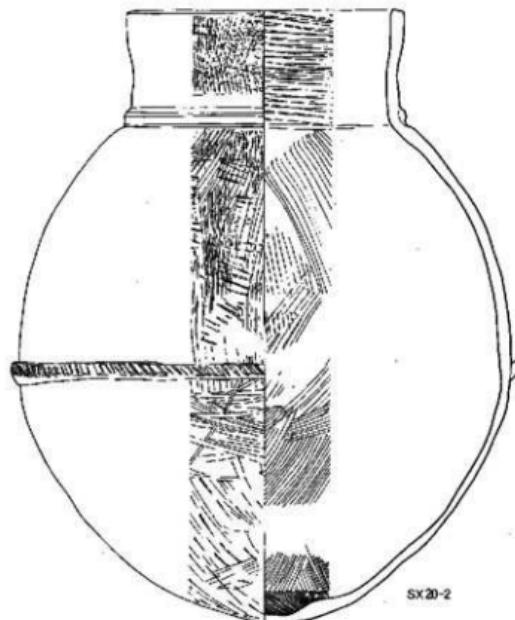
(7) その他の遺構出土遺物 (第49・50図)

ここではS Xの記号をもって扱かった遺構の出土遺物と、柵・掘立柱建物等の一部をなすと考えられるがまとめることのできなかったピットの出土遺物について観察を考う。

S X04 (第50図) 遺構はD-5区にあり、西にS D26が、東にS D09がとりつく水溜状遺



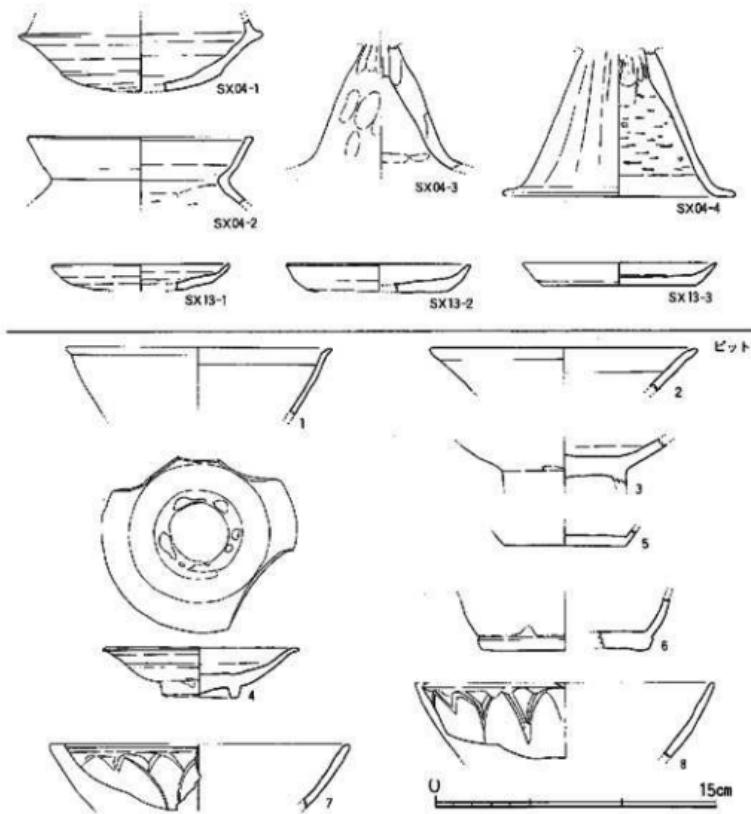
SX20-1



SX20-2

0 20cm

第49図 SX20出土遺物実測図 (1/3)



第50図 SXその他の遺構・ピット出土遺物実測図 (1/3)

構である。1は上層から出土した須恵器杯である。受部は厚く、外方に小さく引き出される。ヘラ削りは体部下半に、時計まわり方向で行なわれる。胎土は砂粒を混え、焼成良好、暗青灰色を呈する。2は土師器甕である。復元口径11.6cm。口縁部は内変気味に立ち上り、端部はナデつぶされる。胴部内面はヘラ削り、他はナデで仕上げる。3・4は土師器高杯片で、脚部を中心に残存する。3が内外面とも指ナデ、押圧で仕上げるのに対し、4は外面縁の研磨、内面横のヘラ削りで調整を行う。ともに精良な胎土を用い、焼成は良好、赤褐色を呈する。3・4は下層から出土した。

S X13 (第50図) 企画性をもって配されたビット・溝からなる遺構である。出土したのは土師器片のみで、うち3点を図化した。1～3はいずれも皿で、復元口径9.5～10.3cm、器高1.3～1.5cmを計る。底部は糸切りが認められ、3にはさうに板状圧痕が残っている。他の部位はナデで仕上げる。いずれも良質の胎上で、焼成良好、赤褐色を呈する。

S X20 (第49図) S X20はD-5区の古河川の肩部分で検出したもので、土器が破碎、集積されていた。この上器を復元したものが図示した1・2の土師器であるが、この他の上器片は全く認められず、あるいは壺棺として使用されていたものかと考えられる。1は緩やかに張った胴部から、口縁部が直線的に外方に延びる壺形上器で、口縁端部は外傾する。内外面とも粗い刷毛目調整を行っている。砂粒を多く混えた胎土で、焼成良好、淡黄褐色を呈する。外面には煤が付着している。2は球形に近い胴部から口縁部が直立する壺形土器で、口縁端部は平坦面がやや外傾する。頸部と胴最大部に台形状の突堤を一条ずつめぐらせ、後者には右下りの刻目をヘラで入れる。内面と外面上半部は粗い刷毛目調整、胴凸帯下5.0cmには横の粗い研磨、それより底部までには板状工具による縱方向の強いナデがみられる。また外面胴部上半部には刷毛目の間に横の連続タタキの痕跡が残る。胎土は砂粒を混えるものの精良で、焼成堅緻、暗褐色を呈する。

ビット (第50図) 各ビットとも出土した遺物は0～数点で、しかも細片が多い。ここでは比較的残りのよかつた青・白磁類を扱うことにめた。

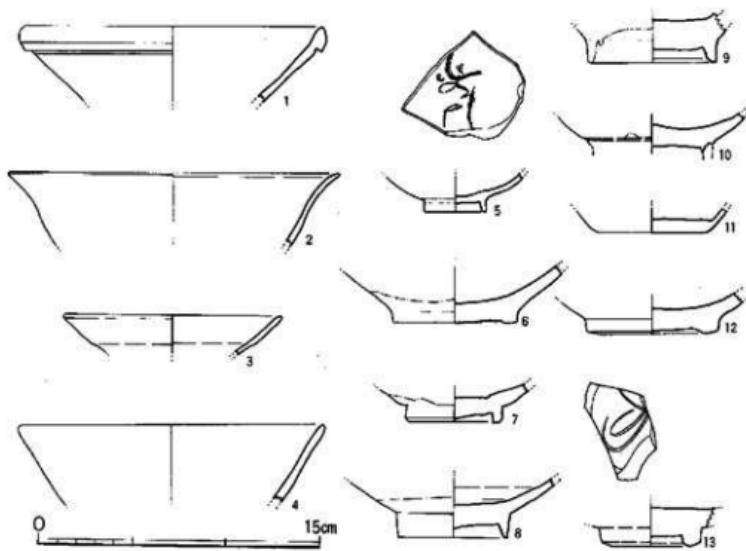
白磁 (1～6) 1～3は椀である。1・2の口縁は短く外反し、内面口縁下に一条の沈線を設ける。胎土は粗く、1には灰白色、2には薄い黄色味をおびた釉を施す。3には灰白色の釉を高台外面までかける。4・5は皿である。4は内面見込みの釉を輪状に搔き取り、目跡を残す。黒色粒子を含み高台外面まで施釉する。5は平底を呈し、内底と体部の境に沈線を有す。6は壺の底部片で、外底と内面は露胎し、灰白色的釉には買入が多い。

青磁 (7・8) 外表に蓮弁文を施す龍泉窯系椀で、7は透明な淡緑色、8はくすんだ灰緑色の釉をかける。

(8) 包含層・表土出土遺物

包含層は主として調査区の南半部にみられた褐色～灰黒色の砂質土で、土師器・須恵器・白磁・青磁などの土器類と石器・滑石製品・鉄滓などの遺物類を含んでいた。表土層も一部近・現代の遺物を含むが、多くは包含層の遺物と大差がなかった。しかしいずれも細片で、ここでは磁器類を中心に観察を加える。

白磁 (1～3・6～11) 1は大きめの玉縁山縁をなす椀で、外面折り返し部分には沈線状に段がつく。2は緩く外反する口縁部が口禿となった椀で、露胎部は茶褐色を発する。薄い器肉をなす。6～11は椀底部である。いずれも底部の器肉は厚く、外面体部下半から施釉されていない。6・12の高台は低く、7はやや高め、8・9は比較的シャープに直立する。3は皿と



第51図 表土、包含層出土遺物実測図 (1/3)

考えられ、内面下半に段をめぐらす。器内は薄い。12は平底の皿で、灰白色の釉を全面に施す。1・3・8・9・11の胎土には黒色粒を含む。

青磁(4・13)ともに龍泉窯系の碗片である。淡灰緑色の釉で、貫入がみられる。4の体部は直線的に外方へ延びる。13の底部の器肉は厚く、高台は低い。内底見込みには太い沈線がめぐり、内側にヘラによる草花文を施す。

青白磁(5) 体部上半を欠失する小碗で、径の小さい直立する高台をもつ。くすんだ青白色釉を施すが、蓋付部～高台内面は施釉後搔き取っている。内底にはヘラの片彫りによる花文を施す。福建省の産か。

図版23の包-1は土師器皿である。口径14.8cm、器高3.1cmを計る。底部は糸切りである。2は瓦碗片で、復元口径16.0cm、器高4.8cmを計る。小さな高台をとりつける。

(9) 小結

第2地点の古墳時代～中世に至る遺構は、そのほとんどを黄褐色粘質土上上で検出したが、西南側では弥生時代古河川の覆土上上で見出した。いずれの遺構も後世の削半を受けて、残存状態は良くない。

古墳時代の遺構は少なく、土壤などが散見される程度である。その内でS X20は旧状をとどめなかつたが、豪棺墓であった可能性が強い。

古代・中世の遺構は、発掘区の西側を中心とした櫛・掘立柱建物・堅穴住居・土壤などからなる集落跡と、主として東側で東流する溝などの水利遺構からなる。後者は水溜状遺構も伴なつてあり、水田に関連するものと考えられる。前者は、集落の西側の一部が調査区で検出されたにとどまり、その主体は第2地点の西側に拡がるものと予想される。またこれと地点を重複して一部墓（土壤墓）がみられる。

集落跡は遺構の切り合いや重複関係がみられ、単一時期の所産ではないことを表している。掘立柱建物の主体をなす2×3間の南北棟の方位をみると、東に7°30'ふれるSB01と、西に2°～6°ふれるSB02・03・04・05・07に分れる。SB01とSB02が切り合う（先後関係不明）ことから両者間に時期差を求めるよう。さらに西にふれる一群中にもSB05がSB04・07と重複する。建物の方向が時期差を示す指標となるならば、検出した掘立柱建物は少なくとも3時期の建替があったことが知られる。そうでなくとも、重複関係から1時期の建替えは確実である。またSB11・12、SB08・09は同じ建物の建替え状況を示していると考えられる。

少ない出土遺物から判断すれば、集落を構成する各遺構の実年代は11世紀後半～14世紀初頭と考えられる。そのほとんどが12・13世紀で、第3地点・第8地点で検出した掘立柱建物を中心とした集落跡が11世紀代を主体とするのと異なる。

^{註1)} 般盛神社関係の應永四年（1394）の占文書によれば、田村に瀬戸口・鍛冶屋・岡藤・太郎九郎・次郎右衛門・堀之内・成助・三郎四郎などの名称をもつ屋敷があったことが知られる。また江戸時代の『筑前国統風土記附録』などには田村内で、村落の移動があったことが記されている。これらの記載は発掘調査結果と即応するものではないが、少なくとも14世紀の村落は発掘区内からははずして考えることができる。また、平野の中央部という地理的条件からは村落の移動ということは興味深い所である。

第2地点の北側（第10地点）は1984年度学校建設に伴って発掘調査を行う予定である。集落がどのように拡がるのか期待される所である。

註1) 福岡市教育委員会「般盛神社関係史料集」1981

2) 加藤一純・鷹巣周成「筑前国統風土記附録」寛政10年（1798）

図 版





1. 田村遺跡 2. 高柳遺跡 3. 次郎丸高石遺跡 4. 鶴町遺跡 5. 四箇遺跡

田村遺跡周辺航空写真(1/5万, 1980年11月撮影)

図版2



第1地点

1 南より

2 東より

2



2

第1地点

1 溝・土壤

2 SX01抗列(北東より)

図版4



2



SX01杭列

1 南より

2 遺物出土状況



第2地点全景（東より）

図版6



1



2

1 第2地点西侧(南より)

2 縄文時代埋葬状遺構



1



2

第2地点古河川

1 東より

2 南西より

図版8



1



2

古河川5・6区

1 東より

2 南西より



SX17棚状造構

1 西より

2 東より



1



2

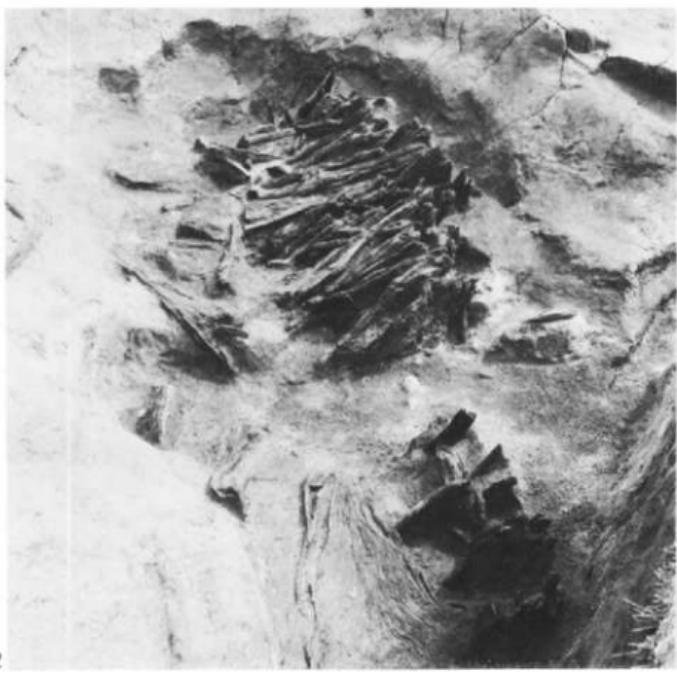
SX17棚状遺構

1 北より

2 細部



1



2

SX18柵状遺構

1 北より

2 西より



1



2

SX16水溜状遺構

1 東より

2 木製農耕具出土状況



1



2

1 SX16・SX17

2 古河川4区とSX15



W159



W616・W617



W666



W357・W433

古河川5・6区 木製品出土状況



1



2

古河川3区

1 東より

2 SX14石組造構



1



2

SX13石組造構 1 西より 2 北より



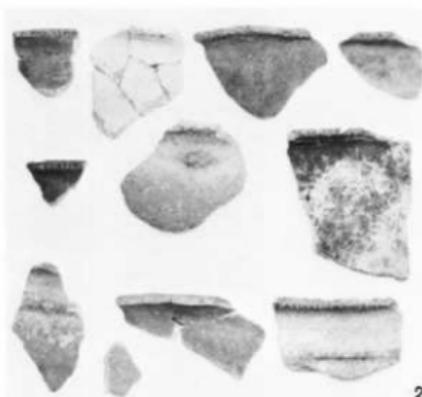
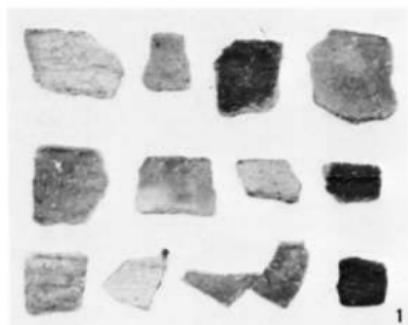
1



2

1 古河川1・2区(南より)

2 古河川1区(北より)

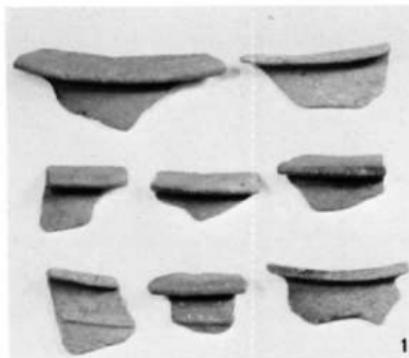


▲1·2·3 SX01出土土器



出土土器 I

▼4·5·6 第2地点出土绳文式土器

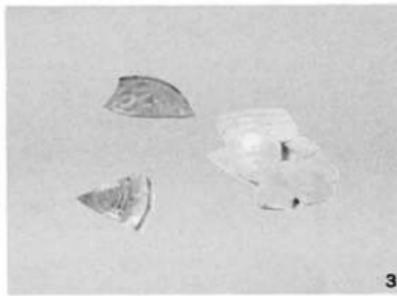


1



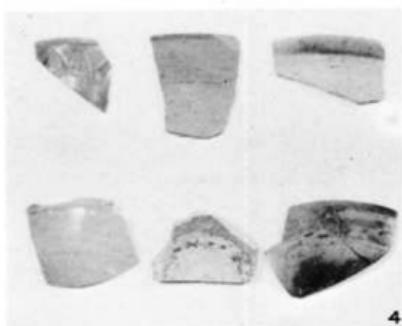
2

1・2 第2地点古河川出土土器



3

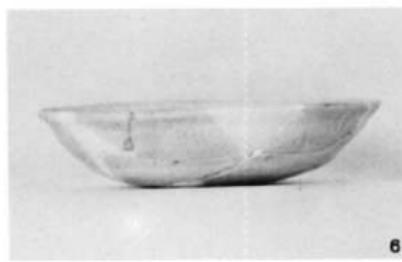
4~7 SB掘立柱建物出土土器



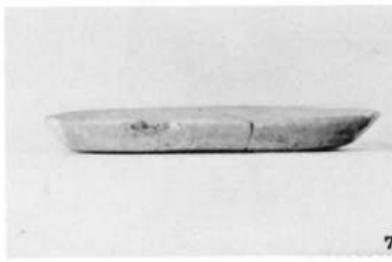
4



5

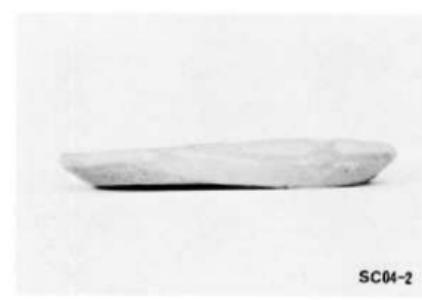
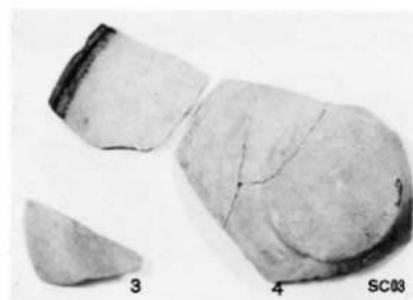


6



7

出土土器II



出土土器Ⅳ



SK24-1



SK24-4



SK24-2



SK24-5



SK24-3



SK25-3



SK25-1

SK25-2



SK49-2

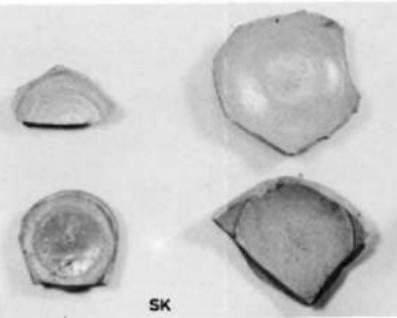
SK49-1



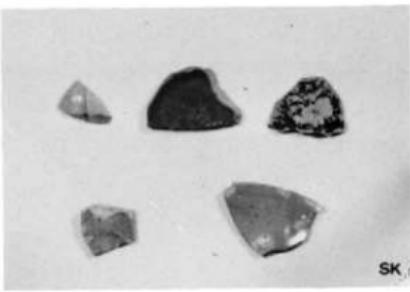
SK50-2



SK50-1

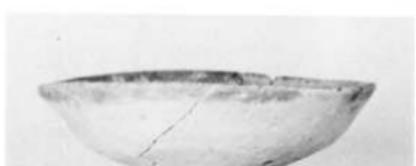
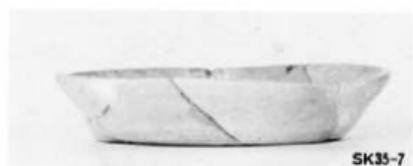


SK

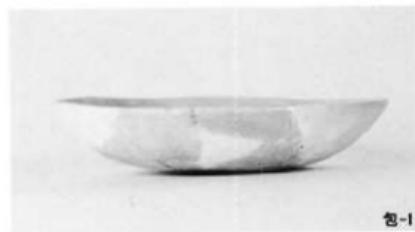
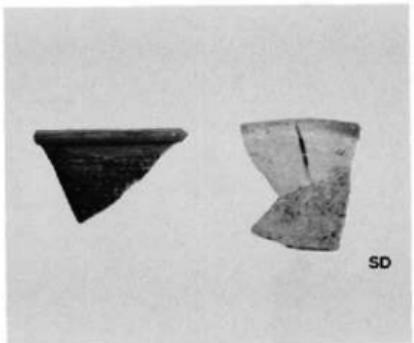
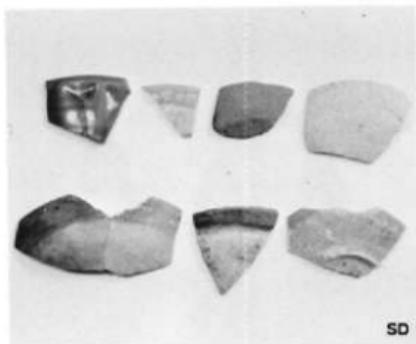


SK

図版22



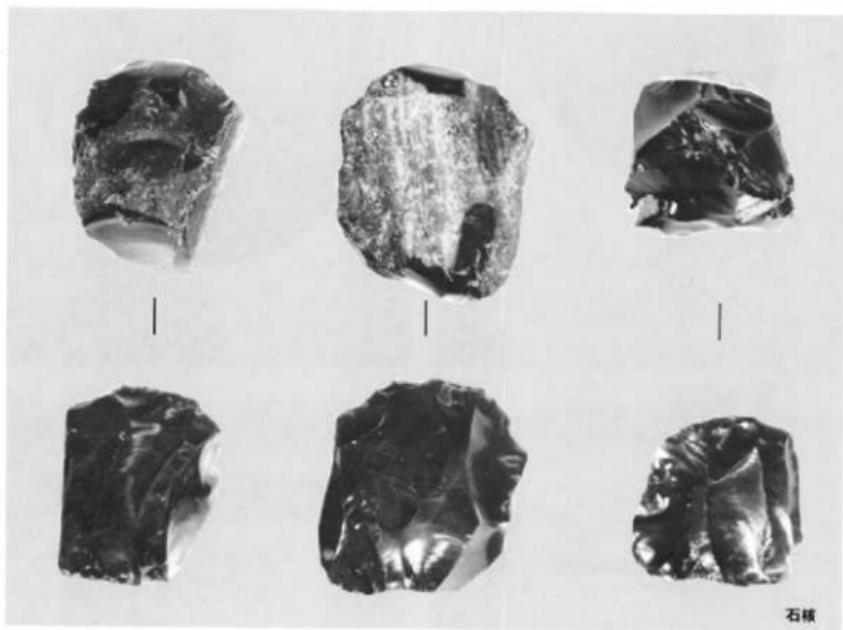
出土土器V



出土土器VI

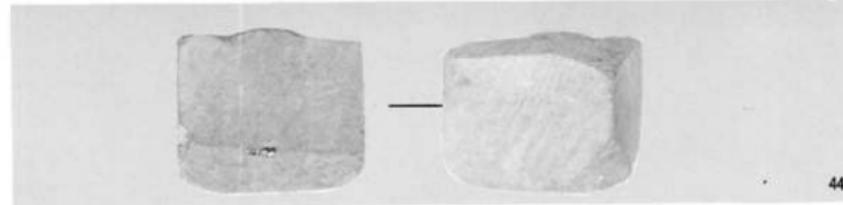
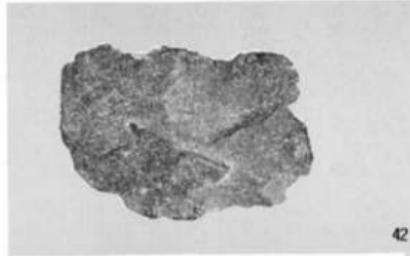
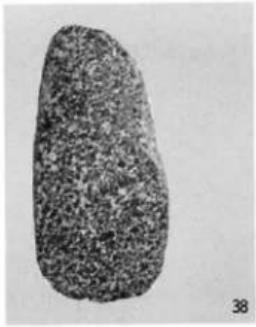
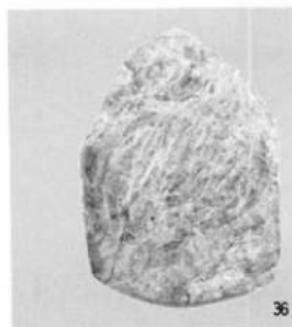


石鏃・石錐



石核

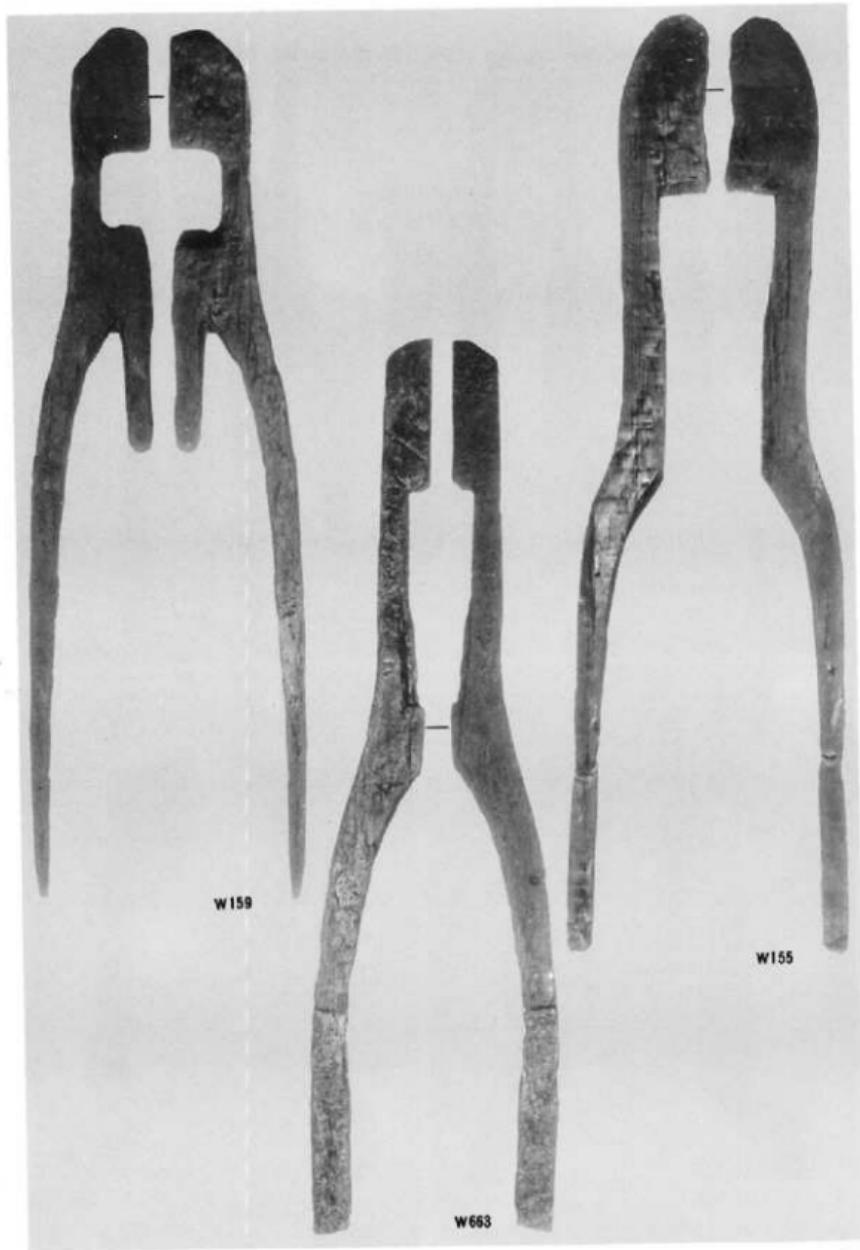
出土石器 I (縮尺約1/2)



出土石器Ⅱ



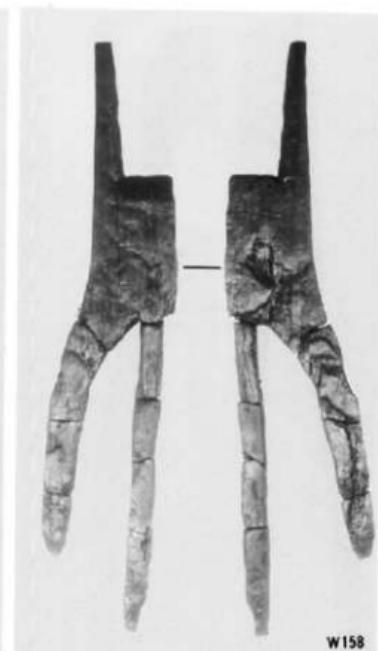
出土木器 I



出土木器Ⅱ



W154



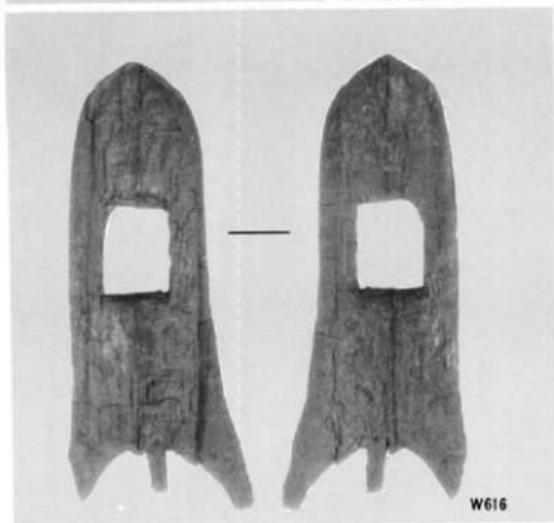
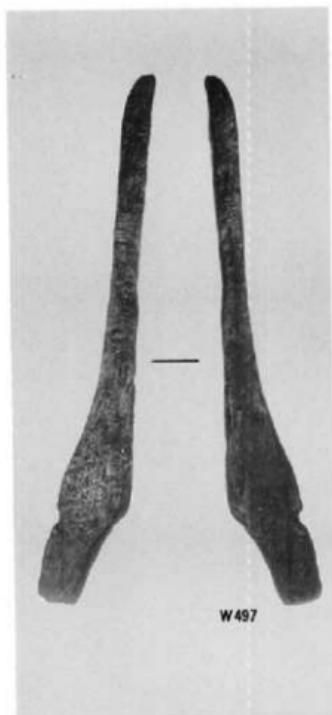
W158



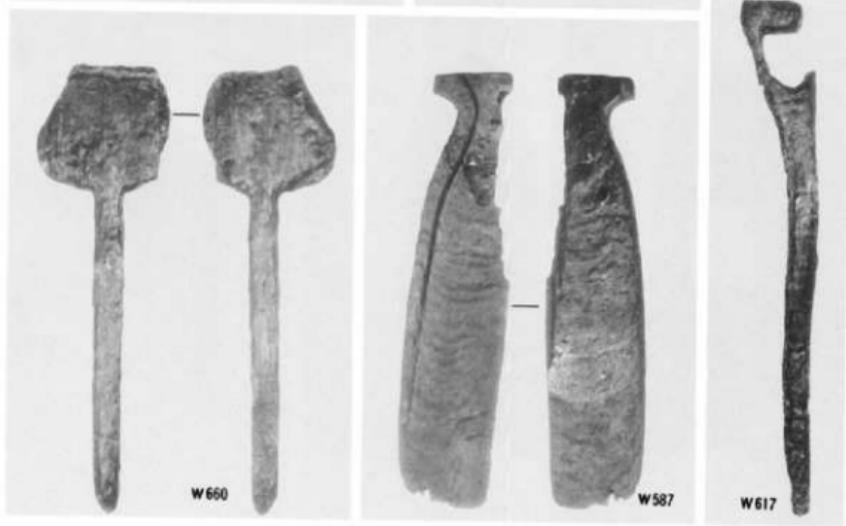
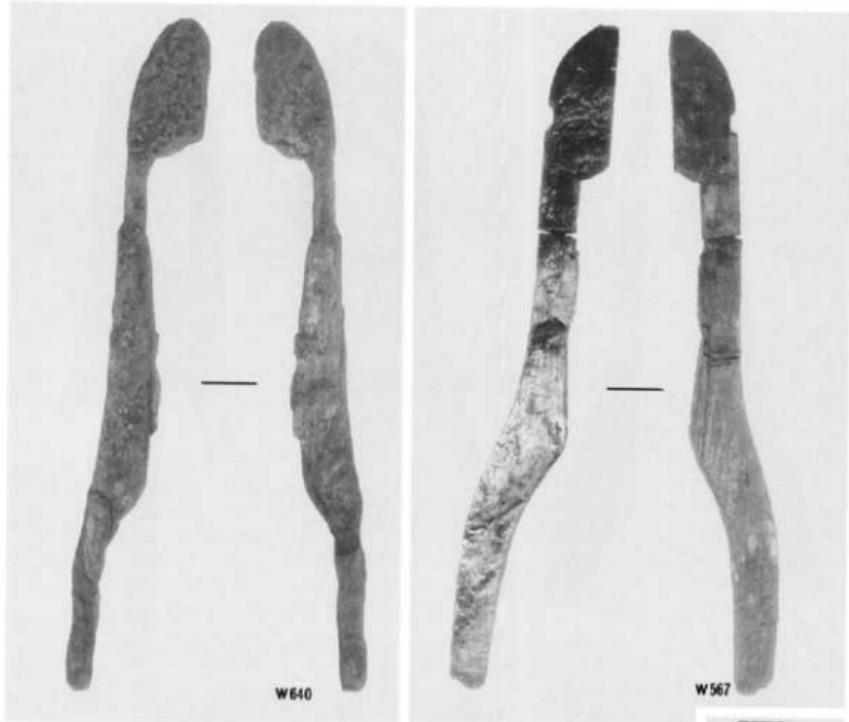
W667



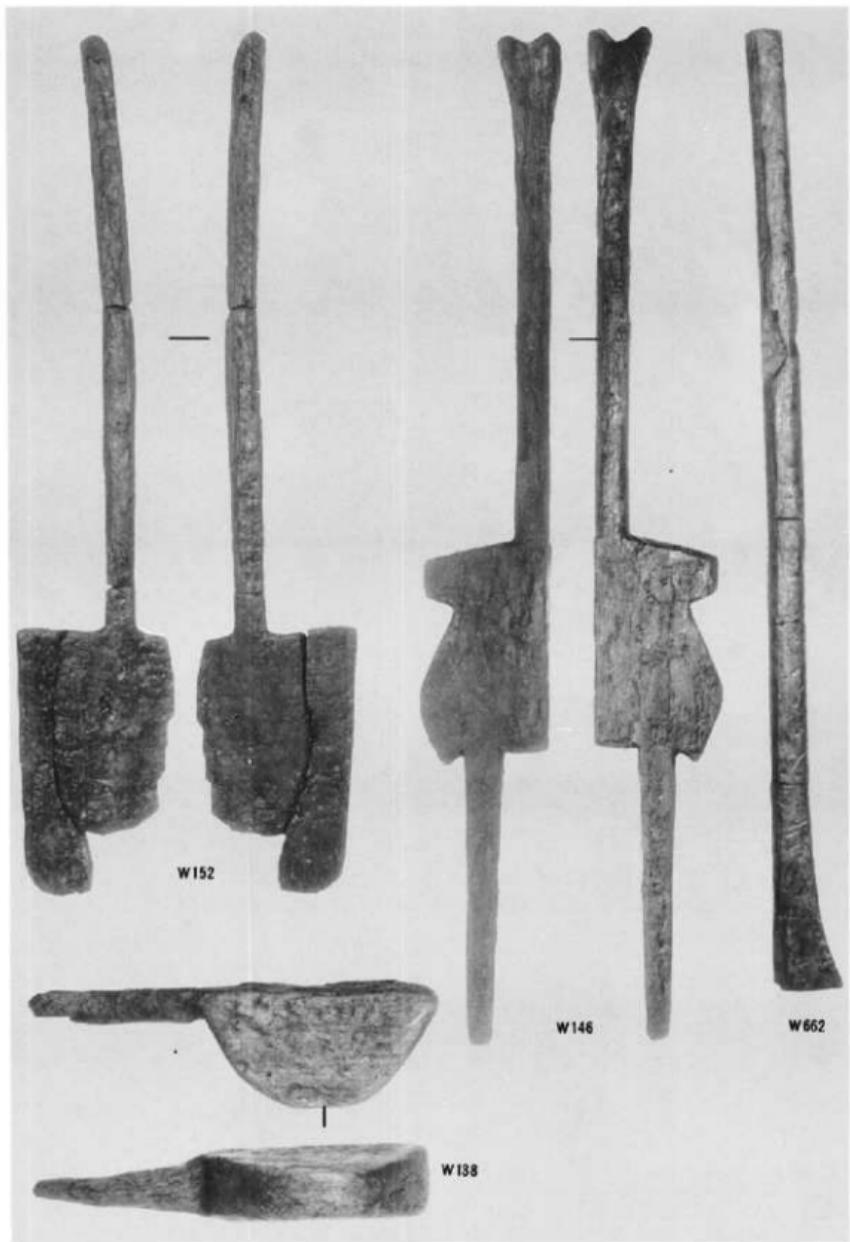
W668



出土木器Ⅳ



出土木器V



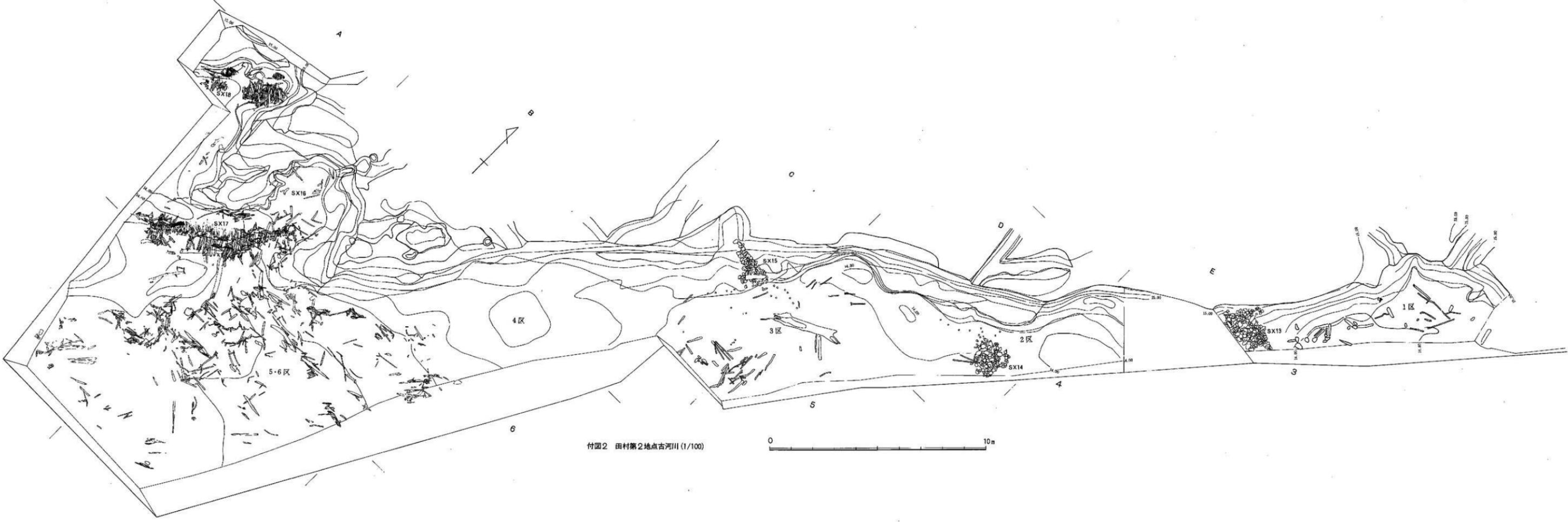
出土木器Ⅶ



田村遺跡第1・2地点現況航空写真（北より、1983年12月撮影）



付図1 田村遺跡第2地点全体図 (1/200)



福岡市早良区

田村遺跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集

1984年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800

田
村
遺
跡
II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集

1984

福岡市教育委員会